

令和 7 年度

Leadership Training for Teachers
and Curators to Enhance
Art Museum-based Learning

美術館を活用した
鑑賞教育の充実のための
指導者研修

2025年8月4日－8月5日



はじめに

20年間の集大成



一條 彰子 Akiko Ichijo

2022年より国立アートリサーチセンターのラーニンググループリーダー。1998年～2022年まで、東京国立近代美術館にて教育普及を担当。本研修の立ち上げのほか、対話鑑賞を行なう解説ボランティアの育成・運営、鑑賞教材の開発、ビジネスパーソンや来日外国人に向けた有料鑑賞プログラムの実施などに携わる。

今年の夏も、国立美術館が毎年実施している鑑賞教育の指導者研修が、京都国立近代美術館および京都テルサを会場に開催されました。全国の小・中・高等学校で図画工作や美術を教える教員をはじめ、特別支援学校の教員、指導主事、学芸員など計68名が参加し、ひととき暑い京都の夏を、互いに熱意をもって過ごしました。

昨年に引き続き、全体テーマは「美術鑑賞で何が起きているのか」でした。休館日の美術館展示室において、受講者自身が探求的な鑑賞を体験するグループワークでも、さらに講演、事例紹介、ワールドカフェなどでも、多様なプログラムを通して「鑑賞している時、何が起きているのか」「鑑賞教育は何を生み出すのか」を多角的に考える機会となりました。

指導者研修は平成18年に始まり、今年で20周年を迎えます。本報告書では、この節目にあたり、巻末に20年間の記録をまとめました。振り返れば、研修の形態や内容は時代とともに変化し、その都度、多くの方々のご協力とご尽力によって支えられてきたことを、改めて実感します。

この間、鑑賞教育は全国的に少しずつ認知を広げ、実践の場も増えてきました。コロナ禍を契機にオンラインによる連携も進み、のべ1883人にのぼる受講者が、それぞれの地域や職場で着実に実践を重ね、鑑賞教育の裾野を広げてくださったことと思います。

さて、20年にわたり改良を重ねてきた本研修ですが、この形式での開催は今回をもって一区切りとなります。令和9年度より、新しい形で再開する予定です。現在はそのための調査・検討を進めており、「教員と学芸員が共に学ぶ鑑賞教育研修」という基本理念を継承しつつ、これからの教育環境や社会の変化に応じた内容を検討しています。これまでの課題に向き合いながら、より持続的で実りある研修のあり方を模索してまいりますので、どうぞご期待ください。

最後に、研修の開催および本報告書の作成にあたり、多大なるご協力を賜りました皆様に、心より御礼申し上げます。

研修の流れ

Day 1 | 2025年8月4日

会場 京都国立近代美術館

10:00 - 10:20

開講式・オリエンテーション

開講の挨拶：福永 治
京都国立近代美術館長



10:20 - 11:10

講演
「鑑賞って面白い！
—学校と美術館の連携について考える—」

講師：平田 朝一
文化庁参事官（芸術文化担当）付 教科調査官
文部科学省初等中等教育課程課 教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官

鑑賞教育の具体的な事例と
学習指導要領のポイントを知る



11:20 - 16:20

グループワーク



展示室で実物の作品を
鑑賞しながらワークを
体験し、授業やプログ
ラムの具体的な設計に
ついて対話を重ねる

16:30 - 17:10

作品前で各グループワークの成果発表と講評



気づきや発見、アイデアを他のグループ
に発表・共有し、さまざまな知見を得な
がら自身の考えをさらに深めていく

17:20 - 17:40

グループワーク全体講評

講評者：平田 朝一
文化庁参事官（芸術文化担当）付 教科調査官
講評者：松永 かおり
世田谷区立玉川中学校 校長



Day 2 | 2025年8月5日

会場 京都テルサ

10:25 - 10:40

ミニレクチャー
「美術館での鑑賞におけるアクセシビリティについて」

講師：鈴木 智香子 国立アートリサーチセンター 研究員



10:40 - 12:50

事例紹介

山本 裕史 東京都立足立特別支援学校 教諭
「ICT でひらく鑑賞教育の可能性」

端山 聡子 東京国立近代美術館 企画課 教育普及室長
万木 麻里 横浜市立汐見台中学校 教諭
古藤 陽 横浜美術館 教育普及グループエデュケーター／学芸員
「教員と美術館職員の授業づくりからシンポジウムまで」

大浦 美咲 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 教育普及担当
「丸亀市の全小学3年生を美術館へ 『カムカム・ミモカ』の活動報告とこれから」

学校と美術館による多様な連携事例を通して、授業
づくりのヒントやプログラム実践への可能性を探る



13:50 - 14:40

講演 「鑑賞の2つの側面と、作品についての理解」

講師：神野 真吾 千葉大学教育学部 准教授

作品理解を深めるために重要な「文脈」について考え、
鑑賞教育をより深く意義のあるものとして捉え直す



15:00 - 16:50

ワールドカフェ



たくさんの気づきと意見を他の人とシェアし、
「この研修で何を学んだのか」を全員で話し合う

16:50 - 17:00

閉講式

閉講の挨拶：一條 彰子
国立アートリサーチセンター ラーニンググループリーダー



ツール紹介・用語解説

これからこの報告書を読み進めていくと、いくつかの教育ツールの名前や用語が登場します。本研修への理解をより深めていただけるよう、このページでご紹介します。

鑑賞教材

「国立美術館アートカード・セット」

国立美術館と株式会社求龍堂が共同制作した、鑑賞学習のための教材です。「見る、考える」だけでなく「話す、聞く」という言語活動も取り入れて、楽しく鑑賞の基本を身につけます。カード作品は、東京国立近代美術館、国立工芸館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館の5館の所蔵作品から、子どもの対話がはずむ計65作品が選ばれています。学校の授業で、美術館訪問前の鑑賞の導入として活用いただけます。

国立美術館アートカード・セット

【編集・発行】独立行政法人国立美術館／株式会社求龍堂

【企画・監修】国立アトリサーチセンター

【発 売】株式会社求龍堂

【発行日】初版 | 2011年3月31日 改訂第五版 | 2024年9月12日

【価 格】2,800円＋税



各大型書店、国立美術館各館のミュージアムショップ、ネット書店でお求めいただけます。美術館訪問の事前学習として活用する際は、各美術館で貸出も行なっております。

販売・貸出についての詳細はこちら
<https://ncar.artmuseums.go.jp/activity/learning/learningresources/#artcard>



オンライン鑑賞教材「鑑賞素材 BOX」

主に小学校から高等学校までの授業で活用されることを想定したデジタル鑑賞教材です。国立美術館所蔵の名作を、高精細画像で電子黒板へ投影したり、タブレット端末へ配信したり、ワークシートを作成することができます。授業準備にあたっては、「図工・美術のキーワード」や「他教科へのひろがりキーワード」を使って作品を選ぶことができます。授業で活用するためのアイデア集も掲載しています。

詳細はこちら
<https://box.artmuseums.go.jp/>



対話型鑑賞（対話鑑賞）

一般的には、文字通り“複数人で作品をみながら対話をしていく鑑賞”と認識されています。その源流となっているのは1980年代にニューヨーク近代美術館（MoMA）で開発されたVTC（Visual Thinking Curriculum）という教育プログラムです。このVTCが1992年に「対話型鑑賞」と意識され、日本の美術館へ紹介されました。現在では「対話を通した鑑賞」「対話鑑賞」「対話による鑑賞」というさまざまな呼称も用いられながら、美術館にとどまらず、教育、医療、ビジネスパーソンなど多岐に

わたる領域で応用されています。

対話型鑑賞は、1回で終わる作品鑑賞のスタイルや鑑賞法というイメージを持たれる方もいらっしゃるかもしれませんが、本来は継続的・連続的な教育プログラムです。言い換えれば、長期的な指導のカリキュラムがあったうえで、対象者の発達段階などを念頭に置きながら作品を選定し、鑑賞する順番や組み合わせなどを考慮して展開していくことを前提に開発されています。



Leadership Training for Teachers and Curators
to Enhance Art Museum-based Learning
美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

Day 1

2025年8月4日

会場：京都国立近代美術館

Theme

鑑賞って面白い！ —学校と美術館の連携について考える—

美術館などを活用した鑑賞の授業は、ますます多くの学校現場において実施されていると思います。しかしどうすれば美術館とうまく連携し、どんなことを学びとして児童生徒に伝えることができるのか、まだ自信が持てないという方もいるのではないのでしょうか。本研修の冒頭では中学校の美術教諭として教育現場での経験を積み、現在は教科調査官である平田朝一氏から鑑賞教育の具体的事例と学習指導要領のポイントを講演いただきました。



Speaker

平田 朝一 Tomokazu Hirata

文化庁参事官（芸術文化担当）付教科調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官

1994年に岡山県の中学校で美術科教諭として赴任。その後2012年から岡山県総合教育センター教科教育部指導主事、2020年から岡山県内の中学校で指導教諭を務める。2006年の第1回目の指導者研修に参加し、10周年のシンポジウムの際は、岡山県の指導主事・指導者研修の過去の実践者として研修で学んだ成果を発表した。2021年より現職。

美術館を活用した鑑賞教育の工夫

今年の研修のテーマは「美術鑑賞で何が起きているのか」です。子どもたちの中で何が起こり、どんな変化があるのか、どんな学びが生まれているのかをこの2日間で考えていただけたらと思っています。さて、皆さんは美術館に児童生徒を引率したことがありますか？小学校図画工作科の学習指導要領の「内容の取り扱いと指導上の配慮事項」の中に「(8) 各学年の『B鑑賞』の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用したり、連携を図ったりすること」と示されています。ここでの「地域の美術館」とは博物館も含めて、親しみのある美術作品や生活の中の造形などを展示している地域の施設や場所のことを示しています。またその利用においては、「鑑賞を通して『思考力、判断力、表現力等』を育成する目的で行うようにするとともに、児童一人一人が能動的な鑑賞ができるように配慮する必要がある」とも示されています。先生方が美術館と連携される際には、それぞれの施設が提供する教材や教育プログラムを確認しておくとういでしょう。私自身は岡山県立美術館で開催された国吉康雄展の鑑賞プログラムを考えることをスタートに、美術館と連携するようになりました。その際、まずは、美術館の展示室に質問カードを準備しました。そうすると、子どもだけでなく、会場にいた一般の方もそれを使いながら作品を鑑賞したり、周りの人と作品について話したりする様子が見られました。同時に、作品の中に描かれていた張子の虎を厚紙で作成するワークショップも行いました。また、訪れた美術館の近くに作者の生家跡があり、秘密の地図をつくって子どもたちが訪れることができるようにし、美術館を出る前に子どもたちへのミッションとして渡すこともしました。この他、美術館との連携ではアートカードを作成し、国吉康雄の絵札セットもつくりました。裏返しにするとパズルのようになっていて、組み合わせると複数の絵になるのです。これらを授業の導入で使用したり、子どもたちが読み札の内容を考えるカルタなどを考えたりするなど様々な活用のプログラムも用意しました。

その後、「アート・トラベリング・トランク」を作成し、県内のハブ教員（連携の中核となる人材）に保管していただいて、各学校に貸出ができるようにしました。この中には、宮本武蔵の掛け軸3幅、説明書（実践集）作品の画像を収めたCD、備前焼の器などを中心にその他の焼物の器が入っています。掛け軸は表装部分



まで印刷しているレプリカで、掛け軸3本を使用して作品の並びを考えたり、筆づかいをよく鑑賞して、空中でその筆づかいをなぞることで表現の工夫を考える授業につなげたりもしました。ここでは、「アート・トラベリング・トランク」に入っている備前焼の資料を活用した鑑賞の授業について紹介します。備前焼について、子どもたちに「お家に備前焼ある？」と聞くと、全員「ある」と答えます。しかし「そのよさは何？」と聞くと、なかなか答えられない。そこで、備前焼のよさを言葉で言えるようにしようと思い授業を実践しました。「アート・トラベリング・トランク」には備前焼の他に、萩焼、有田焼も入っています。他の器と比較して、それぞれの器の特徴を考えたり説明を受けたりすることで、生徒たちはどれが備前焼か分かるようになりました。またトランクの中には、備前焼作家の方に作成してもらった備前焼の特徴が確認できる4種類の窯変チップも準備しており、備前焼の様々な特徴を知ること、子どもたちは授業の終わりには、備前焼のよさや特徴について述べるできるようになっていました。さらに、学んだことを活用して実際に美術館で備前焼の作品を鑑賞する授業も行いました。このように、先生方の近くの美術館でも様々な鑑賞のツールがあるかと思いますので、美術館のホームページで確認してもよいでしょう。あるいは学芸員の方と相談してみると様々な可能性が見えてくると思います。いろんな鑑賞のプログラムを用意されている美術館も多いので、自分が思っていた以上の連携授業ができる可能性があります。事前・事後を考えながら美術館の方に相談していくことも考えられます。また学芸員の方に学校に来ていただき、出前授業をお願いすることもできると思います。もちろん美術館だけではなく、地域の作家の方と連携することも考えられるでしょう。学校と美術館をいかにつなげていくのか。学校で学んだことをどう生かすのか、美術館で本物の作品を効果的に鑑賞するために、学校でどのように授業を工夫するのか考えることも大切です。

学習指導要領から考える授業のあり方

小学校図画工作科の学習指導要領の「2内容」の「B鑑賞」アに着目してみましょう。第1学年及び第2学年では「ア 身の回りの作品などを鑑賞する活動を通して、自分たちの作品や身近な材料などの造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げること」とあります。第3学年及び第4学年では「身近にある作品などを鑑賞する活動を通して、自分たちの作品や身近な美術作品、製作の過程などの造形的なよさや面白さ、表したいこと、いろいろな表し方などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げること」とあります。また第5学年及び第6学年では「親しみのある作品などを鑑賞する活動を通して、自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、生活の中の造形などの造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深めること」とあります。

中学校美術科の学習指導要領の「2内容」の「B鑑賞」ではどうでしょうか。「(1) 鑑賞に関する資質・能力」の「ア 美術作品などの関する鑑賞」には「(ア) 感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現に関する鑑賞」と「(イ) 目的や機能などを考えた表現に関する鑑賞」があります。ここで、「(ア) 感じ取っ

たことや考えたことなどを基にした表現に関する鑑賞」の授業例をご紹介します。ある中学校では、阿修羅像を写真などを用いて鑑賞する授業が行われました。生徒からは阿修羅像の服装に着目し「身に付けているものがステテコに似ていて、楽そう」「ネックレスをつけている」など様々な意見が出ました。生徒たちが阿修羅像には顔が3つあることに気づき、それぞれの表情をもっと知りたいと思ったタイミングで教師が3つの顔のプリント資料を配布しました。生徒たちはじっくり鑑賞すると周囲の生徒と話をし意見交換します。そして、生徒がポーズに着目した時に教師が等身大ほどの全身像を黒板に張り出し、実物の大きさを体感しました。生徒たちはその写真の前に立ち、阿修羅像と同じようなポーズをとってみて、表情を真似するなど、自分たち自身が作品に入り込むような鑑賞を行い、その後、作品について更に考えていました。

美術の働きや美術文化に関する鑑賞

同じく中学校美術「B鑑賞」「イ 美術の働きや美術文化に関する鑑賞」について、事例を紹介します。歌川広重の《名所江戸百景 大はしあたけの夕立》とゴッホがこの版画を模写した《雨の大橋、広重作品模写》とを比較した鑑賞の授業です。生徒は、作品をじっくり鑑賞して、自分の意見をもった後に友達と話し合いをしました。生徒たちからは「描かれた場所は日本だと思う。橋を渡る人々を描いている。浮世絵でよく見る」という鋭い意見が出ました。この後、他の浮世絵や印象派の複数の作品を比較して鑑賞し、その相違点や共通点について考えていました。

次に高等学校芸術科（美術Ⅰ）学習指導要領の「2 内容」の「B鑑賞」についてです。ここでは、尾形光琳の《燕子花図》の鑑賞授業を紹介しましょう。この作品は屏風です。それをハガキサイズにし、あらかじめ切ったものを、生徒がパズルのようにして1枚1枚絵を合わせていきました。作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などについて考えるとともに、絵の中でどこが折れるのかを意識させることで、「写真で見ると絵がひとつながりに見えるけど、実はここで折れている」というように、作品の様式まで考えて文化的な視点で鑑賞を行っていました。

見方や感じ方を広げる、深める

様々な鑑賞の授業をご紹介しましたが、先生方の中には子どもたちが鑑賞の授業に意欲的になってくれるか不安に思っている方もいらっしゃるかもしれません。私は鑑賞の授業をする際、いつも子どもたちの表情を見ています。すると驚いたり考えたり、横の友達に話しかけたりする様子に気づきます。また、様々な意見や、他とは違う意見が出てくることもあります。更に子どもたちの変容から見方や感じ方が深まっていることに気付くこともあります。その際に、大事なのは作品を鑑賞する際に、一人一人が自己と対話して、まずは自分の考えをしっかりとつことです。そして、その後に他の人と対話し、一人では気づかなかったことに気づくことが大事です。ここで終わらず、更に自分で考えてみることで、自分の考えを深めていくことが大切です。中学校美術科の学習指導要領の「3 内容の取り扱い」（第2学年及び第3学年）のところに、「(2)『A表現』及び『B鑑賞』の指導に当たっては（中略）、自分の価値意識をもって批評し合うなどして対象の見方や感じ方を深めるなどの言語活動の充実を図ること」とあります。

小学校図画工作科の学習指導要領の教科の目標には次のように書かれています。「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力」、中学校美術科では「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力」、そして高等学校芸術科（美術Ⅰ）では「生活や社会の中の美術や美術文化と幅広く関わる資質・能力」、高等学校芸術科（工芸Ⅰ）では「生活や社会の中の工芸や工芸の伝統と文化と幅広く関わる資質・能力」とあります。こうした資質・能力を育成するためには、「A表現」だけではなく「B鑑賞」の見方や感じ方を深めることも大切です。ぜひ「見方や感じ方を深める」ことを意識して鑑賞の授業を進めてください。そのためには体験や出会いをどれだけ私たちが準備できるか考えなければいけません。今日からの2日間は、ぜひ生徒と教師の両方の立場に立って、体験してください。

講演スライドの抜粋

地域の美術館などの利用や連携

小学校
図画工作

(8) 各学年の「B鑑賞」の指導に当たっては、児童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用したり、連携を図ったりすること。

● 美術館などは、作品の保存や収集、展示、研究、教育普及など、様々な目的をもっている。それぞれの施設に応じて特性が異なるので、これらに配慮した上で、施設が提供する教材や教育プログラムを活用する、学芸員などの専門的な経験や知識を生かして授業をするなど、多様な取組が考えられる。

2

見方や感じ方を深める

小学校図画工作

中学校美術

高等学校芸術
(美術Ⅰ)

教科、科目の目標から...

作品などに対する自分の見方や感じ方を深める

美術や美術文化に対する見方や感じ方を深める

価値意識をもって美術や美術文化に対する見方や感じ方を深める

10

美術館との連携

これまでお話ししましたように、美術館では鑑賞プログラムや鑑賞ツールが準備されるようになりましたが、それぞれの地域や美術館によって実情は違うと思います。例えば、鳥取県の美術館では、バスをチャーターし、小学生の間に必ず美術館に来館できるように進められているようです。こうしたことができない地域では、例えば、ICT端末を利用して学校と美術館をつなげることもできるかもしれないですし、学芸員の方に学校に来てもらうこともできるかもしれませんが、また、子どもたちを連れて行く場合には、実際に美術館に行く前に、学校でどのような事前授業をするか、どのようにすれば子どもたちが効果的に本物を見られるか、また学校でどんな事後授業をしたらいいのかなどを考える必要があると思います。また、これを美術館と一緒に考えていくこともできると思います。子どもたちのことを知っているのは学校の先生です。今までどんなことを学んできたのか、どんな様子なのか、美術館で鑑賞することでどんな力をつけさせたいと思っているのかを美術館の方にお伝えする。前もって話し合いをすることで事前のプログラムを提案していただけることもあります。このように、学校と美術館で連携をすることで、先生一人で考えた以上の連携が実現することが考えられます。

さて、研修のテーマは「美術鑑賞で何が起きているのか」です。この2日間で、ファシリテーターの先生方、美術館の方、一緒に研修する先生方、そして美術館の本物の作品との出会いの中で、テーマについて考えていただけたらと思います。どんなことを先生方がお考えになるのか楽しみにしています。



Leadership Training for Teachers and Curators
to Enhance Art Museum-based Learning
美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

Day 1
2025年8月4日

会場：京都国立近代美術館

GROUP WORK

グループワーク概要

1日目に行なわれたグループワークでは、約70名の受講者が10名程度のグループに分かれ、京都国立近代美術館の展示室内で実際に作品を鑑賞しながら「美術鑑賞を通して、鑑賞者のなかで何が起きているのか」「展示室での作品鑑賞の経験をどのように設計できるか」「自分たちの学校や現場ではどんな工夫や取り組みができるか」といった問いについて考えていきます。

受講者は、それぞれのバックグラウンド（経験年数・鑑賞プログラムの実施回数など）に応じて、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校など対象別に分けられ、7つのグループが設けられました。

過去の研修でも毎回必ず実施されてきたこのグループワークは、実際に美術館の展示室で行われるもので、国立美術館の所有する豊富なコレクションを活用しながら、授業やプログラムを想定したワークが展開できるという大きな特長を持っています。さらに近年では、特別支援学校を対象にしたグループが設けられ、美術館の空間的特徴（通路の広さや展示スペース）から考えられるアクセシビリティや、鑑賞する作品の選び方、そして教員や学芸員たちが配慮すべき事柄などがワークに盛り込まれました。

各グループには、鑑賞教育の豊かな知見と経験を持つファシリテーターが1名付き、受講者へ向けたプログラムを設計しました。また国立美術館各館の教育普及担当研究員がサブファシリテーターとして入り、事前のプログラム設計と当日の進行をサポートしました。

展覧会紹介

1日目の会場となった京都国立近代美術館では、「2025年度 第2回コレクション展」の会場がグループワークの舞台となりました。同美術館は1963年の開館以来、京都や西日本という地域性を意識しながら、工芸、日本画、洋画、西洋絵画、写真、現代美術へと対象領域を広げて収集・展示活動を行ってきました。コレクション展では、四季の移ろいを主題とした作品、重要作家の周年展示、各研究員の研究成果を公開する特集展示や、3階企画展で開催されている展覧会と関連したテーマの作品など、1万4000点を超える所蔵作品から選定された150～180点の作品が展示されています。

本展は、近代から現代にかけての美術の多様な展開を、6つのテーマを通じて紹介するものです。戦争や社会変動の中で生まれた作品、伝統と革新が交わる日本画、工芸の可能性、そして人間への洞察に満ちた版画や洋画などを通して、時代とともに変化する美術の姿が多角的に捉えられていました。

次のページからは、この展示室を活用して実施されたグループワークについてご報告いたします。



京都国立近代美術館 外観 (写真：四方 邦熙)



2025年度 第2回コレクション展

小学校 対象

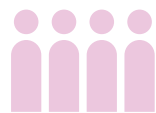
「児童と指導者」

双方向の視点からの学び

〔受講者：10名〕



小学校教員5名



学芸員4名



指導主事1名

ファシリテーター
中根 誠一

世田谷区立瀬田小学校 図画工作専科 主任教諭、東京都教師道場（令和4年度）、教育研究員（令和7年度）、東京都図画工作研究会研修局局員（令和6年度～）、「美術による学び研究会」会員、八王子市立陶銘小学校で「あそびじゅつかん」を発足して7年目、「国立美術館の教育普及事業等に関する委員会」委員

サブファシリテーター
齊藤 佳代

東京国立近代美術館 企画課 教育普及室 任期付研究員
東京国立近代美術館工芸館、美術館教育に関わるフリーランスを経て、2024年より現職。東京国立近代美術館での対話鑑賞プログラムを担うボランティアの育成や、子どもを対象とした美術館体験プログラムの企画などに携わる。

ワークのねらい

今年度の担当するグループの大半は、対話による鑑賞や美術館連携授業の経験が少ない方々だった。

そのため、対話による鑑賞活動の体験と実践の両方の視点から得た気づきや学びから受講者の課題意識の解決を目指した。

風景画をじっくりと見る中で「描かれているもの」「風景の特徴」「時間や季節」など、それぞれが気になった視点を発表・共有しつつ鑑賞を深めるために、ファシリテーターから「作者が何度もこの風景を描いていること」や「建築素材の色合い」など、鑑賞を深めるための情報を適時、伝えることを心掛けた。

そして、グループワークから得たことを各自治体に戻った際に、現場ですぐに実践できるような主体性を培いたいと考え、小グループによる対話による鑑賞の実践も取り入れることとした。

【鑑賞した作品】

須田国太郎《田後風景》1951年

三岸好太郎《テーブルに向って立つ少女》制作年不詳

脇田 和《エンジェルとキューピー》制作年不詳

ワークの流れ

1 自己紹介

車座になり、自治体・所属・氏名に加えて、オスズのアートカードゲームをひとつ紹介する。

2 対話による鑑賞①

自分自身が鑑賞者となって対話による鑑賞を体験し、作品と向き合う。《田後風景》

3 対話による鑑賞②

児童を対象とした対話による鑑賞を実施するための準備や方法、配慮事項などを検討する。5人ずつの小グループに分かれて、それぞれ課題作品を選定、準備作業をする。それぞれ10分ずつ対話による鑑賞を行い、5分ずつ振り返りを行う。(写真1・2)

Aグループ《テーブルに向かって立つ少女》

Bグループ《エンジェルとキューピー》

4 「美術館で本物の美術作品を鑑賞すること」について考える

小グループに分かれ、テーマについて協議する。(写真3)

5 質疑応答と振り返り

指導者研修の事前アンケートやグループワークを通して感じた課題意識などについて協議する（鑑賞活動の在り方、題材ごとのつながり、ICT活用など）。受講者から一人一言ずつグループワークの感想を発表する。(写真4)



1



2



3



4

受講者の声

細やかな時間配分がポイント

受講者の実態に合わせて、基本的な内容を丁寧に押さえることを心がけました。受講者の方々にとって今何をすべきかを最優先に考え、途中何度も時間配分も変更しました。担当ブースもサブファシリテーターの齊藤さんとの打ち合わせで当日、追加変更していただきました。このことは小グループの作品選定にも関わりました。私自身が齊藤さんや受講者の方々から見方や考え方を広げる大切さを教えていただいたと実感しております。この度も貴重な機会と学びをいただき、誠にありがとうございました。

対話型鑑賞ではじめて参加者側になり、参加者がどのタイミングで話そうか迷う気持ちや、これを言っていかなと戸惑う気持ちを体験できました。また、学校の先生は鑑賞の際に、描かれた人の気持ちや作者の意図を想像するなど、学芸員とは少し違う感情的な部分を重視していることも分かりました。(学芸員)

同じグループの他の方と自分の意見が始めから異なることばかりで、焦りました。しかし、違いを受け止めつつ、集団の意見をまとめる難しい立場であるファシリテーターの中根先生がポイントで下さる、文脈に基づいた投げかけが大変勉強になりました。地域によって異なる専科の配置や研究会の在り方なども刺激的なお話でした。(小学校教員)

成果発表の講評

講評者
平田 朝一

油画作品の対話による鑑賞を軸にした中根グループでは、児童・生徒の立場を実際に体験してから教員としてどのように対話を組み立てるか、検討が行われていました。いずれの参加者も、児童・生徒を具体的に想定しながら鑑賞プランを組み立て、学校現場に応じた内容について話し合いました。その過程で、各自が作品を鑑賞した結果を紙に書きだす作業が組み込まれ、その中で、他人の意見を聞くことで自分の意見が変容する体験、また異なる意見を聞くことで自分の意見の根拠が明確になる体験を得ていました。「美術館で本物を鑑賞する」というトピックでは、都市と地方の美術館へのアクセスの違いの話題も出るなど多様な意見が出ていました。

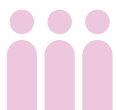
小学校 対象

みたことから想像する楽しさ

〔受講者：10名〕



小学校教員6名



学芸員3名



指導主事1名

ファシリテーター
西村 德行

東京学芸大学教職大学院教授。専門は教科教育学（美術科教育）、鑑賞教育。東京都立中学校、筑波大学附属小学校を経て2014年より現職。「みかたをかえる」をテーマに、子どもたちの「いたずら心」をくすぐる題材を開発。現在は、「みること」を軸にした図画工作・美術科教育カリキュラムの研究をおこなっている。

サブファシリテーター
今井 陽子

国立工芸館 工芸課 教育普及室長
1996年東京国立近代美術館に入職。工芸課に所属し、現在国立工芸館主任研究員を併任。2004年からは工芸館の教育普及室を担当。また夏季には子どもの鑑賞姿勢を題材とし、その深化をめざす展覧会を企画している。

ワークのねらい

作品と向き合い、その表面をじっくりと眺めると、様々な痕跡があることに気がきます。その痕跡を頼りに使った材料や用具、表した順などを考えていると、作者の行為だけでなく、表すに至った気持ちや思いまでも想像したくなります。しかしその様な姿を子どもたちから引き出すには、作品と出会う環境やそこで使う言葉、またその言葉をかけるタイミングなどを検討することが大切です。このワークでは子どもたちが「たぶん」「きっと」「間違いなく!」とつぶやきながら思わず想像したくなる、「みたことから想像すること」を楽しむ鑑賞のアプローチを3つのグループに分かれて考えることにしました。

〔鑑賞した作品〕

リチャード・ロング《京都の泥の円》1996年
森野泰明《WORK 94-3》1994年

ワークの流れ

1 自己紹介

「国立美術館アートカード・セット」から、お気に入りの一枚を各自が選ぶ。隣の人は選ばれたカードから選者の性格や趣向などを想像し伝える。最後に本人が選んだ理由と自己紹介をする。(写真1)

2 ギャラリートーク

《京都の泥の円》と《WORK 94-3》でギャラリートークを行う。ファシリテーターとサブファシリテーターが、受講者から気付いたことや見てわかること、想像したことなどを聞き出しなが鑑賞する。(写真2) (左ページメイン写真)

〔想像の視点：身体性・作家の動き(痕跡)・どのようにしてつくったか?・材料/素材(泥・土)・物語性・遠く→近く(みる側の動き)〕

3 グループワーク「みたことから(痕跡から)想像する楽しさ」(どちらの作品でも可)

「みたことから想像すること」を楽しむ鑑賞方法を3グループに分かれて検討する。(写真3)

4 グループ内発表・感想

「みたことから想像すること」を楽しむ鑑賞方法をグループ内で発表し、共有する。(写真4)



1



2



3



4

ファシリテーターの感想

想像を広げたい鑑賞プログラム

人は気付いたこと、気になったことがあると、「それは何か?」とより深く対象と向き合いたくなります。今回のグループワークでは「痕跡」をもとに、子どもたちから引き出したい言葉や姿を想定しながら、より想像を広げたい鑑賞プログラムをグループで考えていただきました。「みたことから想像する楽しさ」を知っているメンバーだからこそ、その検討の過程も面白く、「そんなアイデアがあるんだ!」とファシリテーターの私も楽しませて頂きました。「みたことから想像する」この楽しさが益々広がればと、メンバーの皆さんの姿を拝見しながら思いました。楽しい鑑賞プログラムをご紹介いただき、有り難うございました。

受講者の声

学校の先生と美術館関係者とは、同じ「鑑賞」に対し、期待していることが少しずつ違うと感じました。美術館側は「作品への理解や興味を深める」ことを主軸にしがちですが、先生たちは「児童がどのように成長できるか」を重視していると思います。今後のエデュケーターとしての業務の中で、この違いを意識したいと思います。(エデュケーター)

美術館での美術鑑賞とはどんな活動ができるか、まだまだ現場に伝わっていないことがわかった。美術館での活動がどんなもので、どんな資質能力を育成できるかが分かる教員向け資料の作成や研修会の実施を行いたい。(指導主事)

成果発表の講評

講評者
平田 朝一

巨大で迫力のあるウォール・ペインティングの《京都の泥の円》に美術館で対峙したときに、児童・生徒がどのように作品と出会うか、という問いを立て、美術館を訪れる前、実際の訪問、訪問後とそれぞれの場面を想定してプランを設計していました。発表者の教員は、美術館訪問時のエントランスでの児童たちへの声かけや、作品と対面した際の「どう思うか」という比較的子どもたちの感覚に委ねたオープンな問いかけを行うなど、細かい場面想定と具体的な狙いが設定されていました。いずれのグループも鑑賞の魅力を多角的に検討しており、作品鑑賞の新たな可能性が美術館と学校連携によって生まれる可能性を感じました。

中学校 対象

美術鑑賞で何が起きているのか ～新たな気づきをうながす 鑑賞の在り方を探る～

〔受講者：10名〕



中学校教員6名



学芸員2名



指導主事2名



ファシリテーター
道越 洋美

所属：藤枝市教育委員会 教育政策課 主席指導主事
経歴：静岡県藤枝市内公立小中学校教諭
静岡県教育学部附属島田中学校教諭
平成19年度鑑賞教育指導者養成研修受講
静岡県教育委員会静岡教育事務所指導主事
藤枝市内公立中学校教頭
令和6年4月から現職



サブファシリテーター
日南 日和

国立工芸館 工芸課 特定研究員
2022年より現職。国立工芸館のボランティアスタッフと
協同し、対話型鑑賞プログラム「工芸トークオンライン」
やファミリープログラムなどの企画運営に携わる。

ワークのねらい

中学校教員や、教員経験のある学芸員、指導主事など
経験や年齢も様々であったため、皆さんのこれまでの鑑
賞授業やプログラムの経験から、自己課題を見出し、作
品や仲間と向き合うことができるように、プログラムを
構成した。

また、熊谷守一という人物の生き方を少しでも共有でき
るよう、作品だけでなく実際の場所の写真、作者の言葉、
絵本などを準備し、参加者がこのグループワークを通して、
自分自身のファシリテーターとしての在り方を見つめること
ができるよう、一日の研修の流れを工夫した。

【メインで鑑賞した作品】

熊谷守一《五色沼》1956年頃

ワークの流れ

1 グループワークの主旨とテーマ確認

- ・アートカードから気になる作品を一つ選んで自己紹介と自己開示。
自分がこの研修にどのような課題意識をもって参加しているのかを
伝え合う。(写真1)
- ・ファシリテーターからグループワークの主旨を伝え、鑑賞教育のリー
ダーとしての立場で、何を学ぶのか見通しをもつ。

2 対話による鑑賞

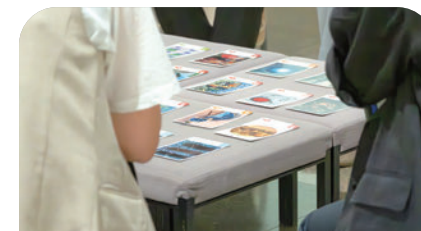
- ・《五色沼》を鑑賞し、ギャラリートークを行い自由な見方や感じ方
を伝え合う。(写真2)
- ・造形的な見方・感じ方を働かせることについて共有し、子どもが自分
としての価値を生み出すことが本質であるとし、その過程を楽しむ。
- ・熊谷守一についての情報を共有し、作者の主題や表現の意図と工
夫について考える。

3 小グループで鑑賞プログラムを作る

- ・3つの小グループに分かれて、エリア内の作品から1点を選び、鑑賞
プログラムを作る。(写真3)
- ・この作品を鑑賞することで、子どもたちにどのような力を付けたい
のかを主軸にしながら話し合う。

4 振り返り

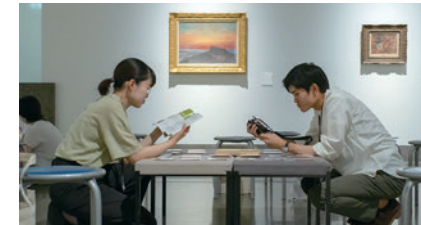
- ・本日のグループワークを通して、自分自身が抱えていた課題につい
て再び向き合い、どのように新たな気づきを得たのかを振り返る。
(写真4)



1



2



3



4

ファシリテーターの感想

自分自身と向き合う濃密な時間

今年は、熊谷守一をメイン作品に選びました。作者を表した言
葉の中に「事象や事物をとにかく見てその本質やことわりを自分
のものにすることに手を抜くことがなかった」という一節があり
ます。この言葉は、ファシリテーターである私の心にも強く刺さ
る言葉でした。グループの皆さんは、自分の見方や感じ方を深め
るだけではなく、互いの考えを吸収しようというあたたかい雰
囲気がありました。作品をとにかく見て感じて、自分自身と向き合
い、仲間と一緒に新たな価値を生み出す過程を楽しんでおられま
した。特に後半の小グループでの活動では、お互いの意見を熱心
に聴き、相手の見方や感じ方を引き出そうという、ファシリテー
ションの本質がありました。私自身も「互いのよさを引き出し高
めること」の大切さを実感できました。グループの皆様、関係者
の皆様により感謝申し上げます。

受講者の声

作品や作者に関する知識は大切で、対話型の鑑賞をファシリ
テートするためにも教師として学び続けていきたい。鑑賞
は正解・不正解ではなく、作品を通してどれだけ考え、視野
を広げることができたかが大切で、そのためにも作品を文
脈で捉える視点は大切にしたい。(中学校教員)

鑑賞とはなにか、自分たちができる鑑賞教育とはなにか、を
改めて深く考えることができました。(学芸員)

先生と共に鑑賞教育を行う場合、お互いの役割(できるこ
と)を開示し合い、両者がタッグを組んでこそ鑑賞教育の
充実があるのだと実感しました。その時に、「鑑賞とはなに
か」を両方で考え、共有し合うことを大事にしなければ、と
思いました。(学芸員)

成果発表の講評



講評者
松永 かおり

今のグループワークの課題は何か？この研修を通して何を学んで帰りたいか？という問いに始まり、何度も
参加者が自分自身に向き合う時間が設けられていました。つまり、この活動自体が、参加者がファシリテ
ーターとしての自分に向き合うものだったと言えるのではないのでしょうか。子どもたちに対してどう鑑賞させるか
を考えると同時に、参加者自身が、「変容していく自分、価値や創造をしている自分」を客観的にとらえるよう
な時間になっていたと思います。それぞれが現場に戻った時に、この研修を生かし、子どもたちに、どのよう
なアプローチで、どんな力を身につけさせたいのか、「自分なりに」考え、実践してもらえればと思います。

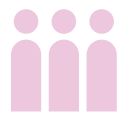
中学校 対象

学習者・指導者の 視点から考える鑑賞学習

〔受講者：10名〕



中学校教員6名



学芸員3名



指導主事1名



ファシリテーター
渡邊 美香

大阪教育大学表現活動教育系准教授。専門は美術教育。現代美術の教育における抽象表現の指導方法、教育における映像メディア表現題材についての研究を行う。鑑賞教育の教材として、美術館訪問鑑賞教材「アートとともだち」を作成（2019）。



サブファシリテーター
宮下 咲

国立新美術館 学芸課 特定研究員
草間彌生美術館を経て、2023年より現職。国立新美術館の学校団体やユースを対象にした教育普及プログラム等の企画運営に携わる。

ワークのねらい

参加者の事前アンケートでは対話型鑑賞の基本理解と鑑賞授業の評価に関する要望が多く寄せられた。そこで、作品鑑賞において自分におこる変化や、活動をファシリテートする方法への理解を深めることをワークのねらいとし、対話型鑑賞の体験と鑑賞授業の構想を行う活動を設定した。日本画材の質感や表具・額装に加え、展示室の企画意図など、美術館展示室ならではの作品との出会い方を重視し、実物から得られる経験の質を共有した。鑑賞題材提案のグループ活動においては、教員と学芸員が共に話し合いを進めながら学習者の発達段階に応じた鑑賞目標の明確化を図った。

〔鑑賞した作品〕

村上華岳《田植の頃》1912年、松宮芳年《漁村風景》明治末期、浅井忠《雪中馬》1906年、久保田米庵《雪月花》1895年頃、千種掃雲《帰路につく(原題：「暮時」)》1908年頃、神阪松濤《花売り図》明治末期、神阪松濤《椿》明治末期

ワークの流れ

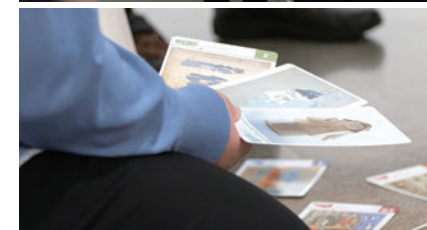
- 自己紹介**
車座になり、名前・所属、鑑賞授業で大切にしていることや本研修の抱負を共有する。(写真1)
- 対話による鑑賞**
ファシリテーターの進行で二曲一隻屏風《田植の頃》を全員で鑑賞し、その対応を振り返る。続いて受講者がファシリテーターとなり、《漁村風景》を鑑賞する実践を行う。(写真2)
- 展示室についての情報提供**
展示室「明治時代の日本画」で、西洋化に伴う日本画の構図や主題の変化を解説。展示意図を知ることも美術館での鑑賞の楽しみ方の一つであることを学ぶ。
- アートカードの活動**
2グループに分かれ「展覧会づくり」ゲームを実施。アートカードから得られる視覚情報と実物鑑賞の体験の違いを確認する。(写真3)
- 題材についての話し合い**
展示室の作品を題材に、3グループで鑑賞授業案を作成・発表。活動における生徒の学びをみとめる方法についても意見交換する。(写真4)
- まとめ**
美術館訪問前後の情意面や思考の変化を振り返り、ワークシートに記入する。



1



2



3



4

ファシリテーターの感想

対話で見つかる新たな視点

対話型鑑賞では、作品に向き合い、その魅力や面白さを次々と見つけ出す受講者の姿が印象的でした。続くアートカードの活動や、鑑賞授業づくりでも、グループの仲間と意見を交し互いの発想を刺激し合いながら主体的にとりくむ様子が見られました。対話を通じて多様な発見が共有され、新たな価値や視点が生まれる学びの楽しさを、改めて実感した一日でした。受講者皆様、サブファシリテーター、京近美学芸員の皆様に感謝いたします。

受講者の声

対話型鑑賞を実際に見せていただくと、私が行っているものより時間の尺も長く、質問も粘り強く聞かれていたのに驚きました。45分授業で焦る気持ちもあり、先へ先へと急ぎすぎていたように思います。じっくり粘り強く意見を聞き取りたいと思います。(中学校教員)

自分の中で起こる気づきの変化や、解釈の深まりを実感することができた。展示室内の作品を使って鑑賞の授業を考える活動では、授業のねらいを明確にして、どのような発問を投げかけたらよいか、授業として鑑賞を考えるのは、また一段上の難しさを実感しました。(指導主事)

成果発表の講評



講評者
松永 かおり

参加者のみなさんは、明日からの学校あるいは美術館において、授業者や教育普及担当のスタッフとして、「ファシリテーターとしての役割」を果たしていくことになります。教室や美術館では、子どもたち全員が安心して鑑賞に参加できるような雰囲気作りが大切ですが、グループワークで体験した「対話による鑑賞」での渡邊先生の姿から、子どもたちが「受け入れてもらっている」「思ったことを言ってい」と思える、雰囲気作りのための発問や対応を、深く学ぶことができたのではないかと思います。また、展示室の割り当てられた空間全体をつかって左右の展示作品や展示そのものの違いを紹介し、そのうえで「実際にファシリテートするとしたらどの作品を選ぶか？」という活動を通して、ねらいに応じた作品選択の視点を学ぶことができたのではないのでしょうか。

中学校 対象

作品等の情報を活用し、 子ども側の視点から 鑑賞活動を通した学びを探る

〔 受講者：10名 〕



中学校教員7名



学芸員1名



指導主事2名



ファシリテーター
東良 雅人

京都市教育委員会 京都市総合教育センター指導室長、
京都市立芸術大学客員教授（令和3年4月より現職）
・文部科学省初等中等教育局 視学官（～令和3年）
・国立美術館教育普及に関する委員会委員（平成23年～令和4年）
・文化庁 文化芸術教育の充実・改善に向けた検討会議委員（令和5年～令和6年）
・東京国立近代美術館評議員（令和6年～）



サブファシリテーター
鬼本 佳代子

国立国際美術館 学芸課 任期付研究員
福岡市美術館、大原美術館で教育普及専門学芸員を務め、
姫路市立美術館を経て2025年5月より現職。多様な利用者
に向けた様々な教育普及プログラムを手掛けてきた他、ボラ
ンティアの育成や異種館連携などにも取り組んできた。

ワークのねらい

美術館の特質を生かした鑑賞の活動の特徴として「実物との出会い」、「美術館という空間」、「専門性」、「テーマ性」、「知の宝庫」を挙げ、それらを子ども側の視点から考えるグループワークを目指しました。特に「テーマ性」という点については、京都国立近代美術館のコレクション・ギャラリーにある「不安の時代の芸術」コーナーに展示してある5点の作品の関連性を意識して鑑賞しました。そしてハンナ・ヘーヒの《不安》を中心に作品や展示などの情報を活用し、それぞれの作品の共通する時代背景や、作者の心情や意図と表現の工夫などを読み取ることで作品の見方や感じ方を深められるようにしました。また、ワーク終盤では、今後の指導者としての役割を果たしていくために、本研修テーマを基に、「中学生にとって美術作品を鑑賞することや、美術館で鑑賞することの意味や意義」について考えました。

〔メインで鑑賞した作品〕

ハンナ・ヘーヒ《不安》1936年、ほか

ワークの流れ

1 アイスブレイク、自己紹介

2 作品を鑑賞するI

「不安の時代の芸術」に展示してある5点の作品を鑑賞し、自分が一番気になる作品を一点選ぶ。この時に作品のタイトルや展示テーマについてのキャプションは見ないようにする。その後、選んだそれぞれの絵について一人ずつ直感的に感じたことや考えたこと、印象などそれぞれが選んだ理由を作品の前で述べる。また、一人一人の発表を聞いて、感じたことや気付いたことなどを自由に話してもらう。

3 作品を鑑賞するII

《不安》について以下の3つの視点から鑑賞する。①造形的な視点（造形の要素の働きやイメージ、作風など）、②私と作品（自分との関係性）という視点、③美術文化という視点（写真1）

4 美術館との連携について

「美術館ができること」を学ぶ。学校と美術館との連携や、アートカードなどの活用について学ぶ。

5 作品を鑑賞するIII

《不安》についての情報を配付し、作者のことや、作品について知り、その情報を基に再度作品を鑑賞し、午前中のグループワークの前半での見方や感じ方との違いや作品に対する自分の変化などについて話し合う。（写真2）

6 2つのグループに分かれてディスカッション

全員で掲示されている「不安の時代の芸術」の展示解説を読む。その後、2つのグループに分かれて、「不安の時代の芸術」の情報を基に展示されている5つの作品を再度鑑賞し、そこから感じたことや考えたこと、情報の活用などからこの展示を授業や美術館のプログラムでどう使うのかを協議して発表する。

7 3つのグループに分かれてディスカッション

更に今度は3つのグループに分かれて、研修テーマ「美術鑑賞で何が起きているのか」を基に、ここまでのグループワークを振り返りながら、「中学生にとって美術作品を鑑賞すること」や、「美術館で鑑賞することの意味や意義」について考えてそれぞれのグループでまとめて発表し共有する。（写真3）

8 リフレクション

ファシリテーター、サブファシリテーターより今回のグループワークについて振り返る。（写真4）

受講者の声

美術館でしかできない体験を

東良・鬼本グループでは、本研修会テーマに基づき、「中学生の美術館における鑑賞活動では何が起こっているのか」を考える時間になることを目指しました。美術館における大きな利点は実物に出会えることもありますが、展示室という空間やテーマ性の存在なども美術館のもつ特質と言えるでしょう。また、専門性の高さや、知の宝庫としての側面から作品等の情報を活用し見方や感じ方を深めることも重要なポイントです。せっかく子どもたちと美術館にきたのだから教室でできることと同じ事をしているのでは勿体ないと思います。「美術館だからできる、美術館でしかできないことって何だろう」そんなことを大小様々なグループの形態で考えました。今回のグループワークで、参加者自身が、子ども側の視点に立った様々な経験を通じた気付きから美術館で鑑賞することについての意味や価値を見付けられたとしたら、これほど嬉しいことはありません。

美術館と学校教育をつなげることで、子どもたちがワクワクしながら本物にふれて鑑賞をできる環境づくりの可能性についても考えさせられました。問いのタイミングや、言葉選び、教師側の準備や心構えもやはり重要であると感じました。（中学校教員）

作品をじっくり観ること、安心して鑑賞して意見を出し合える雰囲気づくり、周りの意見からより見方や感じ方を広げたり、深めたりし、自分の中に新しい意味や価値をつくりだす意義を再確認しました。（中学校教員）

情報をどこまで与えるか、発問をどうするか一つとってもねらいにどれだけ迫れるかが変わってくることを痛感したので、ただプログラムを提供するだけではなく、その内容の精査や事前、事後の時間の充実を図りたいと思いました。（学芸主事）

成果発表の講評



講評者
松永 かおり

中学2年生や3年生くらいになると、根拠をもってものを批評することができるようになります。そのような深い学びにまで子どもを導くために、作品のもつ意味や背景といった情報をいつ出すべきか、というタイミングと量などについてじっくり考える活動だったと思います。美術館では、しばしば、作品それぞれの背景や意味に関連のあるものが集められ、テーマ性をもった展示が行われますが、そうした展示を用いた場合、鑑賞と情報歴史、総合的学習などにうまくリンクさせることが可能ですし、そうすることによって、子どもたちの深い学びが期待できます。美術館で作品鑑賞する意義、多角的に作品にせまるカリキュラムマネジメントや教科横断的な視点を感じることでできる内容でした。

高等学校 対象

美術鑑賞で何が起きているのか ～高校生にとって美術館を活用した 鑑賞で大切なことを考える～

〔受講者：10名〕



高等学校教員7名



学芸員3名



ファシリテーター
星 博人

福島県立喜多方高等学校 校長
福島県立高等学校教員（美術）
福島県教育センター指導主事
国立美術館の教育普及事業等に関する委員会委員



サブファシリテーター
秋田 美緒

国立西洋美術館 学芸課 任期付研究員
教育委員会勤務を経て、2022年より現職。主に、学校
（児童生徒学生および教員）を対象としたプログラムや教材の
開発運営、企画展における小中学生対象セルフガイドの執筆編集などに携わる。

ワークのねらい

所属する学校環境が大きく異なる高等学校では、指導者自身が美術鑑賞で意識の変化を実感し、生徒の状況に応じて指導法を考えることが大切と考え、参加者自身が見方や感じ方を深める活動を行った。ワークでは、普段の授業スタイルを想定し、個人で考え、他の人と対話し、全体での共有をとおして考えが変わったり深まったりしたあと、個人で再考するといったプログラムを設定した。また、美術館との連携として、サブファシリテーターによる作者や作品に関する情報（文脈）を段階的に提供いただいた。浜田知明の版画作品群を課題作品とし、3つの大きな問いをもとに、参加した皆さんと対話しながら独自の解釈を深めることができた。

【鑑賞した作品】

浜田知明《風景》1967年、ほか浜田知明の版画作品群

ワークの流れ

- 自己紹介**
アートカードを使って、偶然引き当てたカードの作品と自分に共通する点を見つけながら自己紹介する。
- 問い①「描かれているものは何か」**
《風景》の形の特徴や細部の様子など事実（客観）の視点を全員で共有する（個人→ペア→全体）。(写真1)
- 問い②「なぜこのような怖い絵を描いたのか」**
作品と浜田の言葉から感じたこと考えたことを話し合い、浜田が何を描こうとしたのかに迫る（個人→ペア→全体）。(写真2)
- 問い③「浜田の作品群にテーマをつけるとするならばどんなテーマになるかキーワードで考える」**
作品群と浜田の言葉から考え、3～4人の小グループでまとめて全員で共有する（個人→小グループ→全体）。(写真3・4)
- 詩の創作**
浜田の作品群から好きな作品をひとつ選び、作品と作品のタイトルをもとに、これまでの活動により得られたことをふまえて詩を創作する（個人）。
- 振り返り**
鑑賞活動を振り返る。鑑賞で大切なもの、大切にしたいことは何か。また、美術館との連携のかたち等について話し合い、全員で共有する。



1



2



3



4

受講者の声

鑑賞をする順番（個人～グループ～個人へ戻る）という一連の流れにより、より深く作品を鑑賞でき、かつ自分の中に深く入り込む事ができ、気持ちが大きく動いた事が印象的でした。（高等学校教員）

美術館の方と一緒に鑑賞を作ると、こういう事ができるのかということも実感しました。（高等学校教員）

作品について最初と最後で見え方・感じ方が大きく変わり、あの短い時間に自分の中で何が起こったのだろう？と不思議に思うほどです。ワークシートを重ねるごとに、他の受講者の考えを聞いて自身の考えが深まっていくのを実感しました。また、少しずつ情報を得るごとに作品の見え方が広がり変わっていく過程が面白く感じられました。（学芸員）

ファシリテーターの感想

対話を重ねて深まる感覚を大切に

初見で感じたことや考えたことが、作品、他者、自己との対話を重ねることで変化し、広がり、見方や感じ方を深めるグループワークでした。浜田知明の作品群の鑑賞をとおして、作者の体験を想像し、強いメッセージを感じ、詩の創作により自分事として捉えることができました。テーマである「美術鑑賞で何が起きているのか」について参加者の皆さんにとって何らかの気づきになれば幸いです。浜田作品の独自性や創造性、作品の背景にある文脈により、戦争の不条理さと平和の尊さについて改めて深く考える機会となりました。



講評者
松永 かおり

「描かれているものを見る、作者の意図を考える、作品のテーマを考える、作品に詩を添える」と、見る視点を変えながら、何度も鑑賞する場面が設定されており、参加者が多角的かつ自分事として作品に向かいあうことのできる活動だったと思います。また、「個人で作品を見る、少人数で見る、全体で共有する、また個人に戻る」という展開は、普段の授業やプログラムにも生かせる組み立てでした。サブファシリテーターの情報提供の内容とタイミングが有効に働いており、美術館と学校との連携における役割分担はどうあるべきか、より良い人的連携とはどうあるべきか、そのありかたも考えさせられる活動になっていたと思います。

成果発表の講評

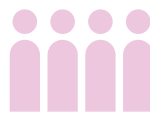
特別支援学校 対象

多様な視点と身体感覚を 活かす鑑賞体験

〔 受講者：9名 〕



支援学校等教員 4 名



学芸員 4 名



指導主事 1 名



ファシリテーター
鈴木 智香子

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 研究員
美術館でのインターン研修やボランティア活動をきっかけに、美術館教育の道を歩み始める。神奈川県立近代美術館での勤務を経て、2015年より東京藝術大学美術学部特任助手に着任、上野公園の9つの文化施設を連携するラーニングデザインプロジェクト「Museum Start あいうえの」のプログラムオフィサーとして携わる。2022年より現職。



ファシリテーター
亀井 幸子

Jayalanka Foreign Employment Agency Lecturer /
徳島県立近代美術館 アートイベントサポーター
徳島県で高校美術教員として勤務し、聾学校や特別支援学校で長く教育に携わった後、県立近代美術館で12年間ミュージアム・エデュケーターとして学校連携やユニバーサル美術館事業を担当。現在は同館のボランティアとして活動しつつ、フリーのエデュケーターとして子どもや多様な人々とアート活動を行っている。



このワークのねらい

この研修では、特別支援学校の子どもたちに向けた美術鑑賞の在り方を探り、指導者自身が多様な立場からの視点を体験することを目的としました。

まず、昇降式車椅子を用いて作品を見る位置を変えることで、視点の違いから生まれる発見を体感しました。また、発話に限らず、手や身体を動かして鑑賞を深める方法を取り入れ、作品との関わり方を広げました。

鑑賞の根幹にある「よく見る」という営みを基盤とし、安心して意見や感覚を表現できる環境づくりの重要性を学びました。体験を通じて、学習者の多様なニーズに応じた鑑賞活動の工夫と、指導者が持つべき柔軟な視点を共有する場となりました。

〔鑑賞した作品〕

リチャード・ロング《滝の線》1996年
三橋 遵《思い出の向こう側》2016年

ワークの流れ

1 導入（自己紹介）

ファシリテーターの名前紹介後、アートカードを使い、共通点探しやお気に入り作品を選んで交流。（写真1）

2 体験① 車椅子での鑑賞

1Fロビーでリチャード・ロング《滝の線》を鑑賞。昇降式車椅子を使用し、見え方や移動の難しさを体験。（写真2）

3 体験② 美術館散歩

車椅子で館内を巡り、施設や設備面の課題を確認。押す人・乗る人を交代し、移動時の困難や視点の違いを共有。（左ページメイン写真）

4 体験③ グループ鑑賞と表現

ロングの作品を座って体感しながら対話鑑賞。さらに、三橋遵の作品をもとに粘土を用いて表現を行い、身体感覚を伴う鑑賞を経験。（写真3）

5 ふりかえり

午前・午後の体験を比較し、言語だけでなく身体感覚を含めた「鑑賞の多様性」や、環境づくりの重要性を確認。

6 グループワーク

実際の授業を想定し、作品を「よく見る」ための発問や環境整備の工夫を模索。最後に発表とまとめを行い、1日の学びを共有した。（写真4）



1



2



3



4

受講者の声

多様なニーズに合わせた鑑賞体験を目指して

受講者からは「車いすを押していると相手への配慮で作品をゆっくり見られなかった」「乗っていると自分のペースでは動けないが、新鮮な見方ができた」との声がありました。これらの体験を通じ、視線や体験の多様性を実感するとともに、鑑賞環境をどう整えるかを考える契機となり、貴重な学びが得られました。（亀井）

受講者の事前アンケートより、「多様なニーズに合わせた美術館体験について考えたい」「言語活動以外の評価の方法がわからない」という課題に注目しました。言語活動以外にも、視点を変えたり造形的な活動を取り入れたりすることで、主体的な鑑賞体験をつくり出せることを実感してもらいたいと思いました。生徒の実態に合わせて作品とどのように出会わせるかを考え抜いた最後のワークは、私にとっても学び多い機会となりました。（鈴木）

生徒の目線での鑑賞を経験して、相手の状況を知ることの必要性や、生徒目線になると、生徒の実態に合わせて鑑賞の計画が必要だと知ることができた。また計画を立てる際に、生徒の反応も予測しつつ、どう作品に興味をもって見てもらえるか、深く鑑賞するにはどうするか、ねらいをどこに持っていくのか等、考えるヒントをもらいよかったです。（特別支援学校等教員）

車椅子によって館内を移動したり、作品の一部を実際に自分たちで作ってみることで、色々な視点があることを身をもって知ることができたように思います。様々な特性がある人々にどのようなアプローチができるかについて、グループの皆さんと意見交換できたことも勉強になりました。（学芸員）

ファシリテーターの感想



講評者
平田 朝一

午前のワークでは参加者が車椅子に乗って展示室をまわり、独自の視線の高さで作品鑑賞を経験していました。普段と異なる視線の高さで戸惑いもありつつ、立体作品の覗きケースを真横から見る体験など、日常とは違う視線によって作品の新たな魅力に気づく機会を得ていました。さらにその価値観の変容を、障害をもつ児童・生徒たちにどのように伝えられるか、どんな機会を設定できるか、という想定の下に鑑賞プランが設計されてました。一例として、作品の中に用いられている人形を参加者がつくり「自分だったら作品のどこにこの人形を配置するか、どのような意図を持たせるか」という具体的な感覚を交えて紹介する、というプランが提示され、身体感覚を伴う鑑賞について検討が行われていました。

成果発表の講評

グループワーク全体講評

グループワークの終了後に、作品前で成果発表が行われました。各グループから代表者が選出され、グループワークの内容や、そこから得た学びが発表され、さらにグループ別に講評がなされました。その後、参加者全員が講堂に集まり、平田先生と松永先生から全体に対する講評がありました。



Speaker

平田 朝一 Tomokazu Hirata

詳しいプロフィールはP.8を参照。



Speaker

松永 かおり Kaori Matsunaga

世田谷区立玉川中学校校長、全国造形教育連盟委員長、東京都中学校美術教育研究会副会長。都内公立中学校美術科教員の後、東京都教育委員会指導主事等を経て現職。中学校学習指導要領美術（平成20年度改訂）の作成協力及び同解説執筆等に関わる。国立美術館の教育普及事業等に関する委員会委員。

平田 今朝、最初にお話しさせてもらった時と今を比べると、皆さんとても柔らかい表情をされていますね。様々な新しい方と繋がって、一緒に考え、いろんなことを体験して、鑑賞を面白いなと思われたのではないのでしょうか。それでは、講評に移ります。

中根先生のグループでは、まず子どもたちの立場になったつもりで鑑賞を経験し、次にファシリテート側の目線でどう授業をつくっていけばいいのかを考えて、それを実際に実践してみるというところまで経験されていました。すると「こんなことが考えられるんだな」という新たな気づきがあり、さらに様々な意見が出て、それを踏まえて「自分はこう思う」というところまで考えることができていました。

特別支援学校の亀井先生のグループでは、最初に実際に車椅子に乗って作品を見る経験をさせていました。こうすることで先生方は目線の違いに気づかれていて、「車椅子に乗ると上の方は見えないけれど、横から下の方がよく見える気がする」といった感想を述べる方もいらっしゃいました。こうした体験を通して、どういうことができるのか、どのように子どもたちに合わせたアプローチができるのか考えていらっしゃいました。

西村先生のグループでは、大きな作品を使って、美術館来館当日だけでなく、事前学習と事後学習を含めてどのような鑑賞プログラムができるのかについて考えていらっしゃいました。とても大規模で面白いアイデアが出てきていたので、きっと子どもたちもワクワクドキドキしながら、学びがある授業になるのではないかと思います。日頃、先生方は授業について一人で考えていることが多いと思いますが、何人か一緒に考えているからこそ、このような素敵なアイデアが生まれてきたのだと思います。このように、校内の先生方と相談すると、様々な鑑賞の授業アイデアが思いつくかもしれません。

今日、みなさんの中で何が起こりましたか？ 今日だけでもちょっと変わったと感じている方もいらっしゃると思います。明日もまた、どんな出会いがあってどんなことが自分の中で変わっていくのかをぜひ感じていただけたらと思います。それぞれの出会いを大切に、今回のテーマである「美術鑑賞で何が起きているのか」をぜひ考えていただけたらと思います。

松永 対話による鑑賞は20年ほど前から国内の美術館や学校の授業として取り入れられてきました。



自分なりの見方や考え方を大切にしながら、他者と対話することで鑑賞を深めることが、授業として有効な手立てだからこそ、学校教育にも根づいてきたと言えるでしょう。

また、ファシリテーターという言葉は、一般的に「活動を円滑に進行し、より良い結果が得られるよう、参加者による課題解決を促進する動きを行う人」とされていますが、このファシリテーション能力は、文部科学省が「2020年代を通じて実現すべき令和の基本型教育の姿」の中で、これからの時代に求められる教員の力としても示しています。子どもたちの学びに寄り添い、伴奏者として学びを支える存在であることが求められています。

対話による鑑賞は一方的に情報を与え続けるのではなくて、対話とファシリテーションを通してだからこそ、深い学びの実現につながっていくことを、受講者のみなさんはそれぞれのグループワークで体験されたことでしょう。

今年のテーマは「美術鑑賞で何が起きているのか」でした。

学校の授業や美術館でのワークが意図的・計画的に目的を持って行われるものならば、指導者としては、美術鑑賞で「何を起こそうとしているのか」という視点を持つことが重要だと思います。

その時に、改めて考えていただきたいのは「どうしてその作品を鑑賞するのか」ということです。ファシリテーターはそれぞれのグループワークのねらいに沿った作品を選んでいます。これは学校の鑑賞の授業でも同じことが言えると思います。各授業がどのような鑑賞の力をつけるために行われ、そのためにはどのような作品が一番ふさわしいか、子どもの実態に応じて、考えていくのだと思います。

同時に考えたいのは、「どのようにその作品を鑑賞するのか」ということです。今日のそれぞれのグループワークの活動がそれに当たりますが、学校の授業においても、ねらいを達成するための学習活動としてどういう取り組みが一番有効なのか考えていく必要があると思います。

先ほど各グループの成果発表では「今日1日の学びで変化した」、「新しい価値を創造することができた」という声をたくさん聞きました。そういう体験を、ぜひこれからの授業や、美術館での鑑賞の場でも子どもたちに経験させてあげていただきたいと思います。今日の学びがこれからに活かされますようお祈り申し上げます。



Leadership Training for Teachers and Curators
to Enhance Art Museum-based Learning
美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

Day 2

2025年8月5日
会場：京都テルサ



美術館に行く前の心の準備と 環境をつくるためのアクセシビリティ



Speaker

鈴木 智香子 Chikako Suzuki

詳しいプロフィールはP.26を参照。

美術館体験においてのアクセシビリティは入館前、入館後（受付の対応、トイレやエレベーター、駐車場などの設備）、そして深い体験（展示室の中での鑑賞体験）という3つの段階に分けることができると考えます。見過ごされがちですが、美術館体験は入館前から始まっています。というのも、児童・生徒が美術館に対してどのようなイメージを持っているのかによって美術館での体験やプログラムは大きく変わるからです。この心の準備こそがアクセシビリティにおいては肝要で、児童・生徒の「私はここに来館していいのか、安心できる場所なのか」という心配事を解消して心理的ハードルを下げるのが大切です。それに即すると、美術館を訪れる前の事前学習に至るまでの教員と学芸員の対話こそが児童・生徒の体験を形づくっているとも言えます。「当日の体験は事前学習で7割が決まる」と、私は思います。学校側だけではなく美術館もその重要性を認識し、双方で対話を重ねることで、児童・生徒にとってより豊かな体験ができるように共に目指していきましょう。

ミニレクチャーで紹介されたツール



Social Story（ソーシャルストーリー）

発達障害のある方やその支援者、関係者をサポートする社会学習ツールです。見通しが立たないことに苦手意識がある方などに向けて、入館前から退館までを写真を使ってストーリー仕立てで紹介しています。全国にある7つの国立美術館施設ごとに冊子があり、オンラインでもご覧いただけます。

各館のPDFは、右の二次元コードよりダウンロードいただけます
<https://ncar.artmuseums.go.jp/activity/accessibility/>



ミュージアムの事例から知る！学ぶ！ 合理的配慮のハンドブック

ミュージアムに関する合理的配慮について分かりやすく伝え、浸透させていくことを目的に、具体的事例を調査して作成されたハンドブック。「合理的配慮」実現までのプロセスを「要望」「対話」「実施」の3つのステップに分け、具体的事例とともに紹介しています。

PDFのダウンロードはこちら
https://ncar.artmuseums.go.jp/upload/deaihandbook2024_web.pdf



事例紹介について

「事例紹介」では、学校と美術館が連携して取り組んだ授業などの鑑賞教育の実践について、教員や学芸員が発表し、取り組みの内容や成果、課題を研修の受講者に共有します。受講者が自校・自館での実践につなげるうえで参考となる事例であることはもちろん、校種や地域に偏りがないように組み合わせを検討したうえで、例年3つの事例が選ばれ紹介されています。

今回の研修でも、活動の主体や規模が異なる事例が発表されました。一つ目は、生徒を連れて美術館を訪れることが困難な特別支援学校が、ICTを活用しながら複数の美術館と連携して行った授業の事例で、様々な事情から来館ができない、あるいは来館を躊躇している学校にとっても参考になる事例紹介となりました。

二つ目の事例は、美術館と地域の中学校の教員たちが4年にわたり協働した合同研究会に関するもので、発表も教員と学芸員が共同で行いました。研究会の進め方や授業を実践した成果、浮き彫りとなった課題など、学校と美術館双方の現場からの意見が共有されました。

最後に、市内の小学校の3年生全員が美術館に来る仕組みを作るという、令和7年に本格事業化したばかりの取り組みが紹介されました、学校招待プログラムを実施している美術館や自治体だけでなく、中・小都市や、島しょ部を持つ自治体の事例としても参考となる発表になりました。



※令和7年度の事例紹介者の選出は、吉澤 菜摘（国立新美術館 学芸課 教育普及室長）、端山 聡子（東京国立近代美術館 企画課 教育普及室長）、日南 日和（国立工芸館 工芸課 特定研究員）が担当しました。

ICTでひらく鑑賞教育の可能性

Speaker



山本 裕史 Yuji Yamamoto

東京都立足立特別支援学校 主任教諭。令和3年から「ICTでひらく鑑賞教育の可能性」と題して、知的障害を持つ高等部の生徒を対象に美術館と連携した鑑賞教育を実践。「一人一台端末を活用した、特別支援学校と他の学校の生徒間の交流の場の提供の試み」は（一社）日本教育情報化振興会が主催する「ICT 夢コンテスト 2024」で優良賞を受賞。

時間と空間を超えて広がる鑑賞教育

私はICTを活用すれば「時空^{くびき}の頸木」を超克して、鑑賞教育の可能性を広げることができると考え、実践を重ねてきました。頸木という言葉は、聞いたことはありますか？ 頸木は、家畜の首を固定して拘束する道具で、束縛・制約するものという意味です。言い換えると、ICTを活用すれば、時間と空間という我々を束縛するものから離れて、鑑賞教育の可能性はもっと広がると考えています。

美術館・博物館との連携授業の経緯

これまで、東京都現代美術館、東京都庭園美術館、東京都渋谷公園通りギャラリー、古代オリエント博物館、国立新美術館などと連携した授業を行ってきました。連携に至る一番大きなきっかけは、新型コロナウイルスの流行です。2019年、不要不急の外出が制限され、学校では校外学習はもちろん、入学式や卒業式も行えないような過酷な状況がありました。その時、脚光を浴びたのがZoomに代表されるオンライン会議ツールです。人々が感染の危険なく交流できるため急速に普及しました。私自身もZoomを用いて、様々な背景の方々とオンラインで交流するようになり、その楽しさや面白さに気付いた私は、こうしたツールを活用すれば外出せずに美術館と生徒を繋ぐことができると考えました。私は、東京都現代美術館に訪れた際、アンケートに展覧会の感想と共に「ぜひオンラインで交流する機会をいただきたい」と記入し、反応を待ちました。後日、東京都教育委員会主催の研修会があり、当時、東京都現代美術館の教育普及係長だった郷泰典さんとお会いしました。郷さんは、私のアンケート内容をよく覚えていてくださったので、すぐに意気投合し、オンラインでの連携授業の試みに繋がりました。

オンライン会議ツールを使用した連携授業

令和3年10月、オンライン会議ツールを活用した最初の連携授業を実施しました。東京都現代美術館とオンラインで繋がり、同館が所蔵するオノ・ヨーコの《Cloud Piece》を鑑賞しました。「雲が滴り落ちることを想像する。その雲を入れる穴を自分の家の庭に掘る。1963年春」というインストラクション（指示文）に従って制作されたその作品は、地面に金属の筒が埋め込まれていて、底に鏡があり、鏡は空を映し出しています。鑑賞者が作品を覗き込むと、本来、見えるはずのない青空と雲が見えるようになっていきます。鏡を使うことで鑑賞者の常識や価値観が揺さぶられる。これがこの作品の良さであり、魅力だと言えます。生徒たちは、郷さんから作品の説明を受けた後、グループに分かれて鏡とタブレット端末で自分たちの《Cloud Piece》を制作し、撮影しました。完成した生徒たちの作品は、郷さんに鑑賞、講評していただきました。生徒たちが生き生きと活動したり発言したりしている様子を見て、美術館との連携は動機づけに有効で、学びに向かう力を高めるという手応えを得ました。学校と美術館との連携では、美術館に児童・生徒が足を運び、鑑賞活動を行うのが一般的です。しかし本校は立地からも、生徒の実態からもそ



れが容易ではありません。そのような学校でも美術館との連携を進めていくことができたので、ICTの持つ力の大きさや可能性を実感しました。

バーチャル・リアリティ（VR）を活用した学習活動

郷さんから、次の連携先として東京都庭園美術館の学芸員である大谷郁さんをご紹介いただきました。この連携では、東京都庭園美術館の建築デザインに注目し、建築の良さや美しさを味わうためにオンラインでどのようなことが可能なのかを郷さん、大谷さんと考え、VRを活用した学習活動を行うことにしました。VRの活用で、実際に美術館を訪れたかのような疑似訪問体験をしながら展覧会を鑑賞することが可能になりました。生徒の期待感を高めるため、事前に美術館が作成したカードを配布しました。このカードは東京都庭園美術館の館内にある意匠の中から特徴的で優れたデザインを選び、VRの画像を切り取る形で作成されたものです。生徒たちはこのカードを手し、VR空間を自由に駆け巡りながらカードに示されたデザインを探す活動に取り組みました。ゲーム性のある活動は生徒に好評で、建築やデザインへの興味を高める教育的効果があったように感じます。更にそこから、生徒自身がカードを作成する活動に発展させました。また、八王子西特別支援学校の生徒との交流授業も行い、八王子の生徒も同様にカードを作成し、お互いが作成したカードを交換して鑑賞する試みも行いました。これらの活動を通して、オンラインだからこ

そでできる鑑賞教育の形を探究していきました。

もし、現実の美術館内で生徒が走り回っていたら迷惑になりますが、VR空間であれば、他の鑑賞者に迷惑をかけずに自由に動き回ることができます。このような時間や空間を超えた連携は、ICTを活用することで可能になりました。

オンラインのデメリットを補う工夫

東京都渋谷公園通りギャラリーの学芸員、佐藤真実子さんとの連携を紹介します。同施設は東京都の運営する施設で、いわゆるアール・ブリュットの作品を紹介するギャラリーです。展覧会をオンラインで鑑賞して作品制作に繋げる点は、これまでの連携授業と同じですが、本授業は、そこからより発展させ、フォトグラメトリを鑑賞や作品に取り入れた点が特徴です。フォトグラメトリは、写真から3D画像を生成する技術です。この授業では鑑賞した作品を3D画像にした後、タブレット端末を用いて、デジタルでのカラージュ作品に仕上げる活動を行いました。またオンライン鑑賞では、素材感や質感など、マテリアルの実感を得られないデメリットがありますが、それを補うために、鑑賞した作品で使われている素材を用いた作品づくりも行いました。

東京都が運営する公立施設との連携に続き、私立の施設との連携も試みることにしました。古代オリエント博物館に連携をお願いし、教育普及担当の高見妙さん、当時研究員の津村眞輝子さん（現館長）と「世界の美術」と題した単元で連携を行いました。

1回目の連携では、モスク・ランプの鑑賞をオンラインで行い、オリエント文化独特の紋様やデザインについて学びました。その後、生徒は学んだことを生かし、各自でデザインを考案してガラス作品を制作しました。2回目の連携では、完成した作品をオンラインで高見さん、津村さんと鑑賞しました。研究員である津村さんがモスク・ランプについて解説する時の熱量は凄まじく、生徒に与える影響は非常に大きいものがありました。また完成した作品に対して、専門家から評価をいただくことは普段の学校生活では貴重な経験で、生徒は大きな達成感を得られました。

最後に紹介するのは、国立新美術館の学芸員、吉澤菜摘さんとの連携です。「君も、色の魔術師!」と題し、同美術館の企画展「マティス 自由なフォルム」をオンラインで鑑賞しました。その後、展示されていた作品のひとつで4m×8mもある大作《花と果実》を、実物の半分の大きさに教室内に再現制作する活動を行いました。オンライン鑑賞では、実物の大きさを実感できないデメリットがあります。それを補う方策として、実際のスケールを感じられるよう、このような活動を行いました。この授業の対象生徒には、障害の程度が重く発語のない生徒も少なからずいました。そのような生徒も、オンラインで画面に映し出された展示会の風景をしっかり注視している様子を見て、ICTを活用した鑑賞の授業の有効性を再認識できました。

連携で大切にすべきこと

連携の際、何を大切にすべきか。これらの実践を通して考え続けてきました。特別支援学校 高等部 学習指導要領（平成31年2月告知）の中には美術館との連携に関して、『『B鑑賞』の指導に当たっては、生徒や学校の実態に応じて地域の美術館や博物館と連携を図ったり、それらの施設や文化財などを積極的に活用したりするようにすること』とあります。私はこの文章の中で、「生徒や学校の実態」の部分に特に強調したいと思います。「生徒の実態」とは、具体的には発達段階や年齢、学習状況、生活環境、特別な支援が必要かどうか、「学校の実態」とは地域性や立地条件、学校規模、施設、教育課程の編成、職員の体制や専門性などの諸条件を指します。そのように考えると、我が国にはひとつとして同じ条件の学校は無いことに気がきます。連携を進める際は、個々に異なる「生徒や学校の実態」を美術館と共有して、実態に合った連携方法を学校と美術館が同じ目線に立って、一緒に考えていくことが何よりも大切です。

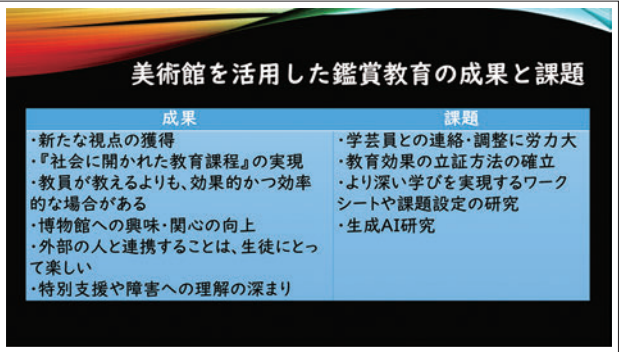
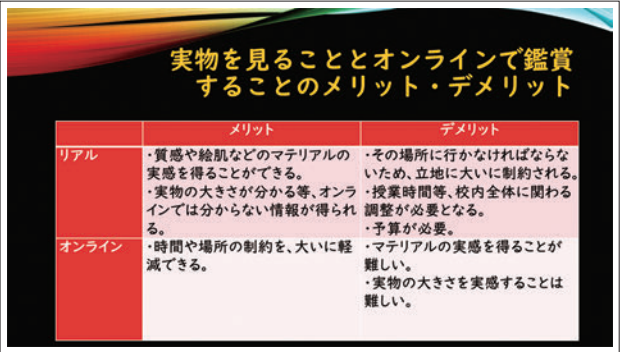
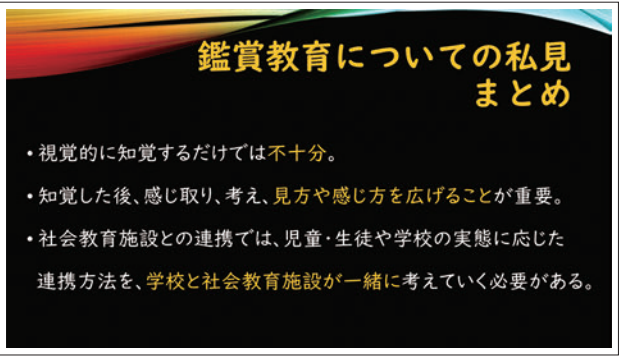
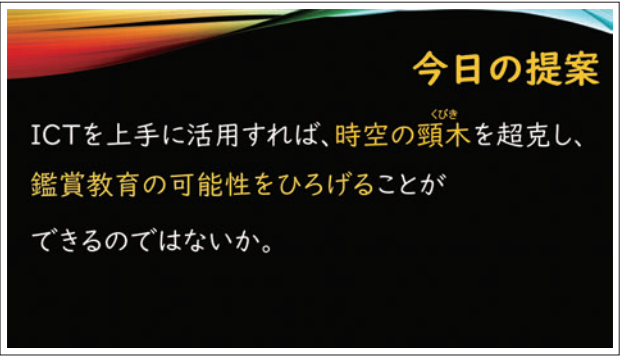
成果と今後の課題

美術館との連携で行う鑑賞教育の成果として、外部の方と連携することで教員も生徒も今までにない視点を取り入れられることが挙げられます。「社会に開かれた教育課程」の実現のために、美術館との連携は有効であると考えます。また、外部の方との連携自体、生徒の学習意欲を高める効果があるように思います。

美術館側にもメリットをもたらします。授業後、生徒に行ったアンケートは、美術館への興味・関心が高まったことを示していました。美術館の職員の方も、学校と連携をすることで特別支援教育や障害への理解が深まると考えています。一方、教員・学芸員間の連絡・調整の労力が大きいことや、教育効果の立証方法は今後の研究課題です。より深い学びを実現するワークシートや課題設定、生成AIをどのように鑑賞活動にいかすのかもこれからの課題です。オンラインでの鑑賞には、素材感や質感を実感することや、作品の実物の大きさを実感することが難しいなどのデメリットがあります。しかし、オンライン鑑賞は美術館を訪れる時間と空間の制約をかなり軽減できます。工夫次第では先ほどのデメリットを補うことも可能だと考えます。オンラインでの鑑賞とリアルでの鑑賞のメリットとデメリットを理解して、上手に使い分けることが、今、教育に関わるもの全員に求められていると思います。やり方次第で、リアルを支えるデジタルという最適解が実現できると信じています。

リアルで実物を見ることができれば、それが一番いい鑑賞でしょう。しかしながら実態によっては、なかなか実現が難しい場合もあるように思います。全ての人に等しく豊かな鑑賞教育を提供していくためにICTは重要で必要不可欠であり、可能性を秘めたツールであると考えています。今後も、さまざまな実践を共有しながら、皆さんと一緒に鑑賞教育の可能性を探り、広げていきたいと考えています。

講演スライドの抜粋



質疑応答

Q1

美術館職員の方と知り合いになって、実際にどのような切り口で連携を始めたらいのでしょうか。

何よりもまず大事なこととして、それぞれの実態を共有することから始めてみてください。連携の内容はそれによって大きく変わります。「世界の美術」という単元で連携した際には、私は専門外であるオリエント美術について授業を行うにあたり、協力を得るために美術館に電話しました。実現可能かどうかはさておき、美術館の方はお話を聞いてくださいます。勇気を出して連絡してみてください。必ず力になってくれます。

Q2

仕事量が多いと感じました。効率よく仕事ができる工夫があれば教えてください。

働き方改革にある意味逆行するような側面がある点については課題があります。まずは、私が行ったような先行事例の授業を参考にさせていただいて、同じようなことをやってみるのもお勧めです。その上で学校や生徒の実態に合うようにアレンジしていくのはいかがでしょうか。また、ICTの活用もお勧めします。生成AIを使えば、授業案の叩き台や学習プリントを効率的に作成できます。美術館との打ち合わせでは、オンライン会議ツールが力を発揮します。ICTを活用して、仕事量を軽減してみてください。

横浜美術館コレクションを活用した 授業のための中学校・美術館合同研究会

Speaker



端山 聡子 Satoko Hayama

東京国立近代美術館企画課教育普及室長。神奈川県生まれ。2013～23年に横浜美術館主任エデュケーター/主任学芸員として在籍した後に現職。横浜美術館では今回事例発表した中学校との連携ほか、生きづらさを抱えた若者のためのプログラム、中高生プログラムなどを企画した。



万木 麻里 Mari Yurugi

横浜市立汐見台中学校美術教諭。京都府生まれ神奈川県育ち、大学卒業後美術教諭として横浜市に勤務。美術鑑賞の大切さを感じ、横浜美術館のプロジェクトに参加。



古藤 陽 Minami Koto

横浜美術館教育普及グループエデュケーター、学芸員。東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻博士課程満期退学。主に学校連携事業やボランティア育成、鑑賞ツールやワークショップの企画を担当。

端山さんの発言

学校と美術館が連携したプログラム

横浜美術館では2016年度から2019年度の4年間、美術館の所蔵作品を活用して「横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会」を実施してきました。私が横浜美術館に勤務していたときに、授業案づくりから2021年のまとめのシンポジウムまで担当していましたので、まず私からプログラムの概要と課題についてお話します。参加されたのは10～12人の先生方で、活動期間は5月から12月までの8ヶ月間。教員3名程度と学芸員1名からなるチームを3～4チーム結成し、1年のうち3回以上のグループ活動を行いました。第1回目の5月は、所蔵作品の中から授業案を組み立てるための作品選定とチーム編成。2回目は授業の素案を各自が検討し、チーム内で協議しました。何回かチームでの協議を行い、作品を細部までよく見て文献資料を読むなどして作品への理解を深めました。第3回目は、12月の本発表会でした。すべてのチームが集まり、作成した授業案を発表し、参加した皆さんからフィードバックをもらって、授業案を検討しました。3月には、プログラムに参加していない市内の教員も参照できるように、できあがった授業案を横浜美術館のウェブサイトで公開しました。

チーム編成は、若手の先生やベテランの先生まで年齢やキャリアなどのバランスを考慮して、隔たりのないようにしました。この事業の特徴は、各自が素案を持ち寄り、何回かの協議を経てチームとしての案を共同で作成していくところにあります。また12月の本発表会では、当館の学芸員や関心を寄せている教員、指導主事の先生もオブザーバーとして参加してコメントをもらい、最終的にブラッシュアップした本案をウェブサイト上で公開する点も特徴的です。

この中での美術館職員の役割は次のとおりです。1.展示作品から授業案候補作品を選び、展示室での解説を行う。2.チームを編成する。3.作品・作家の資料の提供。4.チーム・協議の運営。5.中学校の研究授



業への出席。6.授業案ウェブアップのための編集作業。7.学校への周知。中でも作品・作家の資料の提供は、既存の文献や資料を共有するほかに、取り扱う作品に関する映画や書籍なども追加調査しました。また、チーム・協議の運営においては、授業案の意図を理解し、それぞれの目的と合うように完成させることや、展覧会情報の提供や作家と出会う機会をつくるなど、教員のリクエストに応じて様々なはたらきを行いました。

事業としてスタートする前の課題

横浜市には中学校が約150校、美術の先生が少なくとも150人以上いますが、横浜美術館の鑑賞教育の学芸員はわずか3名。中学校数と生徒数、美術館職員数の不均衡から、各学校を訪問してのプログラム実施、あるいは美術館に中学生に来館してもらうなどが難しいとわかりました。中学生は美術と出会うのに適した年齢ですが、どのように横浜美術館の作品を生徒に届けばいいのかという悩みもありました。こうした課題を検討し、先生方と美術館職員が協働で授業案をつくるという、約1年のプログラムとなりました。美術館職員が美術作品を介して先生方と授業について討議できたこと、先生方には美術館のさまざまな活動および教育の学芸員について知っていただけたことなどが本事業の成果だと思います。

万木さんの発言

写真を用いた鑑賞授業

私は、3名の教員によるチームでロバート・キャパの《Dデイ、オマハ・ビーチ、ノルマンディー海岸》(p.41 講演スライド左を参照)という作品を選び、授業をつくる取り組みに参加しました。まず、この作品を選んだ理由は、学校行事等で先生やカメラマンが撮るより生徒同士が撮影する写真は良い表情をしているのが印象的だったことがあります。そこには、撮る・撮られる側という関係性が、写真に反映されるということがあるかと思います。また、昨今のSNSの普及を見て、写真は生徒たちが身近に感じているツールだと思ったことがきっかけで、この写真作品の魅力を伝えたいと思いました。この授業の導入として#(ハッシュタグ)を活用することを思いつきました。しかし、その後、授業の導入としては相応しくないかもしれないと躊躇しましたが、一緒にチームを組んでいたベテランの先生と端山さんにも「ぜひやってみて」と後押しをしていただき、この形でいこうと決めました。9月に区内の研究授業があり、#(ハッシュタグ)は生徒と作品の距離を縮めるツールという説明をして指導案に盛り込み、管理職に確認しました。当初は厳しい顔をされましたが、なんとか指導案にして授業の実践に入りました。授業は前任の学校で行ったのですが、前任校は班活動やリーダーシップ育成に力を入れていたので、グループワークには慣れているという特徴があります。授業の導入で生徒に作品を見せ、「もしこの写真が（Instagramを模した）『擬

いてstagram』に投稿されたら？」という設定で、#（ハッシュタグ）をグループごとに分かれて短冊に書いてもらい、グループごとにまとめて黒板に貼っていくという形式で行いました。あまり話し合いが深まらない班もありましたが、「戦争」「怖い」「海戦」など様々なキーワードが出ました。その後ワークシートを配布し、何の写真なのか、どこで撮影されたのか、撮影したのは誰かなどを整理しました。作品そのものについてというよりは、写真に写っている状況はどのような状況なのかについての説明に終始してしまい、あまり良い授業展開ができずに消化不良に終わってしまいました。また見学していた生徒から、「戦争という重みのある作品にチャレンジするの？」という声があったり、SNSに慣れていない生徒がいたり、#（ハッシュタグ）に不謹慎な内容のキーワードがあったりしました。それについて私自身の力が足りないために、うまくカバーができないと悩みました。その際に一緒に授業をしていたベテランの先生から「そのような意見が出るのは、人間の感性として間違いではない。その後の気づきが大切だ」と言葉をいただきました。また、作品を社会問題と関連づける際に、答え合わせのようになって「正解は何」という授業展開になってしまいました。さらに思いつくまま、気楽に#（ハッシュタグ）をつけられないという生徒もいて、写真を撮る側の視線が生徒にはあまりないことに気づきました。結論として、#（ハッシュタグ）は残すが、平和教育の視点が必要だということ、しかし美術の視点としてここでは何が必要なのかということに気づきました。そこで初めて、ロバート・キャパはどのような思いでこの作品を撮ったのかということに、フォーカスしなければならないことに思い至りました。

作家についての資料にあたる重要性

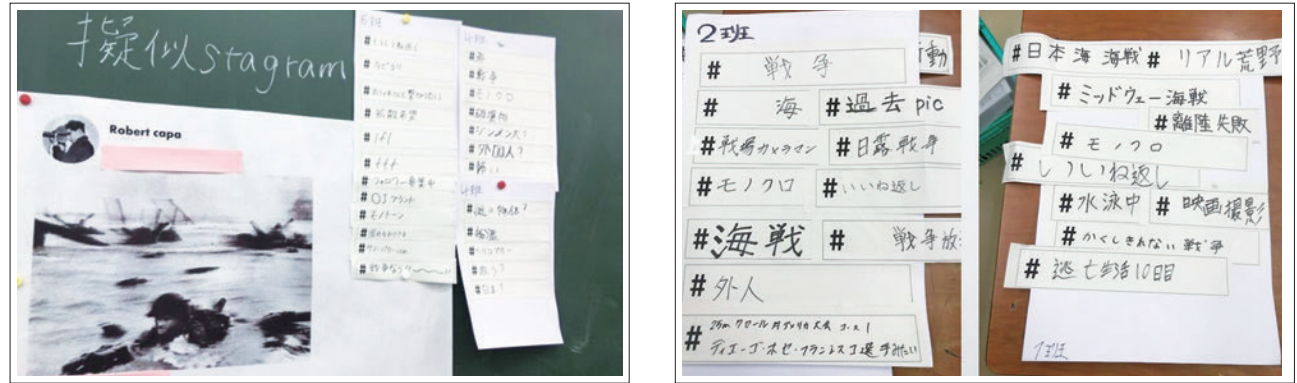
12月に横浜美術館で授業案を発表した際に、厳しい意見を色々な先生からたくさんいただきました。指導案をまとめられない気持ちを学年主任に相談したところ、ローテーション道德の授業を5回使うことを提案していただきました。そこで、『Dデイ、オマハ・ビーチ、ノルマンディー海岸』で写された第2次世界大戦のノルマンディ上陸作戦とはどういったものだったのか、キャパはどのようなカメラを使用していたか、戦場カメラマンとは？といったことにフォーカスしました。そこでノルマンディ上陸作戦をテーマにした映画『プライベート・ライアン』（スティーヴン・スピルバーグ監督）の冒頭を美術館で見せてもらいました。映画の冒頭のシーンを見ると、この一場面を写真に切りとったことのリスクを感じ、キャパが命懸けで撮影した写真であることも感じられました。またカメラについては、当時のカメラの性能がわからないので、そこをどうわからせるのかも悩みました。『ちょっとピンぼけ』（ロバート・キャパ著）を資料として読むと、この写真を撮影したときのキャパの臨場感あふれる手記が載っていて、これを授業で使用することにしました。当時の校長が元アナウンサーという職歴を持っていたので、手記を朗読してもらい、それを録音したものを生徒たちに聞いてもらいう形にしました。またワークシートの作問もシンプルにしました。①カメラマンはどうやって撮っているの？②写真とキャパの言葉を聞いて、わかったことや知ったことを書こう、としました。すると生徒たちからは、最初の授業からは想像もつかなかった意見がたくさん出てきました。私の中で、この授業を通して生徒にどんなことを伝えたいのかを整理するのに時間がかかりましたが、ロバート・キャパの作品の魅力や当時のカメラの技術など伝えることができたのは、良いことでした。

古藤さんの発言

プロジェクトを振り返って

私は授業案づくりから携わっていたわけではありませんが、横浜美術館の大規模改修工事による休館や担当職員の異動といったタイミングが重なり、1年にわたるふりかえりを担当することとなりました。今日はその内容をお伝えします。まず、中学校美術館合同研究会の特徴は、万木さんが語ってくださったように、教員と美術館職員が体験したプロセスがすべてだと思っています。作品と出会い、理解を深め、対話をしていくというプロセスを教員と美術館職員が経ることで、その経験は、生徒たちにどんなふうに作品と出会ってほしいかというプロセスに組み込まれていきます。この授業案づくりの現場がある種、作品を題材にした「主体的・対話的で深い学び」を教員や美術館職員が体験する場として、機能していたと言えます。また作品に関する対話だけではなく、つくった授業案についての対話也多層的に行われていました。自分たちがつくった鑑賞授業案をブラッシュアップすることが常に要求され、作品への理解が深まるのと同様に、取り組んでいる授業案についても理解が深

講演スライドの抜粋



まる時間になったのではないかと思います。

そうした事業の中で一番大きな成果は、美術館職員と教員が連携をすることで、連携相手への理解が深まることです。またその一方で、異なるバックグラウンドと専門性を持つ他者の客観的な視点を得て、自分が専門としている領域に関する気づきも得られていたことが印象的でした。美術作品・美術という教科は、美術館職員にとっても学校の教員にとっても専門領域ではありますが、例えば美術館職員からは、「毎日のように目をしているコレクションだけれど、学校の先生と見ていくことで新たな価値に気づくことにつながった」という声もアンケートにありました。

また、美術という教科が持つポテンシャルについて、美術館職員からは「美術の授業は生徒の人格形成にすごく関わっている」とか、学校教員からも「作品をつくることや自己評価をすることは、道徳でやろうとしている自分を見つめることとつながる」という発言もありました。「授業案をつくる上で、他の先生や美術館職員と話すことにより、自分の学校の実態や抱えている具体的な課題に向き合うことになった」という意見もありました。また「社会や国語など、子どもたちが普段学んだことがあった上で図工の授業が成り立つことに改めて気づいた」という意見も印象的でした。

課題と今後

4年間続けて見えた課題としては、教員にとって負担が大きい事業だったということです。作品とゆっくり出会ったり、授業で使う素材を実験したり、いろんな人と話すということに時間をかけるからこそ得られるメリットがある一方で、この研修は土曜の業務時間外に行われており、教員への負担もありました。今後もっと多くの方に参加してもらうような研修にするために、ゆっくり作品に向き合ったり連携相手を知ることに関時間を割きつつ、普段の業務とのバランスをどうとるのかという難しさがあります。また、完成した授業案についてコレクションに関するコンテンツという観点での振り返りができていない、活用のしやすさに関する評価などが追いついていないということが課題としてあります。

様々な目的や対象を見据えながらも、どこまでをひとつの事業の中でやるのかについては今後は整理をしながら、次なる一歩を構えていかないといけないと思っています。

質疑応答

Q1 参加する教員の告知や募集はどのようにしていますか？ また勤務時間外の活動だったとのことですが、参加する先生の自主性に委ねる部分が大きかったのでしょうか。

この事業の周知は各学校を通して行います。また教育委員会が行う総会で、この取り組みの紹介をしたり、口コミで他の先生に伝わるパターンも多いです。横浜市では独自の「授業づくり講座」という講座があって、土曜や平日の夜に教育委員会が授業づくりのための講座を開いていて、その一環に位置付けられていました。この講座への参加は業務の場合もあればそうではないこともありました。

丸亀市の全小学3年生を美術館へ 「カムカム・ミモカ」の活動報告とこれから



Speaker

大浦 美咲 Misaki Oura

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 教育普及担当。2021年より同館アートコミュニケーショングループで勤務。教育普及担当としてワークショップや学校向けプログラムの企画・運営、展覧会関連イベントの実施に携わる。現在は「カムカム・ミモカ」や長期型の地域連携プロジェクトに取り組む。

美術館は心の病院

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（以下、ミモカ）は、香川県丸亀市ゆかりの画家猪熊弦一郎の協力のもと1991年に開館しました。猪熊弦一郎本人から寄贈を受けた約2万点の作品を収蔵し、常設展として紹介するとともに、現代美術を中心とした企画展を開催しています。猪熊弦一郎は幼少年期を香川県で過ごし、現在の東京藝術大学に入学しました。その後、東京、パリ、NY、ハワイと国内外で活躍した画家です。個人作家の記念美術館は作家の死後に建てられることが多いのですが、丸亀市が美術館の建設を発表したとき、猪熊は84歳ながら現役で精力的に活動しており、自分の名前を冠した美術館の設計に計画当初から関わりました。当館は建築家の谷口吉生が、建築にも造詣が深かった猪熊弦一郎と対話を重ねて設計した美術館で、建築そのものも見所のひとつになっています。猪熊は美術館に対して、気軽に立ち寄れて、美しい空間でいい作品を見て、新鮮な刺激を受けて心が元気になる場所であることを求めました。また「美術館は心の病院」という言葉を残しています。猪熊は子どもたちに美術館の活動を通して美しいもの、新しいものに共感できる豊かな感受性と優しい気持ちを持った人間に育ってほしい。その手助けをするのが美術館の役割だと考えており、開館以来、子どもたちに対する取り組みを継続してきました。アートコミュニケーショングループでは、子どもを対象にスクールプログラムやワークショップを行う教育普及、子どもに限らず幅広い年齢層を対象に地域との関わりを深めるプログラムを実施する連携交流、そして広報事業にさらに精力的に取り組んでいます。本日ご紹介します「カムカム・ミモカ」は教育普及事業のスクールプログラムのひとつです。

カムカム・ミモカ

「カムカム・ミモカ」は、丸亀市のすべての小学3年生を美術館に招待するプロジェクトで、丸亀市教育委員会と当館が協働で行っています。令和5-6年度を準備期間とし、本年度から本格的に開始しました。丸亀市には全部で17の小学校と1つの特別支援学校があり、約1000人の3年生が当館にやってきます。このプロジェクトを通して初めて美術館に来る児童が多いため、猪熊の思いのこもった美術館の空間そのものをまずは気構えずに楽しんでほしいと考え「カムカム・ミモカ」と名づけています。来館に割り当てる授業は鑑賞する力を育むことを目的に、図画工作の授業や、郷土の偉人について考える機会にしたり、猪熊の生き方を知ることによって自己の生き方を考えるきっかけにしたりしてもらう目的で、総合学習や道徳の授業を活用する学校があります。また公共施設の見学とその役割を知ingことを目的に、社会科の時間を使った来館や、遠足などの学校行事に組み込むことも可能としています。

当日の活動内容と来館までの流れ

児童の美術館での活動時間は1時間で、最初の10分は美術館正面の広場でオリエンテーションを行います。



す。美術館とはどんな役割の施設か、ミモカの特徴、美術館での過ごし方、マナーを考え、館内で過ごす準備をします。その後グループ活動に移ります。大体2~4グループに分かれて、各グループにスタッフ2名が付き添い、40分の中で猪熊の生い立ちやエピソードをお話ししたり、常設展、企画展の作品を見ておしゃべりしたり、建物を探検したりします。鑑賞というと作品を見ることを考えがちですが、当館は建築も見所のひとつなので、作品に限らず美術館そのものを鑑賞することがこのプロジェクトの特徴に挙げられます。そして最後は、オリエンテーションを行った広場に戻り、気になった作品や場所を数名の児童に聞いて振り返りを行います。

来館当日までの流れとして、まず今年度は学校の来館期間を前・中・後期の3つに分け、そのどこかで来館してもらえるよう学校と調整します。そして各校の来館日が決まったら、当日児童を引率する教員に向けて事前研修会を行います。事前研修会は期間ごとに行っており、当日の集合場所やお手洗いなどの施設確認を行います。展覧会によっては会場が暗かったり、音が大きかったりという場合があるため、配慮が必要な児童のためにも内容の確認を事前に行います。

来館直前の事前学習には当館の紹介アニメーション「ビフォアミモカ」を視聴してもらいます。この動画は美術館での過ごし方や作品の魅力を伝えるために制作したもので、美術館でのマナーをコンパクトにまとめています。来館前日に見てもらうことで「明日は美術館に行くんだ」という期待とワクワク感を高めてもらっています。来館した児童へのアンケートから、美術館そのものを鑑賞するプログラムにしていることで、多くの児童に幅広く楽しんでもらえていることを実感しています。

このようなプログラムに至るまでの経緯として、当館は「カムカム・ミモカ」が始まるまでも、全国から授業や遠足、部活動で来館を希望する学校の受け入れを行っていました。また丸亀市内の高校生以下の団体が来館する際、交通手段を確保し提供する取り組みも行っていました。しかし長年継続する中で学校の校外学習先として利用してもらう機会にやや停滞感が見られ、スクールプログラムとして次の段階を考えていました。同時に、丸亀市や教育委員会でも学校の連携先として美術館の活用等を検討されており、教育委員会と協議を重ねた結果、丸亀市の子どもたちが「学校生活の中で必ず一度は美術館に行く」という経験を提供しようと共にプロジェクトに取り組むことになりました。

2年間の準備期間を経て

準備期間の1年目は美術館の近隣の学校5校と、離島の学校1校を招待しました。来館方法は、徒歩、バス、フェリーと様々で、児童数も10名以下から100名以上の学校までありました。スムーズな受け入れができるように、それまでのスクールプログラムで実施していた3つのコース（作品の鑑賞をメインで行う作品鑑賞コース、ワークシートを使いながら屋外作品をメインに鑑賞する施設見学コース、作品の鑑賞に加えて猪熊の作品を参考にしたものづくりを行う体験学習コース）から学校側を選んで活動してもらいました。

また、猪熊の人柄や思いを知ることによって来館した児童自身の生き方を考えるきっかけにしてほしいと願い、「よりよく生きる」というテーマのもと総合的な学習の時間で来館をお願いしました。来館前には教員に向けて事前研修会を実施しました。このとき、プロジェクト始動に向けての説明と会場の下見に加えて、意見交換を行い、不安や疑問点を洗い出しました。

このとき教員から「招待する学年は3年生が本当に適切か」「グループ活動をするなら引率の教員が足りるか」などの声があがりました。招待する学年については、必ず3年生と決めていたわけではなく、教育現場でよく言われている「9歳の壁」を迎える前後の3、4年生を招待するのがいいのではないかと考えており、まずは3年生を対象にスタートしました。

3年生を対象とすることに教員からは「春に来館する3年生は、少し前までは2年生だったことを考えると、春に来校するなら4年でもいい」「秋に来館するなら3年生がいい」などの意見がありましたが、4年生以上になるとカリキュラムも増え、年間行事の中に組み込むのが難しくなるという見方もありました。このプロジェクトは息の長いプロジェクトにしたいと考えており、学校側と美術館側双方に負担の少ない形で進めていきたいという思いがあったため3年生を対象に継続していくことにしました。

また来館の人数についても工夫が必要なケースもありました。グループ活動にあたっては、ファシリテーターが誘導する児童数は少ない方が臨機応変に動けるという利点があります。1学年に児童が100人以上いる場合、美術館としては1クラスずつ来館して、1クラスを4グループにわけて活動するのが理想でしたが、学校からは複数の行事がある中で負担が大きいのということ、また4グループに分かれて、それぞれに教員が同行することは難しいという意見がありました。そこで美術館側と学校側の状況を擦り合わせ、給食の時間と下校の時間を聞き取りながら、午前に2クラス、午後に2クラスに分かれる方法で来館してもらいました。

準備期間2年目は遠方にある10校と、昨年度のモデル校4校を招待しました。どの学校も美術館の滞在を1時間にして、作品を見ながらおしゃべりするコースをベースにしながら屋外の作品も鑑賞する活動内容に統一しました。このとき「3年生ならば造形体験やものづくりの体験があると良いのでは」という意見がありました。逆に「造形体験がないならもっと高学年でも良い」という意見もありました。一方、すでに体験学習で来館を体感した学校からは「作品を見て、その場で感想を言い合う時間がもっと欲しかった」という意見もあり、1時間という短い時間で鑑賞と造形体験の両方を行うことは難しいと感じたため、美術館の中で造形体験がなくても楽しく過ごせるプログラムへと変更しました。

また、このプロジェクトに割り当てる授業教科について教育委員会と意見交換を行い、学校側が調整しやすいように、総合学習の時間に限らず様々な授業に対応できるようなプログラムにもしていきました。このことによって先生方の選択肢も広がったのではないかと感じています。

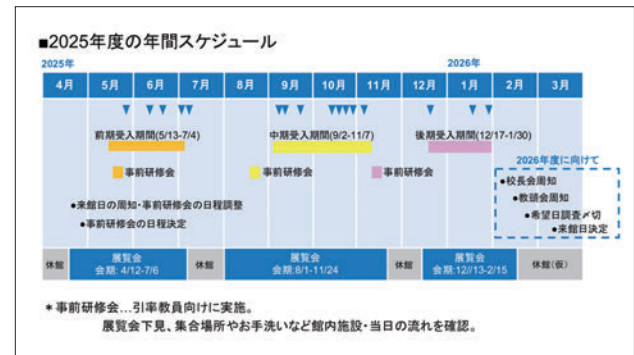
プログラムを経て起こった変化と改善点

教員からのアンケート回答よりプログラムを体験した児童には「自己表現が苦手だった児童が、図工の授業でどんどん自ら描き始め、自信ありげに見せてくれた」、「図工等で互いの作品を鑑賞する際、以前よりも意欲的に深く、意見を交わし合うようになった」といった変化が見られたようです。今後、カムカム・ミモカで来館した教員の方々には3年生以外を受け持った時も美術館を利用してもらえればと思います。改善点としては、1人のファシリテーターが引率する生徒は10名程度が適切だということ。それを実現するためにボランティア制度やアルバイトを雇用して体制を整えたいと考えています。また準備期間中は特別支援学校やフリースクールに通う子どもたちへのアプローチを行うことが難しかったため、現在は、丸亀市の3年生全員を招待できるように動いています。また1度訪れた児童や、これまで美術館を訪れたことのない児童が何度でも美術館に来ることができる機会を整えることが課題です。保護者と気軽に来館できるワークショップを実施したり、子ども1名につき同伴者2名まで無料になる取り組みを定期的に行ったりしており、それらを周知することは重要だと考えています。プロジェクトが本格始動した現在、事前研修会は主に引率の教員に出席してもらい当日の活動内容を中心に確認するため、プログラムそのものに関して意見交換する場が持てていないため、振り返りができる場を設けたり、来館後の児童の様子を聞き取りながら事後学習の相談会をしたりして、今後もプログラムをより良いものにできたらと思っています。

講演スライドの抜粋



■丸亀市内全小学3年生招待プロジェクト「カムカム・ミモカ」	
対象	丸亀市の小学3年生(約1,000人) * 全18校
時間	開館時間のうちの1時間程度
教科	図画工作・総合的な学習の時間・社会・道徳・学校行事等
目的	美術館を訪れ、非日常な空間を体験するとともに、猪熊の作品や言葉・現代美術と出会うことで豊かな感性を育む
主催	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・公益財団法人ミモカ美術振興財団/丸亀市教育委員会



質疑応答

Q1 美術館の職員の方は何人でプロジェクトを行っていますか。また、どれぐらいの頻度で教育委員会と連携していますか。

プロジェクトに直接関わっているのは合計2名です。当日の児童受け入れは他のスタッフやアルバイトを含めて合計で10人に対応しています。教育委員会のやりとりは決まっておらず、市役所に行った際に顔を出したり、電話やメールでいろんなお話をしたりします。平均して週に1回ぐらいのペースで連絡をとっています。

Q2 バス代を美術館が負担されているということですが、どのように予算を獲得していますか。

もともと丸亀市内の学校に対してバス代を負担することは行っていたことと、3年生を招待するプロジェクトへの機運が美術館全体であったので、こうした交通費の予算も計上できました。

Theme

鑑賞の2つの側面と作品についての理解

鑑賞教育についてどのように進めたら良いのか、戸惑うことがあるかもしれません。そもそも「鑑賞」という言葉には2つの側面があること。またさらに作品をより深く理解し、意義深い授業に繋げていくために理解しておきたい「文脈」について神野先生にご講演いただきました。



Speaker

神野 真吾 Shingo Jinno

千葉大学教育学部准教授。
1993年東京藝術大学大学院修了、東京大学社会情報研究所（現情報学環）研究生を経て、1995年より山梨県立美術館学芸員として「現代美術百貨店」（2000年）、「新版日本の美術」展（2002年）などの現代美術展を企画。2006 年より現職。
WiCAN（千葉アートネットワーク・プロジェクト）を主宰。

美術の教育的・社会的意味

今日お話しする上で、前提として強調しておきたいことがあります。それは、美術というものは大きなひとつのまとまりとしての体験だということです。行政的な教育制度の観点で見ると、生徒をどう評価するかという話になりますが、美術はひとまとまりの持続的に起こる変化や営みです。私が教えている千葉大学でもなかなか“美術まみれ”になる、ということはあまり見られません。もともと美術に興味がうすいのかもしれませんが、日本の社会自体が忙しすぎることに原因があるようにも思います。

そもそも美術は難しいですし、学習指導要領から逆算して美術を定義づけることは意味がない。美術に関して長年携わっていても知らないことはたくさんあります。新しい刺激を受けて自分の見方が変わっていくことは、美術においては常に起きうるものです。このように、そこに向き合い続けて自己を更新し続けることでしか美術とは関わられません。こうした経験の蓄積をつくっていく場所のひとつが美術館です。美術館との関係を大事にしながら、先生たちご自身も自らを肥やし続けてほしいと思います。

さて美術の教育的・社会的意味を考える際に、前提として芸術の位置づけについてお話ししようと思います。そもそも美術や芸術という言葉は、明治時代につくられた造語です。言葉がなかったということは、美術という概念がなかったので輸入した、ということです。芸術の誕生をラスコーの壁画まで遡って語るのも魅力的ですが、ここでは、私たちが教育で関わっている美術も含む芸術は、近代に生まれたと考えていきます。ドイツの哲学者ニーチェ（1844－1900年）は、「神は死んだ」と提唱しました。それまでキリスト教においては神が世界をつくり、世界は神との関係において説明され、どのように生きるべきかも神によって示されていたのに「神は死んだ」として、神の死後に人間がその肩代わりをすることが必要だと述べました。その際に、世界は科学と道徳と芸術という3つの領域に分けられました。科学は真理の探究を行うとし、客観的な真理をどういうふうに記述すべきか、それによって世界を正しく理解しようとしてきました。そして道徳は人間がどのように生きるべきかを、規範的正義や法によって定義した。そして芸術については、感性に関わる領域として位置付けられました。それまでの芸術は、信仰の対象であるキリスト教の聖書に登場する人物がいかにも魅力的で、素晴らしい存在に見えるかということが大事で、そのために感性的な刺激で奉仕してきたものが芸術です。しかし、ニーチェのいう「神なき世界」では、芸術は人間の感性に関わる領域が自立して、価値のあるものとして存在するようになっていきました。これは重要視すべきことだと思います。現在は、絵画や彫刻といった伝統的なジャンル以外でも芸術が多様化しています。それに対する批判もありますが、最終的な形としての絵画や彫刻だけが芸術そのものではなくて、感性的な



刺激を我々に与えて、何かを考えさせたりするものが芸術であると定義した方がいいでしょう。いずれにしても感性的な刺激、感じることを抜きにした芸術は存在しないということです。人間にとって感じることは極めて重要です。個人によって何を感じるかには偏りがありますが、だからこそ素晴らしいと言えます。日本の現状では「みんなと違う」ことにリスクを感じて「普通であること」を強調する人が少なくありませんが、それが日本の競争力のなさや新しい何かが生まれにくい状況にもつながっていると思います。そもそも美術の歴史では印象派もフォーヴィズムも最初は批判されました。しかし、後に評価する人が現れて標準化されると、さらにそれを超える人が出てきました。そのダイナミズムこそ、美術が他にはないものとして人類の歴史の中に刻まれている理由です。美術はとても大事な領域です。何かを感じて、それによって世界を意味づけ、具体的な行動に繋げることに関わる教科は実は多くありません。美術に対する社会的な期待は、大きいはずです。

芸術教育の目的

イギリス人の美術批評家であるハーバート・リードの『芸術による教育』の第1章に、芸術教育の目的として「人はその人自身になるように教育されるべきである（中略）人は、その人自身でないものになるように教育されるべきである」と書かれています。この言葉を理解するために、英語の「appreciation（鑑賞）」と日本語の「鑑賞」というふたつの言葉の違いについて考えいきます。英語の「appreciation」は鑑賞という意味の他に、批評・評価するという意味があります。つまり、主体である私が批評・評価して何らかの価値づけに関わる行為を行うということ。主体的な「私」が問われます。一方で、日本語の鑑賞ですが、鑑は模範とすべきものや規範を意味し、賞はめぐる・楽しむという意味です。つまり、すでに広く理解・共有されている価値のあるものをわかる・楽しむというニュアンスが強いということです。社会的な評価と自分の評価が一致することもあります。一致しないこともあります。例えば「モナリザは世界の名画」として、多くの人を惹きつけると言われますが、個人的にあんまり好きではありません。でもなぜ多くの人に良いとされているのか、その理由はわかります。このように自分の主体的な評価と一致しなかったとしても、「鑑賞」が持つ外にある価値や批判をわかることは可能なのです。私は「appreciation」を「意味生成の学び」と呼び、「鑑賞」を「文化の学び」と呼んでいます。「appreciation」と「鑑賞」が混乱されることのないように、また、これらふたつの言葉には違いがあることを把握しておくことが重要です。先ほどの「人はその人自身になるように教育されるべき」は、自分が感じたことを起点として、自分なりの見方や考え方を生み出していく。この活動を通して自分自身を知り、自分自身を構築し、さらには自分自身を表現していくことになる。これは意味生成の学び＝「appreciation」を指しています。一方、「人は、その人自身でないものになるように教育されるべき」というのは、日本語の「鑑賞」を指していて、社会一般で言われる評価や見方や考え方を知って、自分自身を構築すること。これらがもともとの自分にはなかったとしても、自分以外の他者が持つ見方や観点、感じ方は増えていきます。それ以前の自分とは違った存在へと変わって、進化していくことかと思っています。自分の中にあるものを出発点にすること、また自分の中にはなかったとしても、外にあるものに関心を持って、感じて、深く理解しようとすることで、その価値観は自分の一部になっていきます。

鑑賞の行為の仕組み 認知と行動の観点から

では、芸術を鑑賞する時にどんなことが起きているのでしょうか。感性・感覚と、知識と行動の関係について考えていきます。心理学者であり行動経済学者であるダニエル・カーネマンは、著書『ファスト&スロー』（早川書房）の中で人間の認知を、直感的で早い第1のシステムと、論理的でゆっくりした第2のシステムに例えて説明しています。直感的な第1のシステムは、パッと見て「なぜか惹かれる」といったひと目惚れのような認知のシステムです。一方で、第2のシステムは論理的でゆっくりとした価値判断です。カーネマンは、第1のシステムに深い思考はなく、自分の中にある知識や経験を瞬時につなぎ合わせて価値判断する「複雑な関連づけのパターンで現実を理解する連想マシーン」のようなもの、としています。美術鑑賞でも第一段階は、好きとか嫌いとか主観的なことを言うことが求められます。つまり、私という存在の中にあるものを使って、最初の反応として主観的な意見が現れる。これはすごく大事なことです。対話型鑑賞においても、導入としてそれぞれ違った印象を紡ぐことから始めるかと思います。しかし、これだけで終わってしまっは、作品の中に深く入ってあれやこれや考えて自分なりの答えを満たすところまで、なかなか進めない。鑑賞授業の核心は、ある作品を前にして作品の中にある造形的なものや表現の仕方などを見出し、自分の中にある知識や記憶を総動員して新たな知識や視点をさらに獲得して、作品についての解釈を作り出すことです。つまり、第1のシステムから第2のシステムに移行するところに授業の重要なところがあって、それをどう実現するかが鑑賞の授業の核心になります。「私」という存在は、私を取り巻く環境があって、そこからの刺激があって、いろんな知識情報が複雑に結びつけられています。それらは目には見えませんが、おそらくそうであろうと考えられています。そこに認知が生じて、その認知から行動が生じます。美術作品を鑑賞したときに抱く、好きか嫌いかといったことは視覚・味覚・聴覚・触覚といった感性情報がきっかけとなって生まれているのですが、どの作品と出合わせるのか、どういう視点・知識を与えるのかによって異なります。この点を考えていくことがすごく重要ですし、両者を統合して批評や価値判断を下すということを鑑賞の授業の中で、みなさんも取り組んでいこうと思っています。

どのような作品と出会うのか、作品理解とは何か

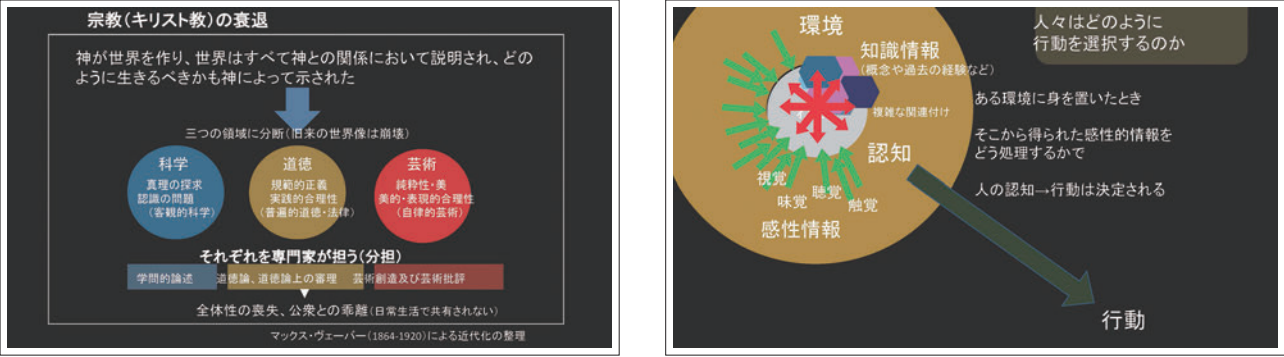
作品を解釈しようとする上で重要なのは「文脈」です。文脈が与えられないと、勝手気ままな意見を述べることで終わってしまいますし、単なる好き嫌いや印象で終わってしまうことになります。それだと美術のすごく分厚い営みを、かするぐらいしかできないでしょう。この「文脈」は非常に大事なのですが、美術作品を意味づける「文脈」は複数あります。

美術作品を意味づける「文脈」

- | | | |
|---|--|----------------------|
| 1. 作品そのものの文脈
・歴史的・社会的・文化的文脈
・芸術史的文脈
・制作の文脈 | 2. つくり手の文脈
・作者の個人的文脈
3. 受け手の文脈
4. 展示の文脈 | 5. 批評の文脈
6. 制度的文脈 |
|---|--|----------------------|

1. 作品そのものの文脈の「制作の文脈」は、マテリアルの進化に伴う作品の変化です。2. つくり手の文脈は、例えば作者が信仰心があつい、といったような作者自身の個人的な文脈です。また3. のように作品を受け取る側にも個人的な文脈があります。4. は展示方法や、展示空間のテーマといったものです。6. は美術館やギャラリーが、作家を選別するということです。こうした文脈が複雑に絡まり合っていますが、中でも最も重要なのが1. です。作品が制作された当時の政治・社会・経済・文化的な背景があり、その上で作品が成立しているんだということは、見る者にすごく強い影響を与えます。私は以前、開隆堂出版の美術の教科書を執筆しました。それまではピカソの《ゲルニカ》が解説なしに掲載されていたのですが、《ゲルニカ》が生み出された社会的な背景を説明しなければ、これは「変わった絵だな」という感想で終わってしまってもおかしくはないと主張しました。結果として、その時は3ページの見開きでゲルニカのページ

講演スライドの抜粋



をつくりましし、その後は他の教科書でも、《ゲルニカ》にくわしい解説がついていると思います。これは一例ですが、文脈を与えることは鑑賞にとってすごく重要なことになります。

また鑑賞の深度を高めるには、どの文脈が作品の核に関わっているかを見極める力が求められます。昨日のグループワークでは、アルベール・マルケの《港のクルーズ船》という作品がありました。この作品は「不安の時代の芸術」をテーマにしたコーナーに展示されていました。これはマルケがバリを脱出し、戦火を逃れてアルジェの港を描いたものですが、例えばナチスから迫害された芸術家の苦しみとか憎しみとか、そういう絶望感が強く打ち出されてる絵ではないので、文脈を与えられなければ、本当に平和な絵に私は見えると思います。ではこの絵を芸術的な文脈や制作の文脈、つまり芸術上の新しさや技術があるのではないかと、といった文脈で見てもそれは意味がないわけです。やはりこの作品を見て、自分なりの解釈を考える上で、必要で重要視される文脈があるはずで。これは「不安な時代の芸術」という展示の文脈が与えられて、さらに歴史的な文脈やつくり手の文脈といった複数の文脈を踏まえることが重要な意味を持つ作品と言えます。

19世紀のフランスの画家ミレーの《落穂拾い》という作品があります。山梨県立美術館には、それより2-3年前に描かれた《落穂拾い、夏》という作品があります。両者を比較してみると、《落穂拾い、夏》の方は、落穂を拾う農婦たちと、その後ろにある収穫物の山が、まるで望遠レンズで捉えたかのように近くに大きく捉えて描かれています。一方、《落穂拾い》は、絵の手前に落穂を拾う農婦たちと、その背景に遠くの方で大勢が農作業している様子が描かれています。ミレーは《落穂拾い、夏》を描いた後、《落穂拾い》を完成させるまでの間に構図を変えました。ここには作家の意図があったわけです。実はこの作品を理解する上では、刈り入れをする人たちは、収穫物にあずかれない最下層の農民のために地面の落穂を拾わないのだ、という文脈を理解していることが大事なのです。ミレーはこの2枚の絵を描く間に、貧しい人々が同じ共同作業に入れていないことを強調するべきだと考えたと思われます。また、同じミレーの作品《刈り入れ人たちの休息(ルツとボアズ)》では、絵の画面左にルツとボアズという旧約聖書の登場人物とその逸話が描かれています。先ほどの《落穂拾い》の主題は、このように古いテーマにも繋がっていることがわかります。また芸術史的な文脈で見ると、それまで農民を描くジャンルはなかったわけですが、ミレーは新たに切り開いたことによって、ジュリアン・デュプレやゴッホなど追従する人々がたくさん出てきました。こうした動きは、絵画だけにとどまらず、写真でもミレーの絵を真似してポーズするモデルを撮影するような作品も出てきました。

このように作品には多層的な文脈があるわけで、子どもたちに出会わせる作品は、こうした多層の文脈を踏まえた上で、どの文脈から作品を批判するか、学びとして設定する必要があります。直感的で、早い第1のシステムで感じた印象から、作品に付随する様々な文脈を知り、その重要性を検討しつつ、論理的でゆっくりした第2の認知システムで自らの解釈を行う。このプロセスを授業の中で成立させることが、鑑賞の授業のデザインだと言えます。美術は本当に難しいものです。「わかった」と思って、子どもたちに提供しても自分が思っているようには、響かないこともあるでしょう。また先に述べた様々な文脈を踏まえても、ひとつの作品から何が学べるかについては、いくつもの可能性を考えることになると思います。一方、美術館職員のみなさんには、エドゥケーターと作品の調査・研究をするキュレーターの間で作品の観点について、なかなか共有が難しい環境であるのが現状だと思います。今後、世代が若返っていく中で、こうした点がさらに変化していくであろうことを想像し、また期待しています。

ワールドカフェ

Facilitator

一條 彰子 Akiko Ichijo

国立アートリサーチセンター ラーニンググループリーダー
詳しいプロフィールはP.3を参照

85名の参加者が
20分間の対話を繰り返し、考えを深めた

ワールドカフェとは、参加者全体を少人数のグループに分け、各テーブルでメンバーを入れ替えて複数回シャッフルしながら対話を深める議論の手法のことです。今回のワールドカフェでは、受講者68名に加えて、講師、国立美術館の研究員など85名が4〜5名ずつのテーブルに分かれて、2つのテーマについて対話を行いました。得られたアイデアはテーブルに置かれた模造紙に書き込みます。1ラウンドあたり20分が経過したら、1人がホストとしてテーブルに残り、他の人はミツバチが花の花粉を集めに行くように他のテーブルへ席を替えていきます。この方法により、参加者ができるだけ多くの人とフラットに話せる機会が生まれました。また、最初と最後のテーブルは、研修後の交流にも役立つよう参加者の出身地域ごとに振り分けられました。

ワールドカフェのマナー

- テーマに集中して話し合しましょう
- 自由に言葉を書きとめたり、絵を描いたりしましょう
- 話は短く、簡潔に
- アイデアをつなぎ合わせてみましょう
- よく聞き、よく話しましょう
- 愚痴や不平を言う「ガス抜き」の場ではありません



ワールドカフェの手順

- Round 1**
テーマについて話し合う
- Round 2**
アイデアを他花受粉する
各テーブルに1名のホストを残し、他のメンバーは旅人として別のテーブルへ移動します。
- Round 3**
テーマを掘り下げて、さらに話し合う
- Round 4**
気づきや発見を統合する
旅人は最初のテーブルに戻ります。
- 全体セッション**
集合的な発見を収穫する

15:00 ~

Round

1

START

テーマ1：美術鑑賞で何が起きているのでしょうか？

—どのような気づきや行動、変化が起きますか？
—それはどのような学びにつながりますか？

会 場全体へ向けて、まず1つ目の対話のテーマが共有されます。各テーブルのメンバーは、前日のグループワークとは異なるよう構成されていたため、まずは自己紹介をします。あるグループでは、前日に自身が取り組んだグループワークがどのようなものだったかを他のメンバーに紹介しながら、テーマに関する意見を述べている場面も見られました。模造紙にはテーマやキーワードが書き込まれていき、誰かがそのキーワードに反応すると、各テーブルは徐々に明るい雰囲気帯びようになっていきました。

席替え

15:20 ~

Round

2

テーマ1のつづき

20 分が経過すると、他のテーブルへの席替えをします。唯一ホストとして残ったメンバーが、後からやってきた人へこれまでどのような話が行なわれたかを、模造紙を指しながら説明していきます。多くの会議では手元のノートを「議事録」や「自分だけのメモ」として使うことが多いですが、このワールドカフェでは、議事録を取る必要はありません。その代わりに、小さくメモを取るのではなく、全員に見えるように書くというルールが設けられています。まとまっていないアイデアでもまずは全員が見ることで議論のテーブルに上げていくことが大切です。

15:40 ~

Round
3

席替え

テーマ2：学びにつながる美術鑑賞を行うために、私たちは何をすべきでしょうか？

—教員として、学芸員としてできることは？—

教員と学芸員それぞれの立場から、学びにつながる美術鑑賞を行うために、「どういったことがしたいのか」という意思や目的、そして「どうしたらよいのか」という手段や解決策について議論が展開されました。テーマ1で得られた気づきや視点が、テーマ2での対話の土台となって、より実践的なアイデアや工夫が交わされました。模造紙はテーマが変わっても取り換えません。これは先のテーマで挙げたアイデアたちが思いがけず繋がる可能性を残すためです。3Round目になると、テーブルに身を乗り出しながらアイデアどうしを繋げたり、メンバーへ説明する場面も多く見られるようになりました。

席替え

15:55 ~

Round
4

全員もとのテーブルに「おかえりなさい！」

参加者たちは、Round 1のテーブルに帰ってきます。「ただいま」「おかえりなさい」という声があがります。会場全体は賑やかな様子でしたが、いくつかのテーブルでは真剣な面持ちで静かに意見を交わす場面や、考え込んで慎重にキーワードを書き込む様子も見られました。多くのアイデアや意見が出ることは、様々な素材を準備し、まな板に乗せることと似て、重要なステップ。しかしそれらをどのような料理にするかを考えるのもまた大切なプロセスともいえます。様々な意見を、目の前にあるテーマや参加者たちの様子と照らし合わせて意味づけをしていくということは、作品を前にして意見どうしを繋げながら応答していくファシリテーターの役割とも重なります。

16:15 ~

5

集合的な発見を収穫し、各自振り返る(沈黙の時間)

最後に、いくつかのテーブルから気づきやアイデアが発表されました。その後司会から、「印象に残ったキーワード」、「研修後に実行しようと考えていることは何か」という問いかけがなされ、参加者たちは静かに考え、付箋紙に書き込んでいきました。これまでの賑やかな会場とは違って変わり、2時間にわたる対話を通じて得たものを各々が意味づけし、言語化していく時間です。書き終えたら会場内のホワイトボードに付箋紙を貼り出します。それらを一望し、参加者どうしが意見を交換する場面もありつつ、本研修最後のプログラムであるワールドカフェは幕を閉じました。



ワールドカフェで集まった キーワードたち

2日間を総括する対話の記録

ワールドカフェの間、各テーブルで書かれた模造紙は18枚ありました。参加者たちの熱意や思考の軌跡が記録されているこの模造紙の中から、当時の熱気を帯びた議論や、立ち止まって考えるきっかけとなっていた問いなどを、キーワードとして抜粋してご紹介します。

手ぐくし 5
ア-トカート

一人ではできない
金監賞

本物に角虫丸

これにどうして
向いたのか？

味わう

ICT!!
DX化
↳ 集約に...

なにこれ？

指考者が
作品のこぼ
知ろあけよう!!

見え方が変わる

價值觀
+ 知識

新しい気づき
楽しい！美術館又おもしろい！
そういうことを先生が体験する！
しほちゃん！
来館利用につながる

④ 作者の意見と
 自分の意見が
 混ざって
 変化

美術の勾当力

子どもたち
の声
↓
身近なもの
に例える

3-1 思考 デザイン思考 を大切に。
課題発見 問題解決
価値

見ふは口
一生長く

内面のタガリ
深まり

作品にふかふかとて..
自分を見める
他者を笑う
自分とちがいを知る

何をも
捨てる

☆ 2種も1種も 背景に
あとも同じEやE+

準備はもうして...
待っ

批評と批判はちがう!!

自己肯定感

立場におて
視点が
わかる

最初と最後に
作品の印象が
違って見えた!!

自分と作品を結ぶには
付加価値が必要

ワールドカフェの 重要アイテム「模造紙」

ワールドカフェでは、18のテーブルに1枚ずつ模造紙が置かれていました。右図はその中のひとつのテーブルで使用されたものです。このように、ラウンドを重ねるたびに四方八方から参加者によって図やコメントなどが書き加えられ、各テーブルでユニークな模造紙ができあがっていきました。



“これまで”を振り返り、
“これから”を書く

ワールドカフェの最後、参加者全員が沈黙して
研修全体を振り返りました。そして「明日から自
分には何ができるだろう?」という問いについて
付箋紙に書き込みました。ここに紹介しているの
は、受講者が研修を通してインプットしたことを
踏まえて、「これから」の行動の指針やアイデアを
表明（アウトプット）するものとなっています。

自分のきもちを
色で表現でき
子があがいた...
(5歳くらいきもち...)

鑑賞するって
何だろう?
もっと考える。

ネガティブ・
ケイパビリティ
モヤモヤを
手のひらでひく

「見る」ことから
はじめる
広がる
深まる

美術館に
電話しよう。

もっと他校の
先生と話をし
つなげたい。
数々の
社会の歴史

多様な
美術館が用意して
ものはおもしろい

情報を
与えすぎない

鑑賞は美術科
だけじゃ
ない、
他の科も
だいじ

実現する

一冊一冊
で終わら
ないために

対話

同じ状況の
学校(こども)は
いない

オープンな
マインド

自治体レベル
で先生たちが
集り話し合
える機会を作る。

対話型鑑
賞の意義
やり方の整理

制作ばかりに時間を
つかう。鑑賞を大事に
する。安心して発言でき
る空間を作る。

生徒にとっては
1度だけの授業
をみんなの
思い出に
していく。

共感される
喜び。経験。
↓
共感で3人増える

学校と美術館
こども達の学びの
ために、お互い
遠慮しない。
正直になる

一度で
鑑賞を
深める必要
はない

答えがないから
学び合いが
できる

ヒト、
と之方

一定の価値
ではなく、多様
な見方を届ける

発達段階に
あわせて色々
鑑賞がある

いじり
は
しかりと

第1システム
(感性)と
第2システム
(文脈)

異質なものと
出会う機会を
すべての子どもに!

感覚
論理

常に子どもの
姿を見守る
ことがとても大切

一定の価値
ではなく、多様
な見方を届ける

一定の価値
ではなく、多様
な見方を届ける

アートカードを
購入する
(校長にチャット)
(司書にチャット)

ワールドカフェ的
形式でどんな人
が美術館に来る
のか想定してみる
→そこから何が足りな
いのか

創作:鑑賞
9:1
↓
7:30~

待つ
準備はするけど
答えを急がない

美術は、
個人の全てを
ひくくめて受け
入れることができる。
「包摂力」

美術館へ
学校へ。
もっとラフな
ものを

先生に
安心して美術館
に来てもらえるよう
対話も大切に。

自分自身。
学び直し
Update.

「感じる」と「感性」
を出発点にして、
対話型鑑賞を計
画する!!
自分の知らない自分を
知り、自分をよりよく知る
授業をする!(今年から)

出会う。出会わせる。
価値の変化。
文脈で作品を
見る。

能動的
鑑賞

待つ
準備はするけど
答えを急がない



Leadership Training for Teachers and Curators
to Enhance Art Museum-based Learning
美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

受講者の声



scenes

Leadership Training for Teachers and Curators to Enhance Art Museum-based Learning
Day 1
京都国立近代美術館
グループワークでの
1シーン

事後アンケート

課題解決の手がかりは得られたか ※抜粋

設問：本研修を経て、鑑賞教育・鑑賞プログラムを進めるにあたり、あなたが現在課題だと感じていることの解決の手がかりは得られましたか？ また解決のためにどのようなアイデアや行動ができそうですか？

鑑賞教育・鑑賞プログラムを進めるにあたって、今回の一番の成果は、「美術館側も何か取り組みたいと感じている」ということを知ることができたことだ。同じ方向を向いていることが分かったので、前よりも気軽にまずは電話やメールをしたい。また今回同じ県的美術館の方と知り合う事ができたのも良かった。美術館に行くためには準備も必要なので、出前授業を頼んだり、ICTを活用した鑑賞の充実も進めたい。(小学校教諭)

千葉市は小中の学校数が多いことから、費用面でも時間面でも、美術館を活用できていません。ただ、関東圏にあるため、校外学習のなかに組み込むことができると考えます。まずは、自校の校外学習から見直し、管理職に相談したいと思います。(小学校教諭)

解決の手がかりを得られたと感じています。美術館へ直接行けなくても、授業で扱う作品についての資料提供を相談する、オンラインでの鑑賞授業を行うことなどはすぐにできそうだと感じました。また、実際に美術館へ行くことの価値を他教科の先生方に伝えていくことで、生徒が美術館を訪れるチャンスを生むことができると感じました。どんなことが得られるかを知っていただく必要があります。他教科の先生方を対象に対話型鑑賞を行ったり、美術館で研修を行ったりすると、効果があると思いました。(中学校教諭)

全ての教科に鑑賞の視点があること。他の教師にも意識涵養を図りたい。まずは美術館と連絡を取り、鑑賞でどのような学びができるか検討する。一枚の作品とじっくり向き合い、深掘り鑑賞を協働学習で行う時間を大切にします。(中学校教諭)

解決の手がかりが見つかったように思います。まずは、美術館に行きます。そして、一つ作品を選び、この作品を生徒に紹介するとしたら、どうするか、と自分の中で、授業をイメージしていきたいです。(中学校教諭)

解決の手掛かり、得られました。鑑賞には、やはり作品の文脈(歴史的文化的背景など)をなくしては理解を深められないと思いますし、そこは外せない。高校生には鑑賞を通した学びが必要で、目的を持って作品を選び、共に学ぶ姿勢が私達に求められていると思います。直ぐにでも、自分のクラスの生徒たちに実践したいと思います。(高等学校教諭)

鑑賞においては効果的な題材、評価、生徒の反応、ワークシートなど様々な要素を同時に考えていく難しさを感じていました。準備の段階で深く作品の文脈を考え、与える情報を過多にせず、伴走する姿勢で発言を引き出していきたいと思います。(高等学校教諭)

今後、このようにしていきたいという行動指針ができました。鑑賞についてどのようなゴールで進めたら良いかが曖昧になっていたため、整理されて授業計画が立てやすくなりました。また、まずは自分の範囲内の美術部から、美術館へ連れて鑑賞の訪問する機会を今年作ってみたいです。(高等学校教諭)

今回得られた解決の手がかりは、「鑑賞教育はVUCAの時代を生き抜く力となる」です。教員一人ひとりが自身の知識や鑑賞の経験を深めることに加え、美術館や学芸員と連携し、専門性を活かした協働的な取り組みを進めることが不可欠だと強く感じました。こうした連携を通じて、子どもたちが自由に感じ、考え、表現するための力「VUCAの時代を生き抜く力」を育んでいくことができるのではないのでしょうか。(特別支援学校等教諭)

この研修を通して課題がはっきりしました。文脈の中での作品鑑賞や対話型鑑賞を行なっていくのが自分の課題であり、現在連携している美術館学芸員さんにさっそく次の鑑賞についての内容検討を持ちかけたいと思います。可能なら今年度中に共同授業として実施したいです。グループワークのやり方を参考に、学芸員さんと意図的に鑑賞させる作品を選び、その作品について学び、どのような活動をしかけるか、計画したいです。また、国立美術館のソーシャルストーリーなどの取り組みや今回の研修で学んだことを校内、美術館、地域の美術の先生と共有したいと思います。(特別支援学校等教諭)

たくさん手掛かりをつかめました。私は、指導主事の立場なので、鑑賞の授業をデザインするときに大切にしたいことを指導助言のなかにいれていこうと思います。また、指導助言の中で、実際に対話型鑑賞をやりながら、そのポイントを先生方に周知できたらいいなと思います。(指導主事)

まさに今、美術館でのアクセシビリティの壁に当たっており、この機会にちょうど学びを得られた。今月末の障害者向けプログラムにも早速生かしたい。(指導主事)

誰もが（つまりは担任が）ファシリテータとしての力を備え、日常的に実践していくことが求められる。あるいは、担任は事前と事後をどのように計画するかを考え、対話型鑑賞がボツンと存在するのではなく、鑑賞でついた力や生徒の様子を次にどう生かすかを考えていくという一連の流れをつくっていきたい。まずは美術館の館長さんや学芸員さんと、今回の研修について話をし、お互いの思いを伝え合うところから始めたい。(指導主事)

学校との連携の具体像を描くことができた。また、片方のみで進めるのではなく、現場や生徒を1番理解している先生と同じ目線に立った連携が不可欠だと知ることができた。(学芸員)

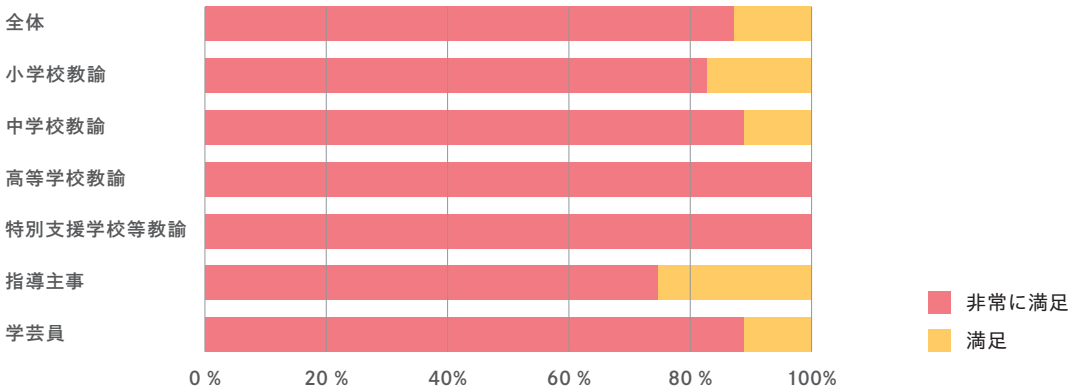
学校向けのプログラムの他に、先生方向けの研修も担当しています。今後の研修内容について、どのような内容がいいのか悩んでいましたが、これまで実施してきた内容(アートカードの活用、対話型鑑賞など)でも、その手法を通じてどんな体験を子どもたちにしてもらせるのかといった別の切り口を提供できるのではないかと、という気付きを得ました。また、限られた美術館滞在の時間を有意義に過ごしてもらうためには何ができるか、も課題でしたが、今回事前学習・事後学習が大切というお話を伺って、来館の前後のコンテンツを増やしていくことも滞在時間を意味のあるものにしていいただくことにつながるのではないかと感じました。(学芸員)

特別支援学校における鑑賞教育について、生徒の実態や学校側で抱えている課題、美術館に対する要望などを知ることができた。またそもそもアクセスすること自体が難しいという現状にも理解が深まった。ICTを活用した事例発表を参考に、オンラインによる鑑賞教室などが実現可能ではないかと考えている。(学芸員)

教員の方々との協議や研修、講演などで、教員の方々がどのような考えで来館するのか、疑問点を持ちうるのかなどを知ることができたのが今回の研修で大きい手がかりでした。例えば来館する前に、事前授業を行いたいけどどのようなことをポイントにすればいいかなどは、定型のプログラムの場合は要素を整理し、打ち合わせなどでお伝えして協議できるのでは、などアイデアも得られました。(学芸員)

小学6年生の鑑賞会に対話による鑑賞を行い、物事にはさまざまな見方・解釈があることを伝える努力をしていますが、どこか手ごたえのなさも感じていました。美術館で児童たちにどういう体験をしてもらいたいのか、その先にはなにがあるのかを先生と共有・共謀していくことが大事であることに気がつきました。「お任せください」ではなく、美術館も学びの場であることをきちんと表明し、先生のことも巻き込みながら進めていきたいと思います。(学芸員)

総合評価



※「ふつう」「やや不満」「不満」はいずれも0%だったため割愛

講演の感想 ※抜粋

様々な鑑賞の実践を拝見し、子どもたちの学んでいく姿、教員として実践を積み上げていく面白さを実感しました。授業でも鑑賞教育の工夫は無限だと感じました。鑑賞と appreciation との違いがよくわかりました。目の前の作品をよい作品と決めつけて正解を探していく鑑賞になりがちであることに危機感をもちました。自由に作品を味わいつつ作者に寄り添い、作品と作者への敬意を忘れない鑑賞ができたら素敵だと思いました。そのために、教員はどんな仕掛けをしていくことがよいのか考えていきたいと思います。(小学校教諭)

私自身が鑑賞教育で何となく感じていることや悩んでいることを言語化してくれた講演でした。平田先生の講演では、子どもの実態に合わせて、学習指導要領の内容を踏まえた鑑賞教育を実践することの重要性を改めて感じました。また、神野先生の講演では、より鑑賞を深めるために、子ども自身が新たな視点や意味を獲得することの重要性と、そのために必要な作品の文脈の理解について学ぶことができました。(中学校教諭)

教員は作品をみるのではなく、生徒の顔を前からみること(リアクション)で鑑賞による生徒の変容に気付くことが大切だと学びました。(中学校教諭)

学習指導要領の大切さを改めて感じたことと、学習指導要領が強すぎる。との一見相反するような考え方が頭の中にあります。それくらい美術というものはわからないものなんだと。芸術はひとつの教科ではあるが、生きることに直結する教科であり教科横断的な取り組みが必須だと改めて思いました。(高等学校教諭)

学習指導要領に則った内容でより効果的な観点から鑑賞のアプローチについて考える機会となり、授業での内容を見直し実践したいと思いました。言葉の印象で鑑賞を捉えていた部分もあったので、細かく意味を理解することや様々な文脈を学習することで、題材や目的に合った作品を考えるポイントになるように感じました。より作品や時代背景などの知識を深めていきたいと思います。(高等学校教諭)

感じることで終わりがちな自分の実践を、自分の知識や経験から解釈し新たな認識を得て自分を更新していくような実践に変えていけるよう、考えてみたいと思いました。特別支援学校の生徒は表出が苦手な生徒が多く、見とることに工夫が必要ですが、感じること、感性はむしろ秀でていると思っています。その感性をつぶさずに気をつけながら、自分を多面的に見ることや視点を広げること、強く生きるための自己肯定感を高めるような自己更新、鑑賞を含む美術の教科の特徴と意義について再認識しました。(特別支援学校教諭)

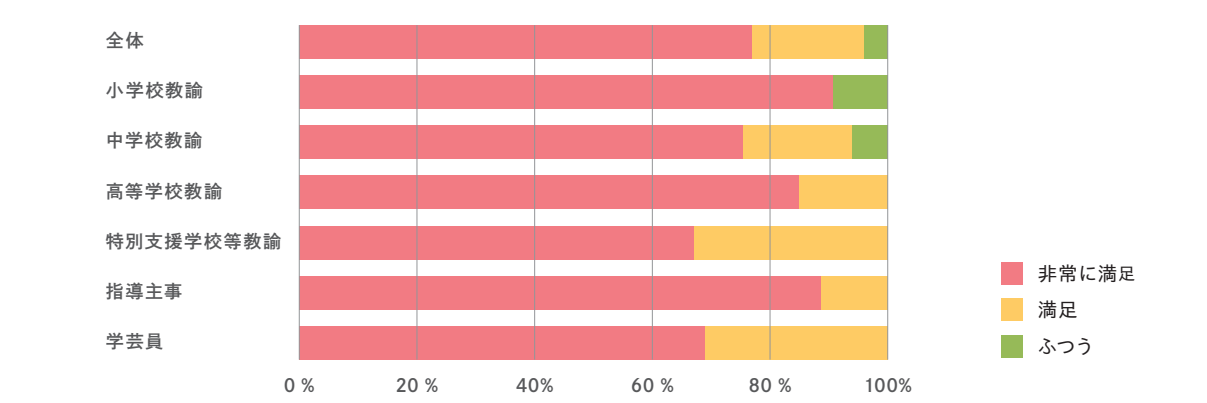
鑑賞の時は、生徒の表情をみること、作品をどうじっくり見せるかがポイントとおっしゃっていて、自己との対話の時間、他者との対話のあともう一度考える事で鑑賞が深まると整理することができました。神野先生の講義では、美術って難しいけど、どのような作品を生徒に出会わせるのか、重要視される文脈はどれかなど、ねらいをどこに持って鑑賞計画をたてるのか、軸となるもので、講義を振り返ってしっかり理解したいと思いました。(特別支援学校教諭)

現行指導要領の目指す姿が、小中高と連続した視点で整理して話を聞くことができた。2日間の指針となる講義でした。(指導主事)

改めて、「鑑賞」とはなんなのか、鑑賞によってなにが起きているのかを考えるきっかけとなりました。どのような作品と出会わせるか、「文脈」をどう扱うかで子どもたち自身が得られるものが大きく変わってくることだったので、下調べや出会いの事前、事後の時間をもっと大切にしていきたいと改めて思いました。(学芸員)

「美術とはなにか」という問いを更新していきたいと思います。鑑賞教育において、美術作品がもつさまざまな文脈(見えない情報)をどこまで伝えるか(伝えられるか)は、とても難しい課題だと思います。(学芸員)

講演の満足度



事例紹介の感想 ※抜粋

学校、美術館、地域など、単体で考えるのではなく、地区単位で交流の場があるといいなと感じています。お互いに無理の無いように、続けていく方法があればいいなと感じました。(小学校教諭)

特に足立特別支援学校のICTを活用した美術館との連携の授業が印象にのこりました。東京都に勤務しながらも、実際に学年や学校単位で生徒を美術館へ引率することに難しさを感じていたので、デジタル上で美術館にふれられることに魅力を感じました。(中学校教諭)

MIMOCAの実践は街の美術館として非常に重要な役割を果たしており、アートを身近なものにする上で重要な役割を果たしていると感じた。特に小学3年生にあのようなプロジェクトを施し、自由で楽しい造形へのマインドセットを育むことになるので、同様のプロジェクトが全国に広がってほしい。(中学校教諭)

年間35時間という限られた美術の授業時数で、鑑賞の授業に大きく時間を割けない現状がある。以前より、よい鑑賞の授業は道徳の授業に近いものがあると感じていた。ロバート・キャバの作品と彼の人生を扱う鑑賞の授業は、道徳の授業でねらう価値項目とも合致する部分がある。道徳としても扱える美術鑑賞の授業をつくっていくことは、美術教育の可能性を広げることにもつながる。(中学校教諭)

実践例を見て、距離、時間を言い訳にはできないと思った。文脈を全て一人で賄うことはできないので、美術館、他教科の専門家に文脈を補完してもらう協力体制を作ることが大切と考えた。(高等学校教諭)

横浜美術館と中学校との取り組みは、すごい労力と目的に向かう皆さんのエネルギーがひしひしと伝わってきました。わたしが特にいいと思ったのは、万木先生がご自分で失敗と感じたことを隠さずに、その後の先輩教員とのやりとりから修正を重ねていき、授業準備し、授業実践したことを生き生きとしたご自分の言葉で語ってくださったことです。(特別支援学校等教諭)

横浜市や丸亀市の実践を聞きながら、やはり先生方が単独で頑張ろうとしても、日々の忙しさから実現するまでは相当な時間と労力が必要だと思いました。その部分を委員会や市、美術館がサポートしていただくだけでも、実現可能なことはたくさんあると感じました。(指導主事)

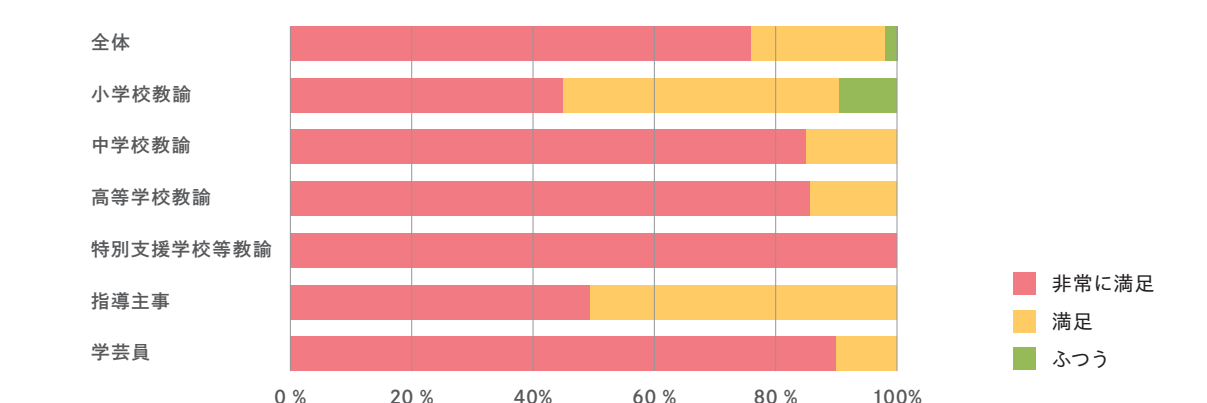
図工や美術にとどまらず、道徳などの別の教科への広がりもあるということは、意識していなかった点だったので、美術館からも他の教科とも結びつけられる、という提案ができるんだとアイデアをもらえました。自分の地域、自分の館だったらどんな連携ができるのか、想像する手がかりをたくさん得られたと思います。(学芸員)

ミモカの事例も、私どもでやりたいことだったので興味深く聞いていました。実現まで丁寧に三者(教育委員会、学校教員、美術館)が意見交換をしているところがミソだなと思いました。(学芸員)

質疑応答の時間で質問される内容が、本当にどれも自分が働いている館にも関わる内容で、事例紹介ももちろん勉強になりましたが、悩んでいることの共有が質疑応答でされていたような気がしてとても重要だったと思います。質問の回答が自分の館ではできなかったとしても、同じ悩みを持つ館の方と話すきっかけになりました。(学芸員)

簡単に「連携」という言葉は耳にしますが、学校も美術館も子どもたちも納得いくような授業やプログラムを組み立てるためには、膨大な時間と熱量が必要であるということを実感しました。立地や予算の関係で困難に感じられることも、工夫次第で実現できることもたくさんありそうなので、まずは自分にできることから始めてみる勇気が出てきました。(学芸員)

事例紹介の満足度



ワールドカフェの感想 ※抜粋

全国の方たちと話すことで、地域による工夫や強みなどを知ることができました。そして、**自分の自治体の課題が明確になりました。課題を受けとめ、自分の地域の鑑賞教育を広めていきたい**と思いました。(小学校教諭)

最後は、同じ思いのある同じ県の方と出会えてとても嬉しく思いました。事例紹介をして下さった方々にも、出会いや話すチャンスがあったこと、また**美術に関するが、職種が異なる方々との交流も、視野が広がりますごく勉強になりました**。またぜひ、参加したいです！(小学校教諭)

ワールドカフェを初めて体験しました。**各々が経験し獲得してきた美術を土台として、互いの意見を伝え合うのは、とても面白かったです**。相手の話に耳を傾け、自分の感じ考えたことを言葉にするなかで、自分の頭の中も整理されていきました。(中学校教諭)

話し合いの中で印象的だった言葉は「文脈」と「人と人とのつながり（認め合い）」(生徒同士や教員や美術館の方向士または全部)です。生徒も多方面から情報が入ってくことで、**一つのことでも多方面から考える機会ができ、多面的に見ることができる**と思いました。そこで、**知識や考え方の広がりや深まりが醸成されるのではないかと**思いました。今回のワールドカフェはまさにその体感だったと思います。(中学校教諭)

日本全国、様々な校種の先生方そして学芸員の方々と意見を交わすことができました。2日間の研修の総まとめとして、鑑賞教育について自分事として考えることができ、大変有意義な時間でした。**他の先生方の発言を受けることで、「自分だったら・・・」と自分が置かれた立場や、自分にできることについて改めて見直す良いきっかけとなりました**。(中学校教諭)

どなたも様々な意見がありましたが、**今回の研修で学んだ内容を自分の地域や内容に置き換え話されている事が印象的**でした。交代時は静かになることで区切りが付きやすく次につながると感じましたので、授業でも試してみたいと思いました。(高等学校教諭)

「ワールドカフェ」という対話の形式を通して、**多様な立場や考えを持つ方々と自由に意見交換をする機会を得たのは、初めての貴重な経験**でした。どのグループでも共通するニュアンスの意見が見られたことには驚きと共感を覚え、参加者同士の価値観の共有に強い手応えを感じました。アウトプットとインプットを繰り返すことで、**自分自身の考えもより明確になり、思考が徐々に磨かれていく**感覚がありました。このような**対話の積み重ねが、教育実践の質の向上に間違いなくつながっていく**と感じました。(特別支援学校等教諭)

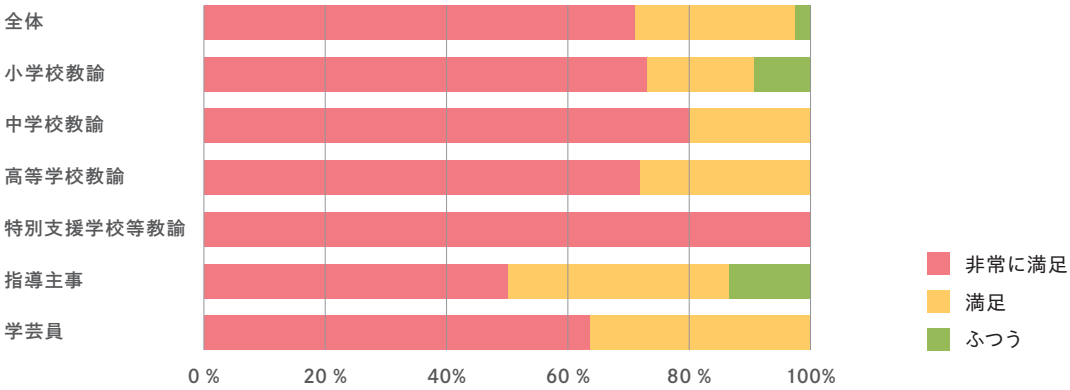
アウトプットするなかで、学んだことが再構成されていきました。2日間の最後に、より多くの方とお知り合いになれたのも、良かったです。**ワールドカフェは、これから企画する研修会でも取り入れたい**と思いました。(指導主事)

1日目のグループワークについて、講評で聞くことができなかった中学校、高校チームでの実践なども教えてもらえて、興味深く聞きました。学芸員なので、ワールドカフェでいろいろな学校の先生方に、**教育の現場で起きていることや、内容の比重が学年によって変わっていくことなどを教えてもらえたことが勉強になりました**。(学芸員)

多くの先生方と意見を交わし合うのは楽しかったですし、**連携にあたってお互い少し遠慮があることもわかりました。遠慮せずぐいぐい、前のめりにいくくらいでちょうどいいのかなと実感**しました。先生方の子どもへの願いを学芸員が丁寧に受け取って、一緒になって鑑賞体験を作り上げることの大切さを実感しました。美術館の広報も同時に頑張らないといけないなと思いました。(学芸員)

業務の壁を超えて、お互いがどうしたいのかをざっくばらんに話し合えたことで、自分がすべきことや求められていること、したいことがうっすらながら見えてきたように思います。(学芸員)

ワールドカフェの満足度



Leadership Training for Teachers and Curators
to Enhance Art Museum-based Learning
美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修

20年間のふりかえり



指導者研修20年の記録

今年、指導者研修は20年という節目を迎えました。次ページから、その歩みを記録としてまとめています。資料を振り返ると、年に一度の開催とはいえ、この20年間は多くの方々の献身的な協力によって支えられてきたことがよくわかります。そこには、「美術館を子どもたちにもっと開かれた場所にしたい」「子どもたちに本物の美的体験をさせたい」という、たくさんの情熱と信念が息づいています。こうした思いの結集としての20年の積み重ねが、鑑賞教育をめぐる状況を少しでも良い方向へと導く力になったのではないのでしょうか。

最初の指導者研修が開催される9か月前、2005年12月に遡ります。当時の辻村哲夫国立美術館理事長のもとで、初の委員会が発足しました。目的・内容・対象者をどう定めるか——「美術館を活用した教育の充実」に向けて議論が始まりました。当時は、各地で学芸員や教員による鑑賞教育の取り組みが散発的に行われていたものの、その知見が共有される仕組みはなく、また鑑賞の教育的意義についても共通理解が十分に育っていない状況でした。

10名の委員による真摯な討議を経て、翌年3月の第4回委員会で奥村高明座長から提言が示されました。内容は、「国立美術館がナショナルセンターとして全国の関係者を集める研修を実施し、地域の実践や教材を共有する場を提供すること。そして、受講者が学びを地域に持ち帰ることで、美術館と学校をつなぐ結節点（ハブ）となること」というものでした。

研修の内容は、講演や事例紹介などの座学にとどまらず、休館日の展示室で作品を前に少人数で行うグループワークや、全員で意見を交わすワールドカフェ形式の討議など、実践的で対話的なプログラムが特徴です。美術鑑賞の根幹である「見る」ことを中心に、学芸員と教員が立場を越えて協働し、共に学び合う場として発展してきました。また、毎年、受講者への詳細なアンケートを通じて改善を重ね、より良い研修のあり方を探り続けています。

この20年の記録が、今後の鑑賞教育の発展に少しでも役立つことを願っています。

*本記録の編集・執筆は、国立アトリサーチセンター（一條 彰子・濱野 絵美）が担当しました。
*次ページ以降に掲載されている講師等の所属は、研修開催当時の情報に基づいています。



これまでの指導者研修WEB報告書は、以下からご覧いただけます。
国立アトリサーチセンター ウェブサイト
<https://ncar.artmuseums.go.jp/archive/reports/learning/traing/training/>

手探りの1年目

2005年末に設置された「国立美術館の教育普及等に関する委員会」での数回にわたる検討の結果、2006年より「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を開始することになった。①美術館と学校の連携を前提とした「鑑賞教育」をテーマに、②教員と学芸員が全国から集まる、③3日間の研修、という3つの特徴を持った本研修は、国立美術館にとって初の試みであり、すべてが手探りのスタートとなった。特にグループワークは、事前にファシリテーター（進行役）が何度も集まり、目的や進行方法について打ち合わせたにもかかわらず、研修当日は苦戦するグループが多かった。主な理由は、教員と学芸員の考え方や専門領域の違いから来るものであったが、逆に、この違いを知ること自体が連携への第一歩では、と気付いたともいえる。

冒頭の記念講演は、河合隼雄氏（文化庁長官）に登壇いただき、心理学、教育学の立場から、子どもの感性教育の重要性を説いていただいた。

3日間とも日本の近現代美術が概観できるコレクションを持つ東京国立近代美術館が会場であった。開館日である2日目のグループワークでは展示室を使用できないため、館長室まで使った狭いバックヤードで行わざるを得なかった。課題を多く残した初年度であったが、受講者からの評価は高く、このような研修が待ち望まれていたとの手ごたえを得た。

受講者数

131名 (小学校教諭 33名、中学校教諭 43名、指導主事 19名、学芸員 36名)

グループワーク
ファシリテーター

- 田中 晃
(埼玉県立近代美術館 学校・教育普及担当課長)
- 柴崎 裕
(多摩市立第三小学校 教諭)
- 白濱 恵理子
(東京国立近代美術館 企画課 研究補佐員)
- 酒井 敦子
(国立西洋美術館 学芸課 研究補佐員)
- 西村 徳行
(筑波大学附属小学校 教諭)
- 今井 陽子
(東京国立近代美術館 工芸課 主任研究員)
- 三澤 一実
(文教大学 教育学部 助教授)
- 寺島 洋子
(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
- 山田 一文
(埼玉大学教育学部附属中学校 教諭)

ギャラリートーク
トーカー

- 柴崎 裕
(多摩市立第三小学校 教諭)
- 寺島 洋子
(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
- 白濱 恵理子
(東京国立近代美術館 企画課 研究補佐員)
- 妹尾 喜久子
(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
- 井澤 由利子
(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
- 西村 徳行
(筑波大学附属小学校 教諭)
- 一條 彰子
(東京国立近代美術館 企画課／主任研究員)
- 松永 かおり
(目黒区立第八中学校 教諭)
- 三澤 一実
(文教大学 教育学部 助教授)
- 山田 一文
(埼玉大学教育学部附属中学校 教諭)

ギャラリートーク 協力

筑波大学附属小学校のみなさん（西村 徳行 教諭）
埼玉大学教育学部附属中学校のみなさん（山田 一文 教諭）
目黒区立第八中学校のみなさん（松永 かおり 教諭）



8月7日(月)

東京国立近代美術館

- 12:40 ● 受付
- 13:00 ● 開講式
- 13:10 ● オリエンテーション

- 13:20 ● **講演①**
「子どもの心と鑑賞」
 河合 隼雄
(文化庁長官)

- 14:10 ● **ギャラリートーク見学**
小・中学生対象の5本のギャラリートークを自由に見学する

- 15:15 ● **グループワーク①**
8グループに分かれて、展示室内で鑑賞、討議を行う

- 17:30 ● 情報交換会（希望者のみ）
- 終了

8月8日(火)

東京国立近代美術館

- 9:15 ● 受付
- 9:30 ● **講演②**
「創造的行為としての鑑賞」
 奥村 高明
(文部科学省初等中等教育局 教科調査官)

- 10:30 ● 休憩

- 10:40 ● **事例紹介①**
「学校と美術館をつなぐ学習教材—作成から活用を通して」
 池田 真規子
(神戸市立小磯記念美術館 指導主事)

- 11:20 ● **事例紹介②**
「大原美術館教育普及活動の基礎」
 柳沢 秀行
(大原美術館 学芸課長)

- 12:00 ● 昼食

- 13:00 ● **事例紹介③**
「美術館と学校の連携 広げるシステムづくりと深めるプログラムづくり」
 田中 晃
(埼玉県立近代美術館 学校・教育普及担当課長)
 田島 均
(さいたま市立大牧小学校 教諭)

- 13:50 ● 移動

- 13:30 ● **グループワーク②**
討議を行う

- 17:30 ● 終了

8月9日(水)

東京国立近代美術館

- 9:15 ● 受付

- 9:30 ● **講演③**
「函をひらく —〈美術／館／教育〉の名のもとに その逆説と可能性—」
 長田 謙一
(首都大学東京 教授)

- 10:30 ● 休憩

- 10:40 ● **グループワーク発表**
グループワークの成果を代表者が発表し講評を受ける。
 講評：長田 謙一
奥村 高明
三澤 一実
(文教大学 助教授)

- 12:40 ● 閉講式

- 13:00 ● 終了・解散

会場に国立新美術館が加わる

第1回の2日目の会場が狭すぎたとの反省を踏まえ、六本木にオープンしたばかりの国立新美術館が2・3日目の会場となった。

最大の課題であったグループワークの運営については、事前のファシリテーターによる会議で次のことが確認された。美術館空間を活用し、①課題作品をじっくりと鑑賞→②鑑賞の意義を共有→③鑑賞プログラムを考えるように進めること。結果、グループワークが「研修中最も楽しく意義ある活動であった」とのアンケート評価を得る。半面、プログラム作りという課題が、学校の「指導案」作りに偏りがちで学芸員が参加しにくいとの指摘や、業種・校種別に抱える悩みや問題の解決に焦点化してほしいとの要望も残った。

研修終了後も、研修内容が受講者から各地域に共有されるよう、この年から報告書を作成し、冊子にして配布することとなった。

受講者数

139名(小学校教諭38名、中学校教諭48名、指導主事33名、学芸員20名)

グループワーク ファシリテーター

西村 徳行(筑波大学附属小学校 教諭)
柴崎 裕(多摩市立多摩第三小学校 教諭)
谷口 幹也(九州女子大学 人間科学部 人間発達学科 講師)
寺島 洋子(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
三澤 一実(文教大学 教育学部 准教授)
山田 一文(埼玉大学 教育学部附属中学校 教諭)
松永 かおり(目黒区立第八中学校 教諭)
今井 陽子(東京国立近代美術館 工芸課 主任研究員)
藤吉 祐子(国立国際美術館 学芸課 研究員)

グループワーク 記録者

赤崎 陽子(東京国立近代美術館 フィルムセンター 研究員)
広瀬 晶子(東京国立近代美術館 フィルムセンター インターン)
齊藤 佳代(東京国立近代美術館 工芸課 事務補佐員)
弘中 智子(板橋区立美術館 学芸員)
鳥居 茜(国立新美術館 学芸課 研究補佐員)
豊田 直香(京都国立近代美術館 学芸課 研究補佐員)
小野 範子(神奈川県教育委員会 教育局 子ども教育支援課 指導主事)
酒井 敦子(国立西洋美術館 学芸課 研究補佐員)
中村 喜代子(東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
相田 隆司(東京学芸大学 芸術・スポーツ科学美術科教育学分野 准教授)

ギャラリートーク トーカー

柴崎 裕(多摩市立多摩第三小学校 教諭)
寺島 洋子(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
西村 徳行(筑波大学附属小学校 教諭)
安斉 紀子(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
川上 好美(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
松永 かおり(目黒区立第八中学校 教諭)
山田 一文(埼玉大学教育学部附属中学校 教諭)

ギャラリートーク 協力

筑波大学附属小学校のみなさん(西村 徳行 教諭)
目黒区立第八中学校のみなさん(松永 かおり 教諭)
埼玉大学教育学部附属中学校のみなさん(山田 一文 教諭)
さいたま市立土呂中学校のみなさん(正田 真由美 教諭)
坂戸市立住吉中学校のみなさん(田中 彩子 教諭)
青木 考浩(宇都宮市立一条中学校)



8月6日(月)



12:40 ● 受付
13:00 ● 開講式
13:10 ● オリエンテーション

13:20 ●  **講演①**
「創造的な行為としての鑑賞
子どもから考える鑑賞教育」
 奥村 高明
(文部科学省初等中等教育局 教科調査官)

14:10 ● 休憩・移動
14:20 ● **ギャラリートーク見学**
小・中学生対象の5本のギャラ
リートークを自由に見学する

15:20 ● 休憩・移動

15:30 ●  **グループワーク①**
・展示室内で課題作品を鑑賞し、
鑑賞の意味について考える
・学校と美術館の連携のあり
方について考える

18:00 ● 終了

8月7日(火)



9:30 ● 受付
9:45 ●  **事例紹介①**
美術館での実践事例
「子どもの目で見ると、現代美術」
 武居利史、成相 肇
(府中市美術館 学芸員)

10:25 ●  **事例紹介②**
小学校での実践事例
「小学校における美術館と
連携した鑑賞授業の展開
アートカードの活用をとおして」
 日高 和広
(宮崎大学教育文化学部附属小学校 教諭)

11:05 ● 休憩

11:15 ●  **事例紹介③**
中学校での実践事例
「中学校を美術館にしよう
〜とがびアートプロジェクト
にみる中学生の力」
 中平 千尋
(長野市立櫻ヶ岡中学校 教諭)

11:55 ● 昼食
13:00 ● **教材パイロット版紹介**
 三澤 一実
(文教大学 准教授)
 一條 彰子
(東京国立近代美術館 主任研究員)

13:30 ●  **グループワーク②**
前日鑑賞した課題作品の
鑑賞プログラムを作成する

18:15 ● 情報交換会(希望者のみ)

8月8日(水)



9:30 ● 受付
9:45 ●  **講演②**
「覚醒する<眼>、あるいは
<視覚性>をひらくこと
<美術／館／教育>
その逆説と可能性」
 長田 謙一
(首都大学東京 教授)

10:45 ● 休憩

10:55 ●  **グループワーク発表**
グループワークの成果を代表者
が発表し講評を受ける
 講評：長田 謙一
奥村 高明
三澤 一実

12:30 ● 閉講式
13:00 ● 終了・解散
解散後希望者は、国立新美
術館「日展100 年記念展」
「スキン+ボーンズ-1980年
以降の建築とファッション」
等自由観覧

分科会で学習指導要領を確認

この年の3月に新しい学習指導要領が告知されたため、鑑賞授業の指導と評価がどう変わるのかという点に受講者の関心が集まっていた。そこで、小学校教員、中学校教員、指導主事、学芸員の4つの分科会をプログラムに新設し、指導要領改訂の要点を確認した。この分科会は、専科教員の減少で孤立しがちな中学校教員や、他館と遠く交流が難しい美術館学芸員にとっても、同じ立場で解決法を助言しあえる貴重な機会となった。

受講者数

131名(小学校教諭33名、中学校教諭45名、小中一貫校教諭1名、養護学校教諭2名、指導主事14名、学芸員35名、その他1名)

グループワーク ファシリテーター

柴崎 裕(多摩市立多摩第三小学校 教諭)
藤吉 祐子(国立国際美術館 学芸課 研究員)
西村 徳行(筑波大学附属小学校 教諭)
谷口 幹也(九州女子大学 人間科学部 人間発達学科 講師)
松永 かおり(東京都教育庁 指導主事)
寺島 洋子(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
三澤 一実(武蔵野美術大学 教授)
山田 一文(埼玉大学教育学部附属中学校 教諭)
今井 陽子(東京国立近代美術館 工芸課 主任研究員)
*ファシリテーター+記録係)
齊藤 佳代(東京国立近代美術館 工芸課 事務補佐員)
*ファシリテーター+記録係)

グループワーク 記録係

弘中 智子(板橋区立美術館 学芸員)
小野 範子(神奈川県教育委員会 教育局 子ども教育支援課 指導主事)
池田 香織(東京学芸大学 大学院教育学研究科 修士課程)
豊田 直香(京都国立近代美術館 学芸課 研究補佐員)
三上 美和(東京国立近代美術館 工芸課 客員研究員)
相田 隆司(東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系 美術科教育分野 准教授)
吉澤 菜摘(国立新美術館 学芸課 研究補佐員)
赤崎 陽子(東京国立近代美術館 フィルムセンター 研究員)

ギャラリートーク トーカー

西村 徳行(筑波大学附属小学校 教諭)
柴崎 裕(多摩市立多摩第三小学校 教諭)
寺島 洋子(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
山田 一文(埼玉大学教育学部附属中学校 教諭)
松永 かおり(東京都教育庁 指導主事)
三澤 一実(武蔵野美術大学 教授)

ギャラリートーク サポート

池田 香織 (東京学芸大学大学院教育学研究科 修士課程)
豊田 直香 (京都国立近代美術館 学芸課 研究補佐員)
赤崎 陽子 (東京国立近代美術館 フィルムセンター 研究員)
三上 美和 (東京国立近代美術館 工芸課 客員研究員)
吉澤 菜摘 (国立新美術館 学芸課 研究補佐員)

ギャラリートーク 記録係

伊藤 敬子 (東京国立近代美術館 インターン)
酒井 千波 (東京国立近代美術館 インターン)
西山 桐香 (東京国立近代美術館 インターン)
本橋 弥生 (国立新美術館 学芸課 研究員)
鳥居 茜 (国立新美術館 学芸課 研究補佐員)

ギャラリートーク 協力

筑波大学附属小学校のみなさん(西村 徳行 教諭)
埼玉大学教育学部附属中学校のみなさん(山田 一文 教諭)
千代田区立九段中等教育学校のみなさん(落合 良美 教諭)

小学校 分科会

進行:三澤 一実(武蔵野美術大学 教授)
記録:西村 徳行(筑波大学附属小学校 教諭)

中学校 分科会

進行:小野 範子(神奈川県教育委員会 指導主事)
記録:松永 かおり(東京都教育庁 指導主事)

指導主事 分科会

進行:奥村 高明(文部科学省初等中等教育局 教科調査官)
記録:山田 一文(埼玉大学教育学部附属中学校 教諭)

学芸員 分科会

進行:一條 彰子(東京国立近代美術館 企画課 主任研究員)
記録:四條 ひろか(東京国立近代美術館 インターン)



7月28日(月)



東京国立近代美術館

10:50 ● 開門
11:00 ● 受付
受付後、所蔵作品展見学(自由)
12:30 ● 開講式
12:40 ● オリエンテーション

12:50 ●  **講演①**
「子どもたちの創造的な鑑賞とこれからの鑑賞教育」
 奥村 高明
(文部科学省初等中等教育局 教科調査官)

13:40 ● 休憩・移動
14:00 ● **ギャラリートーク見学**
小・中学生対象の5本の
ギャラリートークを自由に
見学する

14:50 ● 休憩・移動
15:10 ●  **グループワーク①**
課題作品をじっくりと鑑賞し、
グループ内で鑑賞の意義を
共有する

18:00 ● 終了

7月29日(火)



国立新美術館

9:30 ● 開門
9:40 ● 受付
10:00 ●  **業種別分科会**
(小学校/中学校/指導主事/
学芸員)

11:10 ● 休憩・移動
11:20 ●  **講演②**
「<視覚性>はどのようにして
ひらかれうるか
—<美術館/鑑賞/学校>
の可能性のために—」
 長田 謙一
(首都大学東京 教授)

12:20 ● 昼食
13:30 ●  **事例紹介①**
美術館での実践
「沖縄の文化を通して子どもを
はぐくむ —学校と連携したプ
ログラム—」
 前田 比呂也
(沖縄県立博物館・美術館 学芸員)

14:10 ●  **事例紹介②**
小学校での実践
「子どもたちが美術館鑑賞から
得たものは? —『小川信治展』
の鑑賞を通して—」
 内部 恵子
(大阪市立上福島小学校 教諭)

14:50 ● 休憩・移動
15:10 ●  **グループワーク②**
課題作品を鑑賞する小中学生
向けのプログラムを検討する
18:00 ● 休憩・移動
18:15 ● 情報交換会(希望者のみ)
19:45 ● 終了

7月30日(水)



国立新美術館

9:30 ● 開門
9:40 ● 受付
9:50 ● グループワーク発表準備
10:10 ● **業種別分科会報告**
前日の分科会の討議内容等を
進行役が発表する

10:30 ●  **グループワーク発表**
グループワークの成果を代表
者が発表し、講評を受ける
 講評:奥村 高明
長田 謙一
三澤 一実
(武蔵野美術大学 教授)

12:30 ● 閉講式
13:00 ● 終了・解散
国立新美術館展覧会 観覧
「ウィーン美術史美術館所蔵
静物画の秘密展」自由観覧

グループワークをテーマ別に

回を重ねるにつれ受講者層が変化し、鑑賞教育の経験値が上がってきているという印象があった。そこで、グループワークに改良を加え、グループ数を14に増やすことで1グループあたりの人数を9名に減らし、より活発な議論ができるようにした。そのうえで、事前アンケートで受講者の関心がどこにあるかを調べ、「鑑賞教材」「ギャラリートーク実践」「言語活動」などグループ毎にテーマを設けた。

この年より、本研修が「教員免許更新講習」の対象となり、希望者14名が履修証明書を手にすることとなった。

受講者数

129名(小学校教諭44名、中学校教諭51名、養護学校教諭2名、指導主事11名、学芸員21名)

グループワーク ファシリテーター

山田 一文(埼玉大学教育学部附属中学校 教諭)
小野 範子(茅ヶ崎市教育委員会 指導主事)
藤吉 祐子(国立国際美術館 学芸課 研究員)
三澤 一実(武蔵野美術大学 教授)
齊藤 佳代(東京国立近代美術館 工芸課 研究補佐員)
藁谷 祐子(国立西洋美術館 学芸課 研究補佐員)
相田 隆司(東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系美術・書道講座美術科教育学分野 准教授)
豊田 直香(京都国立近代美術館 学芸課 研究補佐員)
寺島 洋子(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
今井 陽子(東京国立近代美術館 工芸課 主任研究員)
三上 美和(東京国立近代美術館 工芸課 客員研究員)
西村 徳行(筑波大学附属小学校 教諭)
小池 研二(横浜国立大学 教育人間学部 学校教育課程 准教授)
弘中 智子(板橋区立美術館 学芸員)
松永 かおり(東京都教育庁 指導主事)
谷口 幹也(九州女子大学 人間科学部 人間発達学科 講師)
柴崎 裕(多摩市立多摩第三小学校 教諭)

グループワーク アシスタント

内藤 裕子(元・東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
井尾 鉦一(元・東京国立近代美術館 工芸課 実習生)
栗城 敦志(文部科学省 長期研修職員)
田中 彩子(武蔵野美術大学 長期研修職員)
荒井 由紀(元・東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
八木 良美(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
伊藤 敬子(元・東京国立近代美術館 企画課 インターン)
菅野 ももこ(元・東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
夏目 敬子(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
安斉 紀子(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
山本 与志絵(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
大黒 洋平(元・東京国立近代美術館 企画課 インターン)
西山 桐香(元・東京国立近代美術館 企画課 インターン)
酒井 千波(元・東京国立近代美術館 企画課 インターン)

グループワーク 協力

保坂 健二郎(東京国立近代美術館 美術課 研究員)

ギャラリートーク トーカー

西村 徳行(筑波大学附属小学校 教諭)
奥村 高明(国立教育政策研究所 教育課程調査官)
柴崎 裕(多摩市立多摩第三小学校 教諭)
寺島 洋子(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
三澤 一実(武蔵野美術大学 教授)
山田 一文(埼玉大学教育学部附属中学校 教諭)

ギャラリートーク サポーター

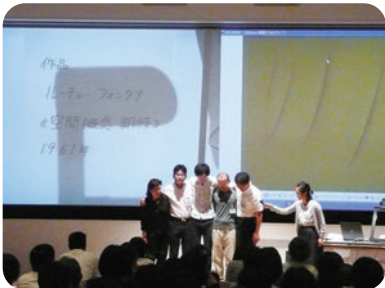
藏屋 美香(東京国立近代美術館 美術課長)

ギャラリートーク 記録係

神田 惟(東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
黒澤 美子(東京国立近代美術館 企画課 インターン)
岸田 陽子(東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
菅野 仁美(東京国立近代美術館 企画課 インターン)
三石 恵莉(東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
福永 愛(東京国立近代美術館 工芸課 インターン)

ギャラリートーク 協力

筑波大学附属小学校のみなさん(西村 徳行 教諭)
千代田区立九段小学校のみなさん(竹内 とも子 教諭)
埼玉大学教育学部附属中学校のみなさん(山田 一文 教諭)
落合 良美 教諭(千代田区立九段中等教育学校)



8月3日(月)



東京国立近代美術館

9:50 ● 開門
10:00 ● 受付
10:30 ● 開講式・オリエンテーション

10:50 ●  **講演①**
「鑑賞教育の現在、美術館と学校の連携」
 奥村 高明
(文部科学省初等中等教育局 教科調査官)

11:50 ● 昼食・所蔵作品展自由見学
13:00 ● **ギャラリートーク見学**
小・中学生対象の6本のギャラリートークを自由に見学する

15:00 ● 休憩・移動

15:30 ●  **グループワーク①**
テーマ別に14グループ(課題作品をじっくりと鑑賞し、グループ内でのテーマを共有する。)

18:00 ● 終了

8月4日(火)



国立新美術館

9:30 ● 開門
9:40 ● 受付

10:00 ●  **業種別分科会**
(小学校/中学校/指導主事/学芸員)

12:00 ● 昼食

13:00 ●  **事例紹介①**
「鑑賞を柱にした学級経営」
 高松 智行
(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校 教諭)

13:40 ●  **事例紹介②**
「普通の中学生を作品と出会わせるために」
 濱脇 みどり
(西東京市立田無第一中学校 教諭)

14:20 ●  **事例紹介③**
「鑑賞の基本の力を拓きたい一学芸員にできること、教師にできること」
 竹内 利夫
(徳島県立近代美術館 主任研究員)

15:00 ● 休憩・移動

15:30 ●  **グループワーク②**

17:40 ● 休憩・移動

18:00 ● 情報交換会(希望者のみ)

19:45 ● 終了

8月5日(水)



国立新美術館

9:30 ● 開門
9:40 ● 受付

10:00 ●  **グループワーク報告**

11:40 ●  **講演②**
「見る」ことの獲得に向けて現代視覚文化―社会における「鑑賞」をめぐる幾重もの「対話」―「学校」と「美術館」の連携・協同を中心に―
 長田 謙一
(首都大学東京 教授)

12:45 ● 閉講式

13:00 ● 終了・解散
「ルネ・ラリック展」自由観覧

14:00 ● 試験
(教員免許状更新講習希望者のみ)

15:00 ● 終了

ワールドカフェ導入

研修二日目に、ワールドカフェという全員で話し合える討議手法を取り入れ、昨年までの分科会に替えて実施した。国立新美術館1階の広いカフェゾーンで、賑やかに意見交換する受講者の姿が見られた。ワールドカフェの導入により、これまでのアンケートでよく見られた、「全国から関係者が集まる場でもっと情報交換したい」と「同じ地域の人と知り合い、将来の連携につなげたい」という矛盾する要望を解決することができた。

5年目を機に、冊子型の報告書を48ページ増刷して、5年間を振り返る特集を設け、過去の受講者へのアンケート結果や、受講者12名から研修後の成果についてヒアリングした内容を記載した。調査からは、受講者が研修成果を地域や仕事に還元する様子がうかがえた。

受講者数

112名(小学校教諭29名、中学校教諭44名、養護学校教諭1名、指導主事11名、学芸員27名)

グループワークファシリテーター

弘中 智子(板橋区立美術館 学芸員)
小野 範子(茅ヶ崎市教育委員会 指導主事)
藤吉 祐子(国立国際美術館 学芸課 研究員)
西村 德行(筑波大学附属小学校 教諭)
柴崎 裕(多摩市立北豊ヶ丘小学校 教諭)
齊藤 佳代(東京国立近代美術館 工芸課 研究補佐員)
三澤 一実(武蔵野美術大学 教授)
松永 かおり(東京都教育庁 指導主事)
田中 晃(川崎市立美術館 主任)
山田 一文(埼玉大学教育学部附属中学校 教諭)
小池 研二(横浜国立大学 教育人間科学部 学校教育課程 准教授)
谷口 幹也(九州女子大学 人間科学部 人間発達学科 准教授)
寺島 洋子(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)

グループワークアシスタント

夏目 敬子(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
荒井 由紀(元・東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
神田 惟(元・東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
伊藤 敬子(元・東京国立近代美術館 企画課 インターン)
北村 仁美(東京国立近代美術館 工芸課 主任研究員)
福永 愛(元・東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
安藤 栄信(武蔵野美術大学 長期研修生)
安斉 紀子(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
谷口 武教(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
猪飼 藍(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
中尾 小絵(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
大黒 洋平(元・東京国立近代美術館 企画課 インターン)
朴 鈴子(京都国立近代美術館 学芸課 研究補佐員)

ギャラリートーク トーカー

西村 德行(筑波大学附属小学校 教諭)
柴崎 裕(多摩市立北豊ヶ丘小学校 教諭)
寺島 洋子(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
山本 与志絵(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
保坂 健二郎(東京国立近代美術館 美術課 研究員)
山田 一文(埼玉大学教育学部附属中学校 教諭)
松永 かおり(東京都教育委員会 指導主事)
三澤 一実(武蔵野美術大学 教授)
川上 好美(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)

ギャラリートーク 記録係

三石 恵莉(東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
稲葉 麻里子(東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
佐原 しおり(東京国立近代美術館 企画課 インターン)
井上 絵美子(東京国立近代美術館 企画課 インターン)
星野 立子(東京国立近代美術館 工芸課 インターン)
浅井 慧(国立新美術館 学芸課 インターン)
吉澤 菜摘(国立新美術館 学芸課 研究補佐員)
細谷 美宇(東京国立近代美術館 企画課 インターン)

ギャラリートーク 協力

筑波大学附属小学校のみなさん(西村 德行 教諭)
千代田区立神田一橋中学校のみなさん(小林 猛 教諭)
埼玉大学教育学部附属中学校のみなさん
(山田 一文 教諭)



7月26日(月)



東京国立近代美術館

- 9:50 ● 開門
- 10:00 ● 受付
- 10:30 ● 開講式・オリエンテーション

- 10:50 ●  **講演①**
「美術館と学校における鑑賞教育の現状と課題」
 奥村 高明
(文部科学省初等中等教育局 教科調査官)
- 11:40 ●  **講演②**
「視ること／語ること／伝えあうこと」
 長田 謙一
(首都大学東京 教授)

- 12:40 ● 昼食・所蔵作品展見学(各自)
- 15:00 ● **ギャラリートーク見学**
(8グループのギャラリートークを各自見学)
- 15:00 ● 休憩・移動

- 15:10 ●  **グループワーク①**

- 18:00 ● 終了

7月27日(火)



国立新美術館

- 9:30 ● 開門
- 9:40 ● 受付

- 10:00 ●  **事例紹介①**
「子ども×学校×美術館＝∞(無限大)互いに紡ぎ合う連携活動をめざして」
 犬童 昭久
(熊本県立美術館 主任主事)
 東 奈美子
(熊本市立力合小学校 教諭)
- 10:45 ●  **事例紹介②**
「みることはつくること 金沢21世紀美術館の実験」
 不動 美里
(金沢21世紀美術館 学芸課長)

- 11:30 ● 昼食

- 12:45 ●  **ワールドカフェ**
[Theme 01](#)
「あなたにとって美術館はどんなところですか?」
[Theme 02](#)
「こどもにとって作品を鑑賞することの意味とは何でしょう」

- 14:30 ● 休憩・移動

- 14:50 ●  **グループワーク②**

- 17:10 ● 休憩・移動
- 17:30 ● 情報交換会(希望者のみ)
- 19:30 ● 終了

7月28日(水)



国立新美術館

- 9:30 ● 開門
- 9:40 ● 受付

- 10:00 ●  **グループワーク報告**
 講評：長田 謙一
三澤 一実
(武蔵野美術大学 教授)

- 12:40 ● 閉講式
- 13:00 ● 終了・解散
- 14:00 ● 試験
(教員免許状更新講習希望者のみ)
- 15:00 ● 終了

二日間にシェイプアップ

5年ごとに更新される独立行政法人国立美術館の中期計画にあわせ、研修6年目を迎えたこの年から「日数の短縮」「プログラムの改良」「会場の変更」「記録集のウェブ化」などのリニューアルを行った。

夏季に忙しい時期を迎える美術館学芸員も参加しやすいように配慮し、日数を3日間から2日間に短縮したが、内容が深まるよう実施者側で知恵を絞った。グループワークを行う会場は、初めて国立西洋美術館となり、ファシリテーターは慣れない西洋宗教絵画等に四苦八苦しながらも新しい気持ちで挑んだ。報告書は冊子ではなくウェブサイトへの掲載と移行したため、研修終了後2か月という短期間で公開できるようになり、また、受講者以外にも広くその内容を届けられるようになった。

受講者数

101名(小学校教諭34名、中学校教諭42名、養護学校教諭1名、指導主事6名、学芸員18名)

グループワーク
ファシリテーター

小野 範子
(茅ヶ崎市立小和田小学校 教頭)

西村 德行
(筑波大学附属小学校 教諭)

柴崎 裕
(多摩市立豊ヶ丘小学校 教諭)

齊藤 佳代
(東京国立近代美術館 工芸課 研究補佐員)

武内 厚子
(東京都美術館 学芸員)

弘中 智子
(板橋区立美術館 学芸員)

田中 晃
(川越市立美術館 主任)

三澤 一実
(武蔵野美術大学 教職課程研究室 教授)

松永 かおり
(東京都教育庁 指導部 義務教育特別支援教育指導課 指導主事)

小池 研二
(横浜国立大学 教育人間科学部 人間発達学科 准教授)

ギャラリートーク分析 協力

墨田区立堤小学校のみなさん

ギャラリートーク：南 育子 (墨田区立堤小学校 教諭)

寺島 洋子 (国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)

千代田区立九段中等教育学校のみなさん

ギャラリートーク：三澤 一実 (武蔵野美術大学 教職課程研究室 教授)

編集：室屋 泰三 (国立新美術館 学芸課 主任研究員)

グループワーク
サブファシリテーター

立浪 佐和子
(横須賀美術館 学芸員)

平谷 美華子
(東京富士美術館 学芸部学芸課 学芸員)

井上 絵美子
(国立新美術館 学芸課 研究補佐員)

南 育子
(墨田区立業平小学校 教諭)

山水 明
(埼玉県立近代美術館 教育・広報担当課長)

濱脇 みどり
(西東京市立田無第一中学校 教諭)

中村 貴絵
(横須賀美術館 学芸員)

亀井 愛
(三井記念美術館 教育普及員)

稲庭 彩和子
(東京都美術館 学芸員)

青野 和子
(原美術館 主任学芸員)



8月1日(月)		8月2日(火)	
 国立西洋美術館		 国立新美術館	
8:50	● 開門	9:30	● 開門
9:00	● 受付	9:40	● 受付
9:30	● 開講式・オリエンテーション	10:00	●  ギャラリートーク分析 ●  奥村 高明 (聖徳大学 児童学部児童学科 教授) ●  一柳 智紀 (新潟大学 教育学部教育科学講座 准教授)
10:00	●  グループワーク	11:30	● 事務連絡
12:00	● 昼食	11:45	● 昼食
13:00	●  グループワーク	12:45	●  ワールドカフェ Theme 01 「あなたの心に残っている鑑賞体験は？」 Theme 02 「これから子どもとやってみたい鑑賞活動は？」
15:00	● 移動・休憩	14:45	● 移動・休憩
15:15	●  作品前で グループワークの成果発表 ●  進行・講評：一條 彰子 (東京国立近代美術館 企画課 主任研究員) 東良 雅人 (文部科学省初等中等教育局 教科調査官)	15:00	●  講演 「みること・みつめること」 ●  東良 雅人
16:15	● 移動・休憩	16:00	● 閉講式
16:30	● 美術館による ポスター・セッション	16:30	● 終了・解散
17:30	● 情報交換会(希望者のみ)	17:00	● 試験(教員免許状更新講習希望者のみ)
19:00	● 終了	18:00	● 終了

ギャラリートークを深く分析する

2011年に会期の短縮を行ったのにあわせ、それまで研修中に実施していたギャラリートーク見学は、事前に実施したものを撮影・編集し、その映像記録をもとに専門家が解説する「ギャラリートーク分析」に置き換えた。子どもたちの発言や視線、身体の動きに注目する分析は、鑑賞を通して子どもたちの中に何が起きているかを理解する手助けとなった。

また、二日目の昼休みに、鑑賞教材アートカードを実際に使ってみるドロップイン型のワークショップや、研修に参加する美術館学芸員に協力いただくポスター発表方式の「鑑賞教育の活動紹介」を行った。

受講者数

100名（小学校教諭28名、中学校教諭33名、指導主事8名、学芸員31名）

グループワーク
ファシリテーター

小野 範子
（茅ヶ崎市立小和田小学校 教頭）

西村 德行
（筑波大学附属小学校 教諭）

南 育子
（墨田区立業平小学校 教諭）

弘中 智子
（板橋区立美術館 学芸員）

朴 鈴子
（京都国立近代美術館 学芸課 研究補佐員）

齊藤 佳代
（東京国立近代美術館 工芸課 研究補佐員）

田中 晃
（川越市立美術館 主査）

濱脇 みどり
（西東京市立田無第一中学校）

三澤 一実
（武蔵野美術大学 教職課程研究室 教授）

松永 かおり
（東京都教育庁 指導部 指導企画課 指導主事）

ギャラリートーク分析 協力

渋谷区立長谷戸小学校のみなさん
ギャラリートーク：菅谷 千紘（渋谷区立長谷戸小学校 教諭）
東村山市立東村山第五中学校のみなさん
ギャラリートーク：奥村 高明（聖徳大学 教授）
編集：室屋 泰三（国立新美術館 学芸課 主任研究員）



7月30日（月）



国立西洋美術館

- 8:50 ● 開門
- 9:00 ● 受付
- 9:30 ● 開講式・オリエンテーション

- 10:00 ●  グループワーク

- 12:00 ● 昼食

- 13:00 ●  グループワーク

- 15:00 ● 移動・休憩

- 15:15 ●  作品前で
グループワークの成果発表
 進行・講評：寺島 洋子
（国立西洋美術館 学芸課 主任研究員）
一條 彰子
（東京国立近代美術館 主任研究員）

- 16:30 ●  講演
「見つめること、感じ取ること、つながること」
 東良 雅人
（文部科学省初等中等教育局 教科調査官）

- 17:30 ● 情報交換会（希望者のみ）
- 19:00 ● 終了

7月31日（火）



東京国立近代美術館

- 9:30 ● 開門
- 9:40 ● 受付

- 10:00 ●  ギャラリートーク分析
 講師①：一柳 智紀
（新潟大学 教育学部 教育科学講座 准教授）
 講師②：本間 美里
（東京都大田区立矢口小学校 教諭）
 司会：三澤 一実
（武蔵野美術大学 教授）

- 11:30 ● 昼食
12:00-12:50（自由参加）
・アートカードワークショップ
・鑑賞教育の活動紹介コーナー

- 13:00 ●  ワールドカフェ
[Theme 01](#)
「あなたにとって美術館はどこなところですか？」
[Theme 02](#)
「子どもにとって作品を鑑賞することの意味とは何でしょう？」

- 15:00 ● 移動・休憩

- 15:10 ●  講演
「私の中の自由な美術」
 上野 行一
（帝京科学大学 こども学科 教授）

- 16:00 ● 閉講式
- 16:30 ● 終了・解散
- 16:45 ● 試験（教員免許状更新講習希望者のみ）
- 17:45 ● 終了

協力者の拡大

このころから、研修の輪を広げるため、過去の研修受講者に声をかけ、グループワークのサブファシリテーターを依頼するなど、実施者側として協力していただいた。このような形で研修に関わった方のなかから、後にファシリテーターや、国立美術館の教育普及事業等に関する委員会委員を依頼する方もでてきて、研修自体の持続可能性を模索することとなった。

受講者数

99名(小学校教諭26名、中学校教諭36名、支援学校教諭1名、指導主事8名、学芸員28名)

グループワーク
ファシリテーター

田中 晃

(川越市立美術館 主査)

小池 研二

(横浜国立大学 教育人間科学部 准教授)

齊藤 佳代

(東京国立近代美術館 工芸館 研究補佐員)

西村 德行

(筑波大学附属小学校 教諭)

弘中 智子

(板橋区立美術館 学芸員)

濱脇 みどり

(西東京市立田無第一中学校 教諭)

小野 範子

(茅ヶ崎市立小和田小学校 教頭)

松永 かおり

(東京都教育庁 指導部 指導企画課 指導主事)

山田 一文

(埼玉県立総合教育センター 指導主事)

南 育子

(墨田区立業平小学校教諭)

朴 鈴子

(京都国立近代美術館 学芸課 研究補佐員)

グループワーク
サブファシリテーター

遠藤 詠子

(箱根写真美術館 副館長)

平谷 美華子

(東京富士美術館 学芸部 学芸課 学芸員)

本間 美里

(東京都港区御成門小学校 教諭)

関 聖美

(国立国際美術館 学芸課 研究員)

田村 麗恵

(東京都美術館 学芸員)

八巻 香澄

(東京都庭園美術館 学芸員)

亀井 愛

(三井記念館美術館 教育普及員)

吉澤 菜摘

(国立新美術館 学芸課 アソシエイトフェロー)

横山 佐紀

(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)

ギャラリートーク分析 協力

筑波大学教育学部附属小学校のみなさん

ギャラリートーク：西村 德行

東村山市立東村山第五中学校のみなさん

ギャラリートーク：奥村 高明 (聖徳大学 教授)

編集：室屋 泰三 (国立新美術館 学芸課 主任研究員)



7月29日(月)



東京国立近代美術館

8:50 ● 開門

9:00 ● 受付

9:30 ● 開講式

9:50 ● 講演

「見つめること、感じ取ること
—子どもたちが自分の中に新しい価値を
つくりだす創造活動—」

東良 雅人
(文部科学省初等中等教育局 教科調査官)

10:40 ● 移動・休憩

10:50 ● グループワーク

12:30 ● 昼食
自由観覧(所蔵作品展「MOMAT コレクション」)

13:30 ● グループワーク

16:00 ● 移動・休憩

16:15 ● 作品前で
グループワークの成果発表

小学校講評：東良 雅人
 中学校講評：三澤 一実
(武蔵野美術大学 教授)

17:15 ● 移動・休憩

17:30 ● 情報交換会

19:00 ● 終了

7月30日(火)



国立新美術館

9:30 ● 開門

9:40 ● 受付

10:00 ● ギャラリートーク分析

本間 美里
(港区立御成門小学校 教諭)
 奥村 高明
(聖徳大学 教授)

11:40 ● 昼食
12:00-12:45(自由参加)
・アートカードワークショップ
・鑑賞教育の活動紹介コーナー

13:00 ● ワールドカフェ

[Theme 01](#)
「あなたの心に残っている鑑賞体験は何ですか?」
[Theme 02](#)
「子どもにとって作品を鑑賞することの意味とは
何でしょう?」

15:00 ● 移動・休憩

15:15 ● 講演
「知識創造社会の美術鑑賞教育のあり方」

上野 行一
(帝京科学大学こども学科 教授)

16:10 ● 閉講式

16:30 ● 終了・解散

16:45 ● 試験(教員免許状更新講習希望者のみ)

17:40 ● 終了

のべ受講者が1000人を超える

9年目を迎え、研修受講者の延べ人数が1000人を超えた。各地域の研修経験者が複数となり、対話鑑賞や美術館・学校連携について、同じ経験をもって語り合える土壤が、全国的にできてきたといえる。

研修の裏テーマとして「発達段階を意識した鑑賞」を掲げ、ギャラリートーク分析では、同じ作品を小学生が鑑賞した場合、中学生が鑑賞した場合の反応を確認した。このことにより、子どもは年齢により少しずつ見方が変わることを理解し、対象者によってアプローチを考える必要性に注目した。

受講者数

99名（小学校教諭31名、中学校教諭33名、特別支援学校教諭1名、聾学校1名、指導主事8名、学芸員25名）

グループワーク
ファシリテーター

- 小野 範子
(茅ヶ崎市立緑が浜小学校 教頭)
- 亀井 愛
(三井記念館美術館 教育普及員)
- 田中 晃
(川越市立大東西中学校 教頭)
- 西村 德行
(東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系美術・書道講座 准教授)
- 濱脇 みどり
(西東京市立田無第一中学校 教諭)
- 弘中 智子
(板橋区立美術館 学芸員)
- 三澤 一実
(武蔵野美術大学 教職課程研究室 教授)
- 松永 かおり
(町田市立金井小学校 副校長)
- 山田 一文
(埼玉県教育局南部教育事務所 指導主事)
- 南 育子
(墨田区立業平小学校 教諭)
- 朴 鈴子
(京都国立近代美術館 学芸課 研究補佐員)

グループワーク
サブファシリテーター

- 平谷 美華子
(東京富士美術館 学芸部 学芸課 学芸員)
- 熊谷 香寿美
(東京都美術館 学芸員)
- 本間 美里
(港区立御成門小学校 教諭)
- 今井 陽子
(東京国立近代美術館 工芸課 主任研究員)
- 藤田 千織
(東京国立博物館 学芸員)
- 横山 佐紀
(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
- オベル 加藤 貴子
(世田谷区立上北沢小学校 教諭)
- 関 聖美
(国立国際美術館 学芸課 研究補佐員)
- 江藤 祐子
(三菱一号館美術館 学芸員)

ギャラリートーク分析 協力

港区立御成門小学校のみなさん
足立区立第一中学校美術クラブのみなさん
ギャラリートーク：奥村 高明（聖徳大学 教授）
編集：室屋 泰三（国立新美術館 学芸課 主任研究員）



8月4日(月)



東京国立近代美術館

- 8:50 ● 開門
- 9:00 ● 受付
- 9:30 ● 開講式

- 9:50 ●  **講演**
「自分にとっての価値をつくりだす創造活動—活動の主体者の内面に重点を置いた鑑賞の活動—」
 **東良 雅人**
(文部科学省初等中等教育局 教科調査官)

- 10:40 ● 移動・休憩

- 10:50 ●  **グループワーク**

- 12:30 ● 昼食
自由観覧（所蔵作品展「MOMAT コレクション」）

- 13:30 ●  **グループワーク**

- 15:45 ● 移動・休憩

- 16:00 ●  **作品前で
グループワークの成果発表**
 **小学校講評：長田 謙一**
(名古屋芸術大学 教授)
 **中学校講評：東良 雅人**

- 17:15 ● 移動・休憩
- 17:30 ● 情報交換会
- 19:00 ● 終了

8月5日(火)



国立新美術館

- 9:30 ● 開門
- 9:40 ● 受付

- 10:00 ●  **ギャラリートーク分析**
 **本間 美里**
(東京都港区立御成門小学校 教諭)
 **三澤 一実**
(武蔵野美術大学 教授)

- 11:40 ● 昼食
12:10-12:50（自由参加）
・アートカードワークショップ
・鑑賞教育の活動紹介コーナー

- 13:00 ●  **ワールドカフェ**
[Theme 01](#)
「あなたの心に残っている鑑賞体験は？」
[Theme 02](#)
「子どもの鑑賞体験において、大切なことは何でしょう？」

- 14:50 ● 移動・休憩

- 15:10 ●  **講演**
「育成する資質・能力を明確にした鑑賞教育」
 **上野 行一**
(帝京大学子ども学科 教授)

- 16:00 ● 休憩
- 16:15 ● 閉講式
- 16:30 ● 終了・解散
- 16:45 ● 試験（教員免許状更新講習希望者のみ）
- 17:40 ● 終了

10年目の節目

10年目を迎えた記念として、研修の前日の日曜日にシンポジウムを同時開催したところ、受講者からも約40名が参加した。

二日間版の研修のスケジュールがほぼ完成し、参加型のプログラムは喜んで冒頭と最後に二つの講演を設ける形が定着した。冒頭の講演は、教科調査官から、学習指導要領に照らし合わせながら学校教育の中での鑑賞の意義を確認する内容。最後の講演は、美学美術史を踏まえて芸術と鑑賞の持つ役割を明らかにする内容となり、教員・学芸員双方にとって学びとなるよう工夫された。

受講者数

98名（小学校教諭27名、中学校教諭35名、指導主事12名、学芸員24名）

グループワーク ファシリテーター

- 今井 陽子
(東京国立近代美術館 工芸館 主任研究員)
- 小野 範子
(茅ヶ崎市立緑が浜小学校 教頭)
- 亀井 愛
(三井記念館美術館 学芸員)
- 田中 晃
(川越市立大東西中学校 教頭)
- 寺島 洋子
(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
- 西村 徳行
(東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系 美術・書道講座 准教授)
- 濱脇 みどり
(西東京市立青嵐中学校 教諭)
- 弘中 智子
(板橋区立美術館 学芸員)
- 松永 かおり
(東京都町田市立金井小学校 副校長)
- 三澤 一実
(武蔵野美術大学 教職課程研究室 教授)

グループワーク サブファシリテーター

- 吉井 有紀
(東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館 学芸員)
- 木村 拓也
(大田区立龍子記念館 学芸員)
- 関 聖美
(国立国際美術館 学芸課 研究補佐員)
- 杉浦 央子
(国立西洋美術館 学芸課 研究補佐員)
- 松山 沙樹
(京都国立近代美術館 学芸課 特定研究員)
- 矢花 俊樹
(埼玉県立近代美術館 学芸員)
- 江藤 祐子
(三菱一号館美術館 学芸員)
- 本間 美里
(東京都港区立御成門小学校 教諭)
- 吉澤 菜摘
(国立新美術館 学芸課 アソシエイトフェロー)
- 平谷 未華子
(東京富士美術館 学芸員)

ギャラリートーク分析 協力

港区立御成門小学校のみなさん
足立区立第一中学校美術クラブのみなさん
ギャラリートーク：奥村 高明（聖徳大学 教授）
編集：室屋 泰三（国立新美術館 学芸課 主任研究員）



8月3日(月)		8月4日(火)	
 東京国立近代美術館		 国立新美術館	
8:50	● 開門	9:40	● 受付
9:00	● 受付	10:00	 ギャラリートーク分析  本間 美里 (東京都港区立御成門小学校 教諭)  奥村 高明 (聖徳大学 児童学部児童学科 教授)
9:30	● 開講式		
9:50	●  講演 「子供たちが自分の中に新しい意味や価値をつくりだす創造活動を通した学び」  東良 雅人 (文部科学省初等中等教育局 教科調査官)	11:40	● 昼食 12:00-12:50（自由参加） ・アートカードワークショップ ・鑑賞教育の活動紹介コーナー
10:40	● 移動・休憩	13:00	 ワールドカフェ <u>Theme 01</u> 「子どもの鑑賞体験にとって、大事なことは何でしょう？」 <u>Theme 02</u> 「子どもの鑑賞体験にとって大事なことを満たすために、あなたができることは何ですか？」
10:50	●  グループワーク		
12:30	● 昼食 自由観覧（所蔵作品展「MOMATコレクション」）	15:00	● 移動・休憩
13:30	●  グループワーク	15:15	●  講演 「文化の学びとしての鑑賞」  神野 真吾 (千葉大学教育学部 准教授)
16:00	● 移動・休憩	16:10	● 閉講式
16:15	●  作品前で グループワークの成果発表  小学校講評：長田 謙一 (名古屋芸術大学 教授)  中学校講評：東良 雅人	16:25	● 終了・解散
17:30	● 移動・休憩	16:40	● 試験（教員免許状更新講習希望者のみ）
17:40	● 情報交換会	17:35	● 終了
19:00	● 終了		

10年間の成果を振り返り、 今後の課題を明らかにするシンポジウム

指導者研修10周年記念シンポジウムが、研修の前日の日曜日、東京国立近代美術館の講堂で開催された。

まず冒頭に、国立美術館の教育普及室を代表して研修全体を取りまとめた一條より、10年間の振り返る報告がなされた。さらに、この機に過去9年間の受講者にアンケートをとり、約1000人のうち241名の回答を得ることができたので、その分析を行った。

次に、横浜美術館館長（現・国立美術館理事長）の逢坂恵理子氏に記念講演を賜った。1990年代に、福のり子氏とともにVTS（ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー）を日本の学芸員に紹介し、また、1999年に水戸芸術館学芸員としてアメリア・アレナス氏とともに「なぜ、これがアートなの？」展を開催した話は刺激的であった。そして鑑賞教育の価値を、①価値の異なる人々との共生を促す、②思考力、想像力、言語表現力を鍛える、③数値で表現できない価値の大切さを知る、④わからないことがあるということを受け入れる、⑤複雑な現代社会を生き抜く力を与えることとまとめた。

また、過去の受講者5名から、研修で学んだことやその影響、その後の鑑賞教育に関する実践や、美術館＝学校連携について報告があった。最後に、鑑賞教育のこれまでとこれからについて、5名の登壇者による討議がなされ、シンポジウムの締めくくりとなった。

聴講者数
145名



8月2日(日)	
東京国立近代美術館	
12:30	● 受付
13:00	● 開講の挨拶 ● 加茂川 幸夫 (東京国立近代美術館長)
13:10	● 報告 「10年間の研修をふりかえって」 ● 一條 彰子 (東京国立近代美術館 主任研究員)
13:30	● 講演 「美術館が目指す鑑賞教育の可能性」 ● 逢坂 恵理子 (横浜美術館 館長)
14:30	● 休憩
14:40	● 過去の受講者による成果発表 これまで受講された方から、研修後に実践された活動について発表しました。 ● 佐藤 一幸 (弘前市立城西小学校 教諭) ● 亀井 愛 (三井記念美術館 教育普及員) ● 長尾 菊絵 (西東京市立ひばりが丘中学校 主任教諭) ● 平田 朝一 (岡山県総合教育センター 指導主事) ● 木村 典之 (大分県立美術館 学芸普及課 主幹)
16:15	● 休憩
16:20	● 討議 「鑑賞教育のこれまでとこれから」 講演者とシンポジスト4名を迎え討議しました。 ● 司会：東良 雅人 (文部科学省 教科調査官) ● 討議者①：逢坂 恵理子 (東京国立近代美術館 主任研究員) ● 討議者②：奥村 高明 (聖徳大学 教授) ● 討議者③：長田 謙一 (名古屋芸術大学 教授) ● 討議者④：三澤 一実 (武蔵野美術大学 教授)
17:10	● 閉会の挨拶 ● 終了

対象を高等学校まで拡大する

それまで小学校と中学校であった受講対象の教員枠を高等学校まで拡大し、またかつての受講者の再受講も可能とした。これにより、研修プログラム全体を通して、小学校から高等学校までの12年間の子どもの発達を意識することになった。

事例紹介は当初からあるプログラムで、美術館と連携した授業や事業を、小学校や中学校、美術館の立場から3人（3組）の方に報告してもらってきたが、これに高等学校も加わることとなった。全国のさまざまな優れた事例から3つを選ぶのは難しく、先進的な例だけではなく、受講者がこれならできそうと手がかりを得られるような身近な事例も重要視している。選考と依頼は、国立美術館の教育普及室の研究員が毎年交替で担当し、半年前から準備を行う。

受講者数

99名（小学校教諭17名、中学校教諭36名、高等学校教諭21名、特別支援学校教諭1名、養護学校1名、指導主事4名、学芸員19名）

グループワーク ファシリテーター

- 小野 範子
(茅ヶ崎市立緑が浜小学校 教頭)
- 遊免 寛子
(兵庫県立美術館 学芸員)
- 西村 德行
(東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系 美術・書道講座 准教授)
- 藤田 覚
(京都市立西京極西小学校 教諭)
- 濱脇 みどり
(西東京市立青嵐中学校 教諭)
- 田中 晃
(川越市立大東西中学校 教頭)
- 山田 一文
(戸田市立新曽中学校 教頭)
- 乾 茂樹
(京都市立藤森中学校 教諭)

- 弘中 智子
(板橋区立美術館 学芸員)
- 藤吉 祐子
(国立国際美術館 学芸課 主任研究員)
- 渡邊 美香
(大阪教育大学 教育学部 准教授)
- 三澤 一実
(武蔵野美術大学 教職課程研究室 教授)
- 横山 佐紀
(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
- 寺島 洋子
(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
- 亀井 愛
(三井記念美術館 教育普及担当)
- 星 博人
(福島県立保原高等学校 教頭)



8月1日(月)		8月2日(火)	
 東京国立近代美術館		 国立新美術館	
8:50	● 開門	9:30	● 開門
9:00	● 受付	9:40	● 受付
9:30	● 開講式	10:00	●  事例紹介① 「感じて考える鑑賞を目指して ～美術館や作品などを活用した鑑賞の実践～」  森實 祐里 (札幌市星置東小学校 教諭)
9:50	●  講演 「子どもたちが造形的な視点を豊かに持つことや、 自分の中に新しい意味や価値をつくりだすことの 大切さ」  東良 雅人 (文部科学省初等中等教育局 教科調査官)		●  事例紹介② 「生きてはたらく美術のチカラ ～中ハシクシグ展 in 小湊中学校の取り組みから～」  高安 弘大 (青森県平内町立小湊中学校 教諭)
10:40	● 移動・休憩		●  事例紹介③ 『鑑賞教育推進事業』2003-2016」  山根 佳奈 (千葉市美術館 学芸員)
10:50	●  グループワーク		
12:30	● 昼食 自由観覧（所蔵作品展「MOMAT コレクション」）	11:50	● 昼食 12:10-13:00（自由参加） アートカードワークショップ
13:30	●  グループワーク	13:10	●  ワールドカフェ Theme 01 「あなたの心に残っている鑑賞体験は どんなものですか？」 Theme 02 「小・中・高を通して育む鑑賞の力」とは なんでしょう？」 Theme 03 「そのために、私たちはなんの役に立てるでしょう？」
16:00	● 移動・休憩	15:00	● 移動・休憩
16:15	●  作品前で グループワークの成果発表  講評：長田 謙一 （名古屋芸術大学 教授）、 東良 雅人		
17:30	● 移動・休憩	15:15	●  講演 「社会の中の鑑賞教育」  神野 真吾 (千葉大学教育学部 准教授)
17:40	● 情報交換会	16:10	● 閉講式
19:00	● 終了	16:25	● 終了・解散
		16:40	● 試験（教員免許状更新講習希望者のみ）
		17:35	● 終了

初の京都開催

10年目の見直しで、東京だけではなく京都や大阪での開催を加え、東京と関西で交互に行うこととなった。初めての関西開催となった京都国立近代美術館では、京都を含む西日本の美術に重点を置くコレクションを活用してのグループワークや、関西の鑑賞教育活動の事例紹介などが行われ、新たな気づきや発見に満ちた研修となった。多くの方の協力があって初めて成り立つ指導者研修、そのための準備も長期にわたる。この回はとりわけ京都市の小・中学校の先生方にもサブファシリテーターとして協力いただいた。

受講者数

80名(小学校教諭16名、中学校教諭21名、高等学校教諭11名、特別支援学校教諭3名、指導主事5名、学芸員24名)

グループワーク ファシリテーター

- 藤田 覚
(京都市立西京極西小学校 教諭)
- 今井 陽子
(東京国立近代美術館 工芸課 主任研究員)
- 西村 德行
(東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系美術・書道講座 准教授)
- 渡邊 美香
(大阪教育大学 教育学部 准教授)
- 乾 茂樹
(京都市立藤森中学校 教諭)
- 松永 かおり
(東京都教職員研修センター 研修部 教育経営課 統括指導主事)
- 星 博人
(福島県立保原高等学校 教頭)
- 三澤 一実
(武蔵野美術大学 教職課程研究室 教授)

グループワーク サブファシリテーター

- 小野 範子
(茅ヶ崎市立緑が浜小学校 教頭)
- 東上 豪
(京都市立樫原中学校 教諭)
- 中西 久恵
(京都市立西ノ京中学校 教諭)
- 若狭 愛
(京都市立朱雀中学校 教諭)
- 濱脇 みどり
(西東京市立青嵐中学校 教諭)
- 岡 もと女
(京都市立桃山中学校 教諭)
- 寺島 洋子
(国立西洋美術館 学芸課 主任研究員)
- 林田 りつ子
(京都市立七条中学校 教諭)



(写真：四方 邦熙)



7月31日(月)		8月1日(火)	
京都国立近代美術館		京都市勧業館みやこめっせ	
9:00	受付	9:00	受付
9:30	開講式	9:30	■事例紹介① 「～本物との出会い～ 子どもが見て・感じて・楽しくなる 美術館を活用した鑑賞教育」 ■村中 誠士 (京都市立花園小学校 教諭) ■事例紹介② 「博物館・NPO法人と進める美術科鑑賞授業」 ■湯口 みゆき (京都市洛北中学校 教諭)
9:50	🗨️ 講演 「学習指導要領の改訂から鑑賞教育について考える生活や社会と豊かに関わる資質・能力を育むために」 ■東良 雅人 (文部科学省初等中等教育局 教科調査官)	🍷 ワールドカフェ (前半) Theme 01 「鑑賞体験が子どもにもたらすものは何でしょう？」	
10:40	移動・休憩	11:25	移動
10:50	👥 グループワーク	11:35	昼食
12:30	昼食	11:55-12:40	・アートカードワークショップ(自由参加) ・自由観覧(京近美 企画展「技を極めるーヴァン クリーフ&アーペル ハイジュエリーと日本の工芸」コレクション展)
12:30	自由観覧(コレクション展)	12:40	移動
13:30	👥 グループワーク	13:00	■事例紹介③ 「『高校の美術でできること』～次世代育成の協働の形とその効果について～」 ■山崎 仁嗣 (滋賀県立膳所高等学校 教諭) ■事例紹介④ 「山口情報芸術センターが展開するメディアリテラシー教育ー自分で探す視点、自分で深める思考ー」 ■朴 鈴子 (山口情報芸術センターYCAM エducator)
16:00	移動・休憩	🍷 ワールドカフェ (後半) Theme 02 「あなたができる『社会と連携した鑑賞活動』は何でしょう？」	
16:15	📺 作品前で グループワークの成果発表 ■小学校講評：奥村 高明 (聖徳大学 教授) ■中学校講評：山田 一文 (戸田市立美笹中学校 校長) ■高校講評：長田 謙一 (名古屋芸術大学 教授)	14:55	休憩
17:30	移動・休憩	15:10	■講演 「見えるものの向こう側」 ■神野 真吾 (千葉大学教育学部 准教授)
17:40	情報交換会	16:00	閉講式
19:00	終了	16:20	終了・解散
		16:40	試験(教員免許状更新講習希望者のみ)
		17:35	終了

ワールドカフェで締める

6年ぶりとなる国立西洋美術館の常設展を使った研修。この回の特徴は、前回の国立西洋美術館で実施した時と異なり、中世から20世紀半ばまでの幅広いコレクションの中から、近代の作品にグループワークが集中したことだった。グループワークの課題作品は、研修の1か月ほど前にファシリテーターが現地で集まって決める。その中で、絵画に比べて躊躇することの多い彫刻作品や、ル・コルビュジエが設計した本館建築自体を選んだグループもあり、チャレンジングなワークとなった。

ワールドカフェは、導入9年目にして初めて研修の最後にもってきたところ、これまで以上の盛り上がりとなった。研修で得たすべてのインプットをアウトプットして共有し、明日からの実践に結び付けて終わりとなった。

受講者数

103名(小学校教諭23名、中学校教諭30名、高等学校教諭12名、中高一貫校教諭2名、特別支援学校教諭2名、養護学校教諭1名、ろう学校教諭1名、盲学校教諭1名、指導主事8名、学芸員23名)

グループワークファシリテーター

- 奥村 高明

(日本体育大学 児童スポーツ教育学部 教授)
- 柴崎 裕

(聖学院大学 人文学部 児童学科 特任教授)
- 遊免 寛子

(兵庫県立美術館 学芸員)
- 今井 陽子

(東京国立近代美術館 工芸課 主任研究員)
- 渡邊 美香

(大阪教育大学 教育学部 准教授)
- 弘中 智子

(板橋区立美術館 学芸員)
- 松山 沙樹

(京都国立近代美術館 学芸課 特定研究員)
- 濱脇 みどり

(西東京市立青嵐中学校 主任教諭)
- 亀井 愛

(三井記念美術館 教育普及担当)
- 星 博人

(福島県立保原高等学校 教頭)

グループワークサブファシリテーター

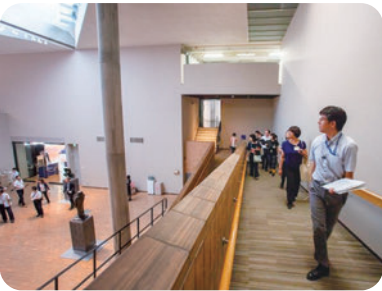
- 後藤 真理子

(千代田区立富士見小学校 主任教諭)
- 青木 加苗

(和歌山県立近代美術館 学芸員)
- 吉澤 菜摘

(国立新美術館 学芸課 主任研究員)
- 道越 洋美

(静岡県教育委員会静岡教育事務所 地域支援課 指導主事)



8月6日(月)		8月7日(火)	
 国立西洋美術館		 国立新美術館	
8:50	● 開門	9:30	● 開門
9:00	● 受付	9:40	● 受付
9:30	● 開講式	10:00	● 事例紹介① 「美術館鑑賞教室 ～4年間の学習を通して～」  伊藤 貴光 (東京都葛飾区西小菅小学校 教諭)
9:50	● 講演 「鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の造形や美術、美術文化等と豊かに関わる資質・能力の育成」  東良 雅人 (文部科学省初等中等教育局 視学官)		● 事例紹介② 『『アートと言葉』 ～「色」をテーマとした教科融合型学習への挑戦～』  永松 芳恵 (大分県津久見市立第一中学校 教頭)
10:40	● 移動・休憩		● 事例紹介③ 「表現と鑑賞のサイクル」  上原 悠介 (京都府立亀岡高等学校 教諭)
10:50	● グループワーク	12:00	● 昼食 12:10-13:00 (自由参加) アートカードワークショップ
12:30	● 昼食 自由観覧 (常設展)	13:10	● 講演 「美術文化と美術の文化」  神野 真吾 (千葉大学教育学部 准教授)
13:30	● グループワーク	14:10	● 移動・休憩
16:00	● 移動・休憩	14:20	● ワールドカフェ Theme 01 「こどもは、美術鑑賞を通して何を学ぶのでしょうか」 Theme 02 「鑑賞で得た学びは、社会でどう活かされるのでしょうか？」 Theme 03 「こどもが、社会で活かす力を美術鑑賞から学ぶために、私たちは何ができるのでしょうか？」
17:30	● 移動・休憩	16:00	● 移動・休憩
17:40	● 情報交換会	16:10	● 閉講式
19:00	● 終了	16:25	● 終了・解散
		16:40	● 試験 (教員免許状更新講習希望者のみ)
		17:35	● 終了

初の大阪開催

大阪・中之島にある国立国際美術館での初の開催となった。現代美術のコレクションが展示された地下ギャラリーを会場に、グループワークでさまざまな取り組みが行われた。吹き抜けのホールに設置されたコールドアの彫刻やミロの壁画に、地上からの自然光が射し込み、時間によって変化する光と影に注目した受講者も多かった。京都開催と同様に、指導者研修後にも当地での連携に役立つよう、大阪市の小中学校の先生方にファシリテーターの補助をしていただいた。

「同じ校種の他のグループワークについてもっと知りたい」との声から、グループワーク発表の後に校種別の振り返りセッションを行ったところ、グループのメンバーを超えての発言が活発に行われた。

2日目は国立国際美術館近くの大阪大学中之島センターで行った。

受講者数

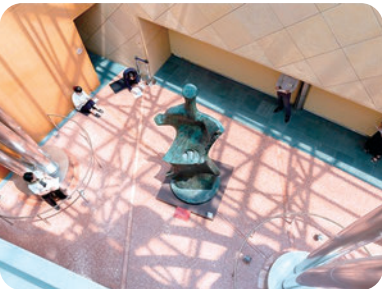
78名(小学校教諭17名、中学校教諭27名、高等学校教諭8名、中高一貫校教諭1名、特別支援学校教諭1名、養護学校教諭1名、指導主事7名、学芸員16名)

グループワーク ファシリテーター

- 奥村 高明
(日本体育大学 児童スポーツ教育学部 教授)
- 柴崎 裕
(聖学院大学 人文学部 児童学科 特任教授)
- 遊免 寛子
(兵庫県立美術館 学芸員)
- 青木 加苗
(和歌山県立近代美術館 学芸員)
- 濱脇 みどり
(西東京市立青嵐中学校 主任教諭)
- 松山 沙樹
(京都国立近代美術館 学芸課 特定研究員)
- 道越 洋美
(藤枝市立大洲中学校 教頭)
- 星 博人
(福島県立葵高等学校 教頭)

グループワーク ファシリテーター補助者

- 似内 達吉
(大阪市立田島中学校 教諭)
- 川島 愛
(大阪市立西淡路小学校 教諭)
- 高橋 武志
(大阪市立水都国際中学校・高等学校 非常勤講師)
- 中山 加奈子
(大阪市立本田小学校 教諭)
- 早川 奈緒子
(大阪市立榎本小学校 教諭)
- 東影 美香
(大阪市立大桐中学校 教諭)
- 村尾 美紀子
(大阪市立春日出中学校 教諭)
- 安永 佳世
(大阪市立友測中学校 教諭)



7月29日(月)		7月30日(火)	
 国立国際美術館		大阪大学中之島センター	
9:00	● 受付	9:00	● 受付
9:20	● 開講式	9:20	● 事例紹介① 『『どこでも美術館』と地域の特性を生かした題材における美術館との連携』  小川 将志 (福岡市教育委員会福岡市教育センター 指導主事)  鬼本 佳代子 (福岡市美術館 主任学芸主事)
9:40	● 講演 「これからの社会を生きる子供たちに求められる資質・能力の育成と鑑賞教育の意義」  東良 雅人 (文部科学省初等中等教育局 視学官)		● 事例紹介② 「地域連携における伝統文化教育——文化財の鑑賞授業」  和田 徹矢 (京都市立醍醐中学校 校長)  田中 直子 (總本山醍醐寺 学芸員・文化財担当)
10:30	● 移動・休憩		
10:40	● グループワーク		● 事例紹介③ 「心豊かな生き方を創造する 工芸の学びを目指して～A表現、B鑑賞の相互の関連から思考力、判断力、表現力を育むカリキュラム開発～」  神田 春菜 (東京学芸大学附属高等学校 教諭)
12:20	● 昼食 12:30-13:30 ・アートカードワークショップ(自由参加) ・コレクション展(自由観覧)	11:30	● 昼食 自由観覧(コレクション展「コレクション特集展示 ジャコメッティと」・企画展「抽象世界」)
13:40	● グループワーク	12:50	● 講演 「鑑賞と感情 『不寛容の時代』と美術／アート」  神野 真吾 (千葉大学教育学部 准教授)
16:10	● 移動・休憩	13:50	● 休憩・会場設営
16:20	● 作品前でグループワークの成果発表、振り返りセッション	14:00	● ワールドカフェ Theme 01 「鑑賞によって育まれる力は、これからの社会を生きる上で、どんな意味を持つのでしょうか」 Theme 02 「これからの社会を生きる上で意味を持つ鑑賞の力を育むために、私たちは何をすべきでしょうか」
17:30	● 移動・休憩	15:50	● 休憩
17:40	● 情報交換会	16:00	● 閉講式
19:00	● 終了	16:15	● 終了・解散
		16:35	● 試験(教員免許状更新講習希望者のみ)
		17:30	● 終了

コロナ禍での オンライン・シンポジウム

2020年は東京オリンピック・パラリンピックが開催される年であったので、夏の研修の時期をずらす策を検討していたが、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起こったため、研修は中止とし、15周年のシンポジウムを翌年2月にオンラインで開催することとなった。

この年、すべての美術館や学校はコロナによる多大な影響を受けて休館・休校を余儀なくされ、「オンラインという新しい日常」に踏み出すこととなった。美術館はさまざまなオンラインプログラムを打ち出した。一方、小中学校もGIGAスクール構想の前倒しを受け、ひとり1台タブレット端末の配布が進み、ICTを使った個別最適な学びを進めようとしていた。4組の事例紹介では、通信制高校や離島の中学校とのオンライン連携授業など、この状況をいち早く反映した事例が報告された。

基調講演は、初の海外事例として、台湾の国家文化芸術基金会理事長である林曼麗氏にオンラインでご登壇いただき、台北での美術館と学校を結ぶ連携授業「One Piece Museum」をご紹介いただいた。時代や文化、科目を横断する野心的な教育推進プログラムは、美術教育の枠を超えた総合教育としての鑑賞を象徴するものであった。

ウェブ配信視聴者数

325名



林曼麗氏



連携授業「One Piece Museum」

令和3(2021)年2月14日(日)



国立新美術館(配信拠点)

13:00	● 本日のシンポジウムの流れ ● 総司会：吉澤 菜摘 (国立新美術館 学芸課 主任研究員)
13:05	● 開講・主催者挨拶 ● 青木 早苗 (国立美術館 理事)
13:10	● 趣旨説明 ● 一條 彰子 (東京国立近代美術館 主任研究員)
13:25	● 基調講演① 「これからの社会を生きる子供たちに求められる資質・能力の育成と鑑賞教育の意義」 ● 東良 雅人 (文部科学省 初等中等教育局 視学官)
13:50	● 基調講演② 「One Piece Museum『百聞は一“件”に見に如かず』 時代、文化、分野を横断する美術館のコレクションと教育推進プログラム」 ● 林 曼麗 (国家文化芸術基金会 理事長 / 国立台北教育大学 名誉教授)
14:15	● 質疑応答
14:25	● 休憩
14:35	● 事例紹介 八王子市立陶鎔小学校 「あそびじゅつかん」の実践報告 ● 中根 誠一 (東京都東和市立第十小学校 教諭) N高と大原美術館の取り組み ● 園 利一郎 (角川ドワンゴ学園 経験学習部 部長) ● 柳沢 秀行 (大原美術館 学芸統括) どこにいても美術館とつながる ● 大黒 洋平 (東京都小笠原村立母島中学校 主任教諭) ● 一條 彰子 “つながる仕組み”の作り方 一病院内訪問学級と美術館の連携について— ● 郷 泰典 (東京都現代美術館 教育普及係長) ● アントニス きよみ (東京都立光明学園 教諭)
16:15	● 休憩
16:30	● シンポジストによる討議 討議テーマ「～美術館と学校 鑑賞教育の今と未来～」 ● モデレーター：東良雅人 (文部科学省 初等中等教育局 視学官) ● シンポジスト①：奥村高明 (日本体育大学 教授) ● シンポジスト②：松永 かおり (東京都教育庁 教育政策担当課長) ● シンポジスト③：中根 誠一 ● シンポジスト④：一條 彰子
17:30	● 閉会の挨拶 ● 終了

コロナ禍によって オンライン研修に変更

16年目となるこの年は、新型コロナウイルス感染状況を鑑み、グループワークは4会場（東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立国際美術館、国立工芸館）で分散開催し、講演等はオンラインで行うという、ハイブリッド開催を計画していた。しかし2021年秋、感染拡大の終息を見通せない状況を考慮し、すべてをオンラインで開催することに決まった。

ギャラリーでの鑑賞体験の代わりにオンラインによる対話鑑賞を行ったが、それを可能にしたのは、国立館の所蔵作品が高精細画像で見られるウェブ教材「鑑賞素材BOX」（詳しくはP.6を参照）と、すでにオンライン対話鑑賞を日常的に展開していた東京国立近代美術館の解説ボランティア、ガイドスタッフの存在であった。対話鑑賞後のグループワークは、先の4会場に分かれ、各館のサポートを受けながら、①主体的・対話的な深い学び、②個別最適な学びと協働的な学び、③ICT活用という3つの共通テーマをめぐってオンラインで行われた。

2009年から行っていた教員免許更新制度への対応は、制度が2022年から廃止と決まったため、終了した。

受講者数

87名（小学校教諭21名、中学校教諭18名、高等学校教諭9名、特別支援学校教諭1名、指導主事16名、学芸員22名）

グループワーク ファシリテーター

- 西村 德行
(東京学芸大学 総合教育科学系 教育実践創成講座 准教授)
- 松永 かおり
(世田谷区立砧南中学校 校長)
- 道越 洋美
(藤枝市立大洲中学校 教頭)
- 星 博人
(福島県立橋高等学校 教頭)
- 東良 雅人
(京都市総合教育センター 副所長)
- 青木 加苗
(和歌山県立近代美術館 学芸員)
- 渡邊 美香
(大阪教育大学 教育学部 准教授)
- 遊免 寛子
(兵庫県立美術館 学芸員)
- 星野 立子
(新潟市新津美術館 副主査 学芸員)

グループワーク サブファシリテーター

- 中根 誠一
(東大和市立第十小学校 教諭)
- 今井 陽子
(国立工芸館 工芸課 主任研究員)

オンライン対話鑑賞 ファシリテーター

- 深津 優希
(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
- 望月 香織
(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
- 矢野 美加
(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
- 三嶋 和美
(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
- 山本 さゆり
(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
- 沖田 紀子
(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
- 夏目 康子
(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
- 清水 与志絵
(東京国立近代美術館 ガイドスタッフ)
- 今井 陽子
(国立工芸館 工芸課 主任研究員)



11月29日(月)		12月5日(日)	
オンライン配信(受講者同時視聴)		オンライン配信(受講者同時視聴)	
9:00	● 受講者 Zoom 入室開始	12:30	● 受講者 Zoom 入室開始
9:30	● 開講式	13:00	● 研修2日目のプログラム説明
9:50	●  講演 「生活や社会と豊かに関わる資質・能力を育む これからの鑑賞教育について考える」  平田 朝一 (文化庁参事官(芸術文化担当) 付教科調査官)	13:05	●  事例紹介① 「教員だった 学芸員(わたし) が 美術館で考えていること」  島口 直弥 (浜松市教育委員会・浜松市美術館 指導主事兼学芸員)
10:40	● 休憩	●  事例紹介② 「表現と鑑賞 —結びあい 深めあい 得られるもの—」  武内 厚子 (東京都写真美術館 事業企画課 普及係長)  河野 路 (東村山市立南台小学校 主任教諭)	
10:50	●  グループに分かれての オンライン対話鑑賞		
12:10	● 昼食休憩		
13:10	●  グループワーク (東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、 国立国際美術館、国立工芸館の4会場の Zoom に受講者が 分かれて参加するオンライングループワーク)	●  事例紹介③ 「美術館や美術に関する施設等と連携して、 生徒が生活や社会の中の美術や美術文化 と豊かに関わる資質・能力を育むことを目 指す中学校美術科の取組」  前之園 礼央 (鹿児島大学教育学部附属中学校 教諭)	
15:40	● 休憩	14:45	● 休憩
15:55	● 各9グループのファシリテーターから グループワークについて報告	14:55	● ブレイクアウトルームに分かれての感想共有
16:35	● 事務連絡	15:25	● 休憩
16:40	● 終了	15:35	●  講演 「『虚』と『実』から考える美術鑑賞」  神野 真吾 (千葉大学教育学部 准教授)
		16:25	● 休憩・会場設営
		16:35	● ブレイクアウトルームに分かれての感想共有
		17:10	● ふりかえり 閉講式
		17:15	● 終了

3年ぶりの対面研修

コロナの影響が残る中、感染防止対策を万全にとりながらも、美術館での対面開催が再開された。全体の受講者数を60名以下に抑えたことに加え、ワールドカフェは、マスク着用や手指消毒のうえ、テーブルを移動しないテーブルトークという方法で行った。研修の直前にコロナの急激な感染拡大のため出張ができなくなった受講者4名には、研修後、録画ビデオを見ることで修了証書を発行した。

この年、独立行政法人国立美術館の本部機能として、国立アトリサーチセンター設置準備室が開室し、指導者研修の運営は同センターラーニンググループが継承しつつ、これまでどおり各国立美術館と協力して実施することとなった。研修の様子やグループワークでの鑑賞の深まり方がわかる2本の動画を作成してウェブサイトに掲載し、より多くの人に本事業を伝えることを狙いとした。

受講者数

54名(小学校教諭10名、中学校教諭16名、高等学校教諭5名、小中一貫校教諭2名、中高一貫校教諭1名、特別支援学校教諭2名、指導主事4名、学芸員14名)

グループワーク ファシリテーター

中根 誠一
(東大和市立第十小学校 主任教諭)

渡邊 美香
(大阪教育大学教育学部 准教授)

東良 雅人
(京都市総合教育センター 副所長)

松永 かおり
(世田谷区立砧南中学校 校長)

道越 洋美
(藤枝市立岡部中学校 教頭)

星 博人
(福島県立橋高等学校 教頭)

グループワーク ファシリテーター補助者

今井 陽子
(国立工芸館 工芸課 主任研究員)

芝 涼香
(国立国際美術館 学芸課 任期付研究員)

鈴木 智香子
(独立行政法人国立美術館 本部 特定研究員)

細谷 美宇
(東京国立近代美術館 企画課 研究員)

真住 貴子
(国立新美術館 学芸課 主任研究員)

山際 真奈
(東京国立近代美術館 企画課 任期付研究員)



8月1日(月)		8月2日(火)			
 国立西洋美術館		 国立新美術館			
8:50	● 開門	9:30	● 開門		
9:00	● 受付	9:40	● 受付		
9:30	● 開講式	10:00	■ 事例紹介① 「美術館と学校との連携による鑑賞プログラムの実践『ながさきART TRIP』 —わたしだけの地図— 学校と共創する美術で学ぶ平和教育」  山口 百合子 (長崎県美術館 事業企画グループサブリーダー 教育普及・生涯学習エデュケーター／ 長崎県教育委員会 学芸文化課 指導主事)		
9:50	 講演 「生活や社会の中の造形や美術、美術文化等と豊かに関わる資質・能力の育成に向けて —学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくり—」  平田 朝一 (文化庁参事官(芸術文化担当) 付教科調査官)				
10:40	● 移動・休憩				
10:50	 グループワーク				
12:30	● 昼食 自由観覧(常設展)				
13:50	 グループワーク				
16:20	● 移動・休憩	12:00	● 昼食		
16:35	 グループワークの成果発表  講評：平田 朝一 神野 真吾 (千葉大学教育学部 准教授)			12:50	 講演 「鑑賞と社会の関係～ゲルニカを例に～」  神野 真吾
17:30	● 終了				
		14:10	 テーブルトーク 「2日間のふりかえりと未来に向けて」		
		16:00	● 移動・休憩		
		16:20	● 閉講式		
		16:30	● 終了		

特別支援教育も視野に入れて

4年ぶりに新型コロナウイルスによる行動制限のない研修が、国立国際美術館で開催された。この年、グループワークに新たに、特別支援教育をテーマにしたグループが加えられた。特別支援学校の美術館活用は、子どもたちの障害の種類や程度に合わせた柔軟な対応が必要となる。まずは美術館と学校が互いの状況を知り、課題を見つけることから始め、今後もグループワーク内での議論を継続していくこととなった。

国立アートリサーチセンターの設立にあわせ、研修の報告書を一新し、受講していない方にも内容が伝わりやすいように大幅に改訂した。

受講者数

77名（小学校教諭14名、中学校教諭15名、高等学校教諭9名、特別支援学校教諭4名、養護学校教諭3名、盲学校教諭1名、指導主事8名、学芸員23名）

グループワーク ファシリテーター

- 渡邊 美香
(大阪教育大学 教育学部 准教授)
- 吉澤 菜摘
(国立新美術館 学芸課 教育普及室長)
- 中根 誠一
(世田谷区立瀬田小学校 主任教諭)
- 東良 雅人
(京都市総合教育センター 副所長)
- 道越 洋美
(藤枝市立岡部中学校 教頭)
- 松永 かおり
(世田谷区立砧南中学校 校長)
- 星 博人
(福島県立会津学鳳中学校・高等学校 副校長)
- 亀井 幸子
(徳島県立近代美術館 主席)
- 松山 沙樹
(京都国立近代美術館 学芸課 研究員)

グループワーク ファシリテーター補助

- 原 泉
(国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 任期付研究員)
- 宮下 咲
(国立新美術館 学芸課 特定研究員)
- 酒井 敦子
(国立西洋美術館 学芸課 教育普及室長)
- 秋田 美緒
(国立西洋美術館 学芸課 任期付研究員)
- 鈴木 智香子
(国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 研究員)
- 細谷 美宇
(東京国立近代美術館 企画課 研究員)
- 今井 陽子
(国立工芸館 工芸課 教育普及室長)
- 稲庭 彩和子
(国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 主任研究員)



8月7日(月)		8月8日(火)	
国立国際美術館		大阪府立国際会議場(グランキューブ大阪)	
9:20	受付	9:10	受付
9:50	開講式・研修概要・オリエンテーション	9:30	挨拶等
10:10	講演 「生活や社会の中の造形や美術、美術文化等と豊かに関わる資質・能力を育む鑑賞教育」 平田 朝一 (文化庁参事官(芸術文化担当) 付教科調査官)	9:40	事例紹介① 『『出会いを紡ぐ』—アーティストや美術館、大学、NPO 等との連携を通して—』 江原 貴美子 (港区立荻小学校 図工専科教員) 事例紹介② 「学校連携プロジェクトチームの取組」 篠原 英里 (八戸市美術館 学芸員) 安田 真理子 (八戸市美術館 学校連携コーディネーター) 事例紹介③ 『『つながり』を意識した鑑賞学習—美術館と連携した知的障害等のある児童生徒との実践—』 高橋 智子 (静岡大学 教育学部 准教授)
11:00	グループワーク		
12:50	昼食 自由観覧(コレクション展)		
14:10	グループワーク		
16:40	移動・休憩		
16:50	グループワークの成果発表 講評：平田 朝一 神野 真吾 (千葉大学教育学部 准教授)	11:40	昼食
		12:40	講演 「創造性の根源としての鑑賞」 神野 真吾
18:00	終了	13:30	休憩
		13:45	ワールドカフェ Theme 01 「鑑賞によって育まれる力とは何でしょうか？」 Theme 02 「すべての子どもたちが美術館や作品を通して学ぶために私たちは何をすべきでしょうか？」
		15:30	休憩
		15:40	閉講式
		15:50	終了

研修全体テーマを設ける

東京国立近代美術館と国立新美術館で行われたこの年の研修には、約100名が集まり、コロナ後最大規模となった。

この年初めて、研修全体を貫くテーマ「美術鑑賞で何が起きているのか」が設けられた。本研修で目指す鑑賞は、単に知識を与える一方的なものではなく、鑑賞者自らが主体的にかかわることによって解釈を深める双方向的な体験である。鑑賞している最中に、鑑賞者が多様な視点に気づき、触発され、変容していくことが重要なので、研修の中でそのポイントを見つけ出してもらうことを期待してこのテーマとなった。

また、この回では研修での成果を可視化するために、受講者に事前アンケートで「鑑賞教育を進めていくために課題と感じていること」を書いてもらい、事後アンケートで課題について再び聞いたところ、「課題が解決した」、「糸口が見つかった」との回答が多く寄せられた。

受講者数

98名(小学校教諭21名、中学校教諭16名、高等学校教諭16名、中高一貫校教諭2名、特別支援学校教諭6名、養護学校教諭1名、指導主事13名、学芸員22名、その他1名)

研修テーマ

美術鑑賞で何が起きているのか

グループワーク ファシリテーター

- 西村 德行
(東京学芸大学教職大学院 教授)
- 渡邊 美香
(大阪教育大学 教育学部 准教授)
- 中根 誠一
(世田谷区立瀬田小学校 主任教諭)
- 今井 陽子
(国立工芸館 工芸課 教育普及室長)
- 東良 雅人
(京都市総合教育センター 指導室長)
- 道越 洋美
(藤枝市教育委員会 教育政策課 主席指導主事)
- 松永 かおり
(世田谷区立砧南中学校 校長)
- 星 博人
(福島県立会津学鳳中学校・高等学校 副校長)
- 亀井 愛
(公益財団法人三井文庫 三井記念美術館 運営部主任 教育普及担当)
- 鈴木 智香子
(国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 研究員)
- 亀井 幸子
(Jayalanka Foreign Employment Agency lecturer)

グループワーク サブファシリテーター

- 宮下 咲
(国立新美術館 学芸課 特定研究員)
- 阿部 楓子
(国立国際美術館 学芸課 特定研究員)
- 稲庭 彩和子
(国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 主任研究員)
- 日南 日和
(国立工芸館 工芸課 研究補佐員)
- 松山 沙樹
(京都国立近代美術館 学芸課 研究員)
- 渡川 智子
(京都国立近代美術館 学芸課 特定研究員)
- 秋田 美緒
(国立西洋美術館 学芸課 任期付研究員)
- 藤吉 祐子
(国立国際美術館 学芸課 教育普及室長)
- 白濱 恵里子
(国立西洋美術館 学芸課 特定研究員)



7月29日(月)		7月30日(火)	
 東京国立近代美術館		 国立新美術館	
8:50	● 開門	9:30	● 開門
9:00	● 受付	9:40	● 受付
9:30	● 開講式	10:00	● 国立美術館の教育普及事業紹介
9:50	●  講演 「これからの社会を生きる子どもたちに求められる資質・能力の育成と鑑賞教育」  平田 朝一 (文化庁参事官(芸術文化担当) 付教科調査官)	10:30	●  事例紹介① 「タブレット端末と美術館の作品コンテンツを活用した鑑賞授業について」  堀川 紘子 (京都市立向島秀蓮小中学校 教諭)  藤田 龍平 (京都市京セラ美術館 事業企画推進室事務企画グループ ラーニング担当、アーティスト)
10:40	● 移動・休憩	11:10	● 休憩
10:50	●  グループワーク	11:20	●  事例紹介② 「美術館と連携し『表現』と『鑑賞』の一体化を図った実践を通して」  更科 結希 (北海道弟子屈町立弟子屈中学校 美術教諭)
12:30	● 昼食 自由観覧(所蔵作品展「MOMAT コレクション」)	 事例紹介③ 「教員と協働して行う教育活動 高校プログラム」  藤島 美菜 (愛知県美術館 主任学芸員)	
13:50	●  グループワーク	12:40	● 昼食
16:10	● 移動・休憩	13:30	●  講演 「自由な鑑賞とそれを拘束する文脈の関係について」  神野 真吾
16:20	●  グループワークの成果発表  講評：平田 朝一 神野 真吾 (千葉大学教育学部 准教授)	14:20	● テーブル移動・休憩
17:30	● 終了	14:40	●  ワールドカフェ <u>Theme 01</u> 「美術鑑賞で何が起きているのでしょうか？」 <u>Theme 02</u> 「学びにつながる美術鑑賞を行うために、私たちは何をすべきでしょうか？」
		16:30	● 閉講式
		16:45	● 終了

国立美術館の教育普及事業等に関する委員会 委員 一覧

委員会は、国立美術館の教育普及事業および研修事業の在り方について検討・協議するため、2005年12月に設けられた。委員は、小学校教員、中学校教員、高等学校教員、大学教員、教育委員会、文部科学省（文化庁）職員等から、10年の任期で6名～10名に委嘱される。年に2回程度開催され、指導者研修の評価や提案を行うほか、研修のファシリテーターや講師を務めることもある。

岡部 幹彦（2006年～2008年）

- 文化庁文化財部美術学芸課美術館・歴史博物館室 美術品登録調査官（2006年～2008年）

奥村 高明（2006年～2017年）

- 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官（併）文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官（2006年～2010年）
- 聖徳大学 児童学部 児童学科 教授（2011年～2015年）
- 聖徳大学 児童学部 児童学科長 教授 芸術学博士（2016年）
- 聖徳大学 児童学部長 教授 芸術学博士（2017年）

柴崎 裕（2006年～2010年）

- 多摩市立多摩第三小学校 教諭（2006年～2009年）
- 多摩市立北豊ヶ丘小学校 教諭（2010年）

長田 謙一（2006年～2017年）

- 首都大学東京 システムデザイン学部 インダストリアルアートコース 教授（2006年～2008年）
- 首都大学東京 システムデザイン学部 芸術学研究室 教授（2009年～2012年）
- 名古屋芸術大学 美術学部・同大学院 教授（2013年～2017年）

西村 德行（2006年～2017年）

- 国立大学法人筑波大学附属小学校 教諭（2006年～2013年）
- 国立大学法人東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系 美術・書道講座 准教授（2014年～2017年）

野口 玲一（2006年～2010年）

- 文化庁文化部芸術文化課 芸術文化調査官（2006年～2010年）

松永 かおり（2006年～2017年／2020年～現在 ※2025年時点）

- 目黒区立第八中学校 教諭（2006年～2007年）
- 東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課 指導主事（2008年～2011年）
- 東京都教育庁指導部指導企画課 指導主事（2012年～2013年）
- 町田市立金井小学校 副校長（2014年～2015年）
- 東京都教職員研修センター 研修部 専門教育向上課 統括指導主事（2016年）
- 東京都教職員研修センター 研修部 教育経営課 統括指導主事（2017年）
- 東京都教育庁総務部 教育政策担当課長（2020年）
- 世田谷区立站南中学校 校長（2021年～2024年）
- 世田谷区立玉川中学校 校長（2025年～）

三澤 一実（2006年～2017年）

- 文教大学 教育学部 助教授（2006年～2007年）
- 武蔵野美術大学 教授（2008年）
- 武蔵野美術大学 教職課程研究室 教授（2009年～2017年）

山田 一文（2006年～2017年）

- 国立大学法人埼玉大学教育学部附属中学校 教諭（2006年～2010年）
- 埼玉県立総合教育センター（2011年）
- 埼玉県立総合教育センター 指導主事（2012年～2013年）
- 埼玉県教育局南部教育事務所 指導主事（2014年～2015年）
- 戸田市立新曽中学校 教頭（2016年）
- 戸田市立美笹中学校 校長（2017年）

横山 圭介（2006年）

- 渋谷区教育委員会事務局指導室 指導主事

小野 範子（2007年～2017年）

- 神奈川県教育委員会・教育局子ども教育支援課 指導主事（教育指導担当）（2007年～2008年）
- 茅ヶ崎市教育委員会 教育総務部 学校教育指導課 指導主事（2009年）
- 茅ヶ崎市教育委員会 教育推進部 学校教育指導課 指導主事（2010年）
- 茅ヶ崎市立小和田小学校 教頭（2011年～2013年）
- 茅ヶ崎市立緑が浜小学校 教頭（2014年～2017年）

松本 純子（2009年）

- 文化庁文化財部美術学芸課美術館・歴史博物館室 美術品登録調査官（2009年）

濱脇 みどり（2011年～2020年）

- 西東京市立田無第一中学校 教諭（2011年～2014年）
- 西東京市立青嵐中学校 教諭（2015年～2017年）
- 西東京市立青嵐中学校 主任教諭（2018年～2020年）

東良 雅人（2011年～2022年）

- 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官（併）国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官（2011年～2017年）
- 文部科学省初等中等教育局 視学官（併）文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官（併）国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官（2018年）
- 文部科学省初等中等教育局 視学官（併）文化庁参事官（芸術文化担当）付教科調査官（併）初等中等教育局教育課程課 教科調査官（併）国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官（2019年～2020年）
- 京都市総合教育センター 副所長（兼）同研究課長事務取扱（2021年～2022年）

南 育子（2011年～2014年）

- 墨田区立業平小学校 教諭（2011年～2014年）

神野 真吾（2015年～2024年）

- 国立大学法人千葉大学 教育学部 准教授（2015年～2024年）

星 博人（2016年～現在 ※2025年時点）

- 福島県立保原高等学校 教頭（2016年～2018年）
- 福島県立葵高等学校 教頭（2019年～2020年）
- 福島県立橘高等学校 教頭（2021年～2022年）
- 福島県立会津学鳳中学校・高等学校 副校長（2023年～2024年）
- 福島県立喜多方高等学校 校長（2025年時点～）

渡邊 美香（2016年～現在 ※2025年時点）

- 国立大学法人大阪教育大学 教育学部 准教授（2016年～）

後藤 真理子（2018年）

- 千代田区立富士見小学校 主任教諭（2018年）

道越 洋美（2018年～現在 ※2025年時点）

- 静岡県教育委員会静岡西教育事務所 地域支援課 指導主事（2018年）
- 藤枝市立大洲中学校 教頭（2019年～2021年）
- 藤枝市立岡部中学校 教頭（2022年～2023年）
- 藤枝市教育委員会 教育政策課 主席指導主事（2024年～）

廣田 和人（2019年）

- 国立大学法人埼玉大学教育学部附属小学校 教諭（2019年）

中根 誠一（2021年～現在 ※2025年時点）

- 東大和市立第十小学校 教諭（2021年）
- 東大和市立第十小学校 主任教諭（2022年）
- 世田谷区立瀬田小学校 主任教諭（2023年～）

平田 朝一（2021年～現在 ※2025年時点）

- 文化庁参事官（芸術文化担当）付教科調査官（併）文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官（併）国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官（2021年～）

20周年に寄せて

この研修に縁の深い方々からメッセージをいただきました。研修の立ち上げから関わってくださった方、委員やグループワークのファシリテーターとしてお世話になった方、いち受講者として参加し、その後講師やファシリテータになられた方など、様々な方が指導者研修についての思いを寄せてくださっています。

私と指導者研修

平成18年度からスタートした指導者研修が、今年度で20周年を迎えました。長年、務めさせていただいた委員として、また、東京国立近代美術館で開催された第1回目の参加者としても感慨深いものがあります。初年度、京都市の中学校美術科担当の指導主事であった当時、学校における鑑賞教育は現在のような状態ではなく、単に表現のための補助的な役割に終始していたり、知識の暗記再生的な学習であったりしたことも少なくありませんでした。そして誰もが鑑賞教育や美術館との連携を模索していた時代に登場したのがこの研修会だったわけです。

過去に出された本研修会の「5年間の振り返り」では、特に初年度は「手探りの一年目」と表され当時の苦労が伺えます。しかしながら主催者の苦悩とは反対に参加者であった私は、ワクワク感が止まらない3日間でした。見るもの聞くものが新鮮で、現在も続いているグループワークにより鑑賞教育を軸にした人と人とのつながりが生まれました。

あれから20年、コロナ禍やGIGAスクール構想による子ども一人一台端末の実現などにより、美術館や学校における鑑賞教育を取り巻く環境も劇的な変化を遂げています。これまでの本研修会の取組がこれからの鑑賞教育の礎となることを願ってやみません。



東良 雅人

京都市総合教育センター 指導室長／京都市立芸術大学 客員教授
受講者 講師 ファシリテーター 委員

指導者研修から得たもの

私は、第一回目の指導者研修に中学校教諭として参加させていただきました。そこで、生徒の立場で本物の美術作品を鑑賞し、自分の考えをもった後に他の参加者の考えを聞いて自分にはなかった視点や考えをもつ経験ができ、同時に、教師の立場でファシリテーターの方の鑑賞の進め方や運営側の研修の進め方も知ることができました。この経験から、学校では鑑賞の授業を改善し、美術館とも連携を行ってきた。特に美術館で備前焼の鑑賞授業を行う際には、学芸員の方と生徒の既習の状況や授業の目標等について事前に打ち合わせをすることで、展示作品や展示場所の検討など、自分だけではできない連携の授業を実現することができました。現行の中学校学習指導要領では、美術科の目標に「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と示しています。このことから、鑑賞の学習をさらに充実していくことは大切であると考えます。今後この研修を通して、参加された方々に美術の鑑賞に関した多くの出会いがあり、学校と美術館の連携や各校での鑑賞の授業がより効果的になっていくことを期待しています。



平田 朝一

文化庁参事官（芸術文化担当）付 教科調査官
受講者 講師 委員

立ち上げの頃

2005年文科省の教科調査官だった頃、国立美術館理事長がやってきて三つのミッションを授かりました。①全国研修会の実施 ②先導的教材の開発、③教育普及に関する本の出版です。私は専門委員会の主査として提言をまとめ、そのまま研修事業を推進する委員会の座長となりました。当時は国立館の統合などの動きがあった、それを阻止するための必要だと聞かされていたので、張り切った思い出があります。①と②は、自分も学芸員の頃にやっていた対話鑑賞やアートカードになりましたが、そもそも鑑賞教育が盛んではなかった時代です。全国指導主事会議で「鑑賞教育の実践例を提出して」という指示を出す、「ない！」という声が返ってきていました。それもあって、③は実現に至らず理事長は残念そうでしたが、数年後、委員会のメンバーと海外美術館の教育普及書を翻訳出版できたので、個人的にはやり遂げられたかなと思っています。



奥村 高明

武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所 客員研究員
委員 講師 ファシリテーター

鳥肌が立つ

平成20年度の指導者研修でギャラリートークを担当した時である。近くの中学校から11名の生徒に来てもらい、私は初対面の生徒と柳原義達氏の彫刻作品《犬の唄》を鑑賞した。呼ばれた生徒も大変だ。大勢の見学者に取り囲まれて様子をつぶさに見られている。さらに、見知らぬオジサンがファシリテーターだ。「この彫刻、《犬の唄》っていうタイトルなんだけど、何で《犬の唄》なのかよくわからないんだ。だから若いみんなに聞いてみようと思ったんだ」と、私は口火を切った。しばらく考えた子どもたちは、ぼつりぼつりと、こんな感じがすると語り始めた。終盤で制作年について皆で考えてみた。この問いによって生徒の発言が変わっていく。ある男子生徒が作品に込めた作者の思いを語り始めた。全身に電気が走り鳥肌が立ったのはこの時だった。彼の発言は事前に調べておいた批評家の批評と全く一緒なのだ。終わった後、その子にこの作品を知っていたのか聞いたら、初めて見た作品だと言う。この時、あらためて対話の力と、子どもたちの見る力のすごさを実感した。

指導者研修の立ち上げから関わらせていただき、十数年間にわたりこのような体験をさせていただいたのが自分の宝である。



三澤 一実

武蔵野美術大学 教授
委員 ギャラリートーク ファシリテーター 講師

出会うこと 向き合うこと つなぐこと

私は平成20年、第3回の研修に受講者として参加をさせていただきました。当時、私のグループのファシリテーターを務めてくださったのが、松永かおり先生であり、その時に会った作品が伊東深水の「露」。着物姿の三人の女性が庭で語らう美しい作品です。20年経った今も、私の記憶に鮮明に思い出されるのは、その場の進行の一つ一つというよりは、当時の松永先生のファシリテーターとしてのたたずまいです。「あの時の松永先生は着物を着ていましたか？」とご本人に質問をしてしまうほどです（そんなわけではないのですが）。

それから11年後の平成30年から私はファシリテーターを務めさせていただきました。作品との出会いは、毎年ワクワクの連続であり、そこに参加してくれる研修員の皆様と私を結びつけてくれる宝物のようなものです。そして、今年8月、20回という節目の年、私は自分の行うグループワークを松永かおり先生に講評していただくという機会に恵まれました。出会いがあり、ご縁があり、そういった小さなできごとを大事にし、皆が紡いでいくことは、やがてとてつもない感動と大きな奇跡を生むと思います。だからこそ、私はこれからも鑑賞教育が何を生み出すのかを、しっかりと次の世代につなげていきたいと思っています。



道越 洋美

藤枝市教育委員会 主席指導主事
受講者 委員 ファシリテーター

みる楽しさをもっと

思えばあつという間の20年ですね。鑑賞について考える機会は、もちろんそれまでもありました。しかしこの研修は学校の先生や美術館の学芸員、教育委員会の指導主事が一堂に会して鑑賞について一緒に語り合う、何とも贅沢な時間でした。第一回目の研修は内容そのものも手探りの中、様々な考えや立場の人が集まり、直球の「本音トーク」が炸裂しました。グループの話し合いは白熱し、ファシリテーターの私は、制御不能となったグループワークを、ずっと汗（冷や汗）をかいて眺めるしかありませんでした。でも様々な意見が交わされたからこそ、鑑賞のあり方についてみてきたこともありました。私にとっては苦くも、鑑賞に出会えた原点だと思っています。いま全国の学校では、鑑賞活動が益々広がりを見せています。それは鑑賞についてじっくりと考える機会を全国の先生、学芸員、指導主事に提供し続けてきた、この指導者研修の大きな功績だと思っています。さらに欲をいうと、もっと多様な鑑賞のあり方を学校現場では求められています。みる楽しさをもっとあると思うのです。みる楽しさを共有できるこの様な研修会は、これから益々必要になってくると感じています。「そんな見方があったのか！」「その感じ方わかる！」直接出会い、語り合うからこそ見えてくるものがあります。一度お休みになるようですが、指導者研修の華麗なる復活を心から願っております。こんなに面白い研修、他にないですからね。



西村 徳行

東京学芸大学教職大学院 教授
委員 ギャラリートーク ファシリテーター 講師

「みる」から生まれるもの 鑑賞体験を深めるために

私が参加したのは平成20年度3回目の研修で、現在より1日長い3日間で行われていました。ひとつの作品をみて、考え、話しあったことは、私に多くの気付きを与えてくれました。特にじっくり作品を鑑賞する時間を確保することの大切さです。子どもたちにもすぐ発言を求めるのではなく、作品に向き合う時間を持ち、考えてもらうことの重要性を再認識しました。

もうひとつは、知識は不要なものではないということでした。当時「対話による鑑賞」が定着しつつある時期で、自由な発想を重視される一方、知識は必要ないという考え方もありました。しかし、作品背景や込められた想いを知ること、自由な発想を促し、子どもたちの世界を広げ深める手がかりになると感じました。

研修に参加することで、改めて作品をみることの楽しさや、美術館を活用した鑑賞について考えるきっかけを得て、様々な人とのつながりにも恵まれました。その後、ファシリテーターとしても研修に関わるようになり、受講者とともに毎回鑑賞について考える機会をいただいています。

子どもたちの感性は一人ひとり異なり、鑑賞や教育の在り方も一つではありません。これからも「みること」を通して生まれる学びを探り続けたいと思います。



亀井 愛

三井記念美術館 主任（教育普及）
受講者 ファシリテーター 講師

指導者研修を通して得たもの

この研修を構築する会議では、「美術館側の皆さんには、学校の教育課程や授業、各学校種の違いや鑑賞教育の位置付けを理解してもらうこと」、「学校側の立場では、美術館側の持つ連携の目的、学校に求めること、連携する際の課題を理解すること」など、双方の歩み寄りから始まったことを覚えています。そうした議論を経て生まれたこの指導者研修が20年という長い歴史を紡ぎ、全国各地で連携した鑑賞教育の充実が図られてきたことや、学校での児童・生徒主体の鑑賞授業に大きく影響を与え、質的向上に資することができたことは、本当に大きな喜びです。

長きにわたって研修に関わらせていただいた私自身の思い出は、何といってもグループワークを通してたくさんの方の受講者の皆さんと出会い、今もなお、その繋がりが生きていることです。鑑賞教育のあり方を軸にたくさんの方の語り合い、そこから生まれた絆は研修が終わっても個人的な繋がりととなり、その後の活動を伝え合う仲間ができました。きっとこれからもその関係は続き、お互いに「美術館と連携した鑑賞教育の充実」に向けた情報共有が行われていくことだと思っています。



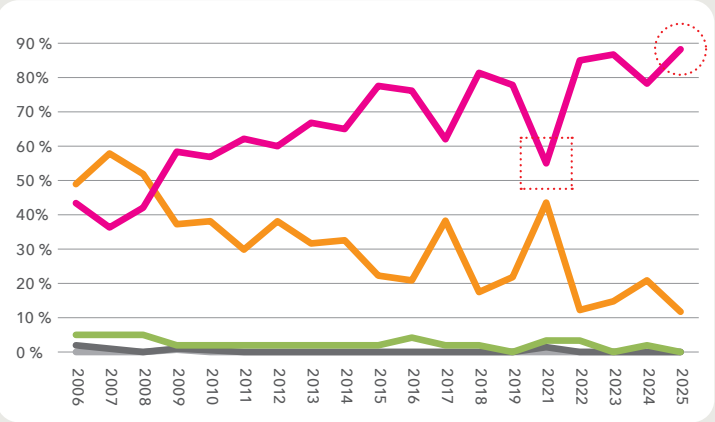
松永 かおり

世田谷区立玉川中学校 校長
委員 ギャラリートーク ファシリテーター

過去のアンケート結果の統計

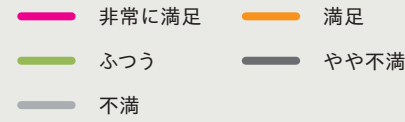
「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」では、2006年度の初回から、毎年受講者のみなさんにアンケートを実施してきました（2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大のため中止するが、オンラインで「15周年記念シンポジウム」を開催しました）。そこで、受講者のアンケートの結果をもとに、これまでの研修の推移を、様々な側面からグラフでご紹介します。

研修全体の総合評価

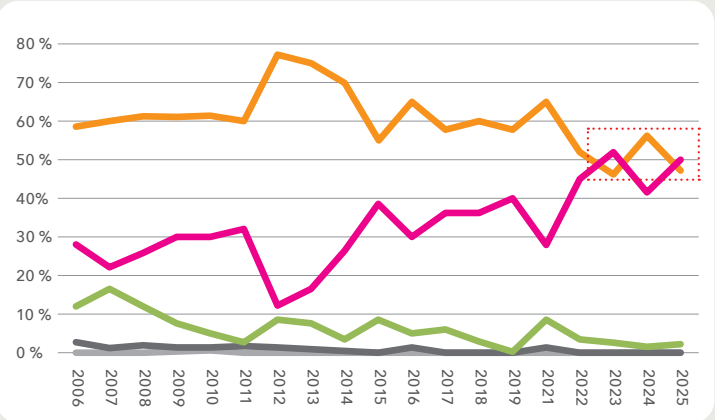


POINT

- ・2025年には「非常に満足」と回答した割合が過去最高の88%を記録しました。
- ・2006年から2025年にかけて、研修に対する満足度は増加傾向にあり、特に2015年以降は「非常に満足」と回答する割合が増加し、平均評価が高くなっています。
- ・一方、2021年は一時的に評価が落ち込んだ年であり、これはコロナ禍の影響によりオンラインで実施されたことが要因と考えられます。

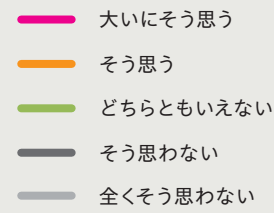


能力（知識・スキル）が向上した

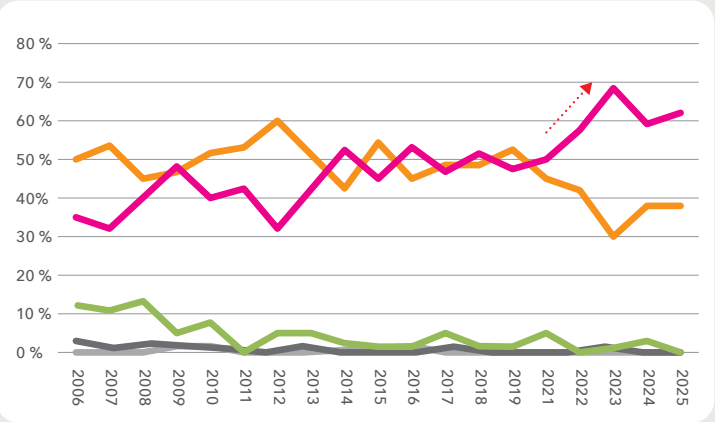


POINT

- ・2012年以降、「大いに思う」と回答する割合は増加傾向にあります。特に2022年から2025年にかけては、その割合が40%を超える年が続いています。

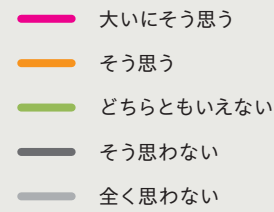


研修内容は職場で活用できる

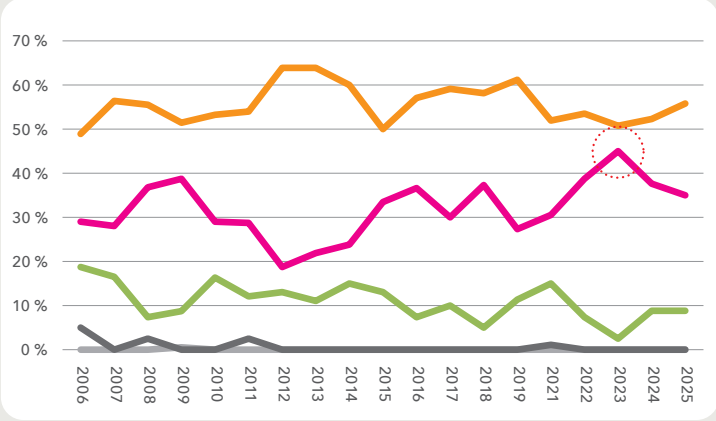


POINT

- ・「大いに思う」と回答する割合は年々上昇傾向にあり、特に2022年以降は57%以上の高い水準を維持しています。
- ・2023年には「大いに思う」が69%に達し、過去最高を記録しました。

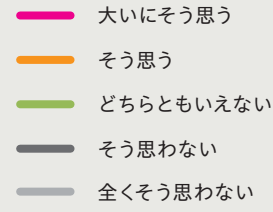


研修内容を地域の学校や美術館に広く還元できる

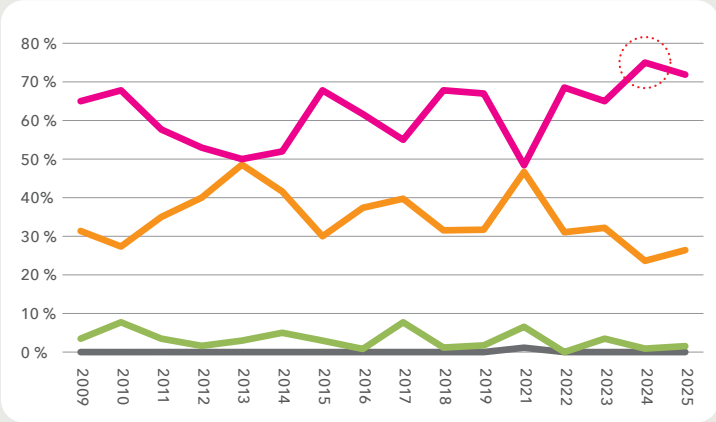


POINT

- ・2023年は、「大いに思う」と回答する割合が特に高く、地域の学校や美術館への還元を実感する傾向が強まっていることがうかがえます。

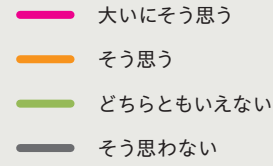


同僚・知人にもこの研修を薦めたい



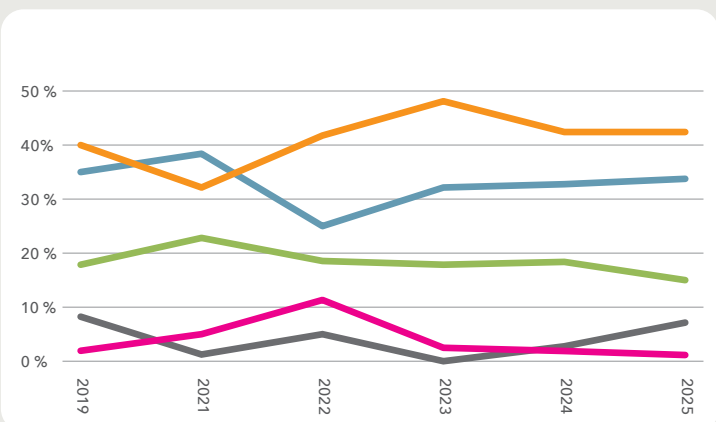
POINT

- ・この質問項目は2009年から追加されました。
- ・2015年、2022年、2024年は「大いに思う」と回答した割合が特に高く、受講者の満足度や他者に薦めたいという意欲が強く表れた年となりました。
- ・中でも2024年は、「大いに思う」が過去最高の75%に達しました。



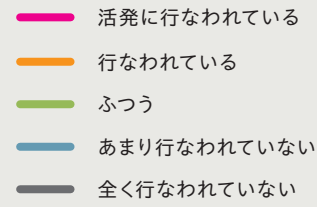
※「全く思わない」は全年度において0%だったため割愛

あなたの地域では、本研修のような事業や、鑑賞教育が行なわれていますか？



POINT

- ・地域によって、研修事業や鑑賞教育の実施状況に差が見られ、取り組みの度合いにばらつきがあることが明らかになっています。



※ 分析対象はいずれも全受講者の回答の割合 (%)

令和 7 年度 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修
2025 年 8 月 4 日（京都国立近代美術館）～ 8 月 5 日（京都テルサ）
主催：独立行政法人国立美術館 共催：文化庁

講演

平田 朝一*1

文化庁参事官（芸術文化担当）付教科調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官（併）
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官（併）

神野 真吾

千葉大学教育学部 准教授

事例紹介

山本 裕史

東京都立足立特別支援学校 教諭

古藤 陽

横浜美術館 教育普及グループ エducーター／学芸員

万木 麻里

横浜市立汐見台中学校 教諭

端山 聡子

東京国立近代美術館 企画課 教育普及室長

大浦 美咲

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 教育普及担当

ファシリテーター

西村 德行

東京学芸大学教職大学院 教授

渡邊 美香*1

大阪教育大学 教育学部 准教授

中根 誠一*1

世田谷区立瀬田小学校 主任教諭

東良 雅人

京都市総合教育センター 指導室長

道越 洋美*1

藤枝市教育委員会 教育政策課 主席指導主事

星 博人*1

福島県立喜多方高等学校 校長

鈴木 智香子

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 研究員

亀井 幸子

Jayalanka Foreign Employment Agency Lecturer /
徳島県立近代美術館 アートイベントサポーター

*1 国立美術館の教育普及事業等に関する委員会 委員

*2 サブファシリテーター

*3 グループワーク成果発表 記録・執筆

※所属は研修開催当時

国立美術館の教育普及事業等に関する委員会委員

松永 かおり*1

世田谷区立玉川中学校 校長

運営スタッフ

一條 彰子

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ グループリーダー

鈴木 智香子

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 研究員

濱野 絵美

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 研究補佐員

古澤 美久

独立行政法人国立美術館 本部事務局 総務企画課 係長（研修担当）

五十嵐 仁映

独立行政法人国立美術館 本部事務局 総務企画課 事務補佐員（研修担当）

端山 聡子

東京国立近代美術館 企画課 教育普及室長

齊藤 佳代*2

東京国立近代美術館 企画課 教育普及室 任期付研究員

山本 桃子*3

東京国立近代美術館 企画課 教育普及室 任期付研究員

今井 陽子*2

国立工芸館 工芸課 教育普及室長

日南 日和*2

国立工芸館 工芸課 特定研究員

牧口 千夏

京都国立近代美術館 学芸課 教育普及室長

松山 沙樹

京都国立近代美術館 学芸課 研究員

渡川 智子

京都国立近代美術館 学芸課 特定研究員

西田 恭子

京都国立近代美術館 総務課 室長

町田 絢香

京都国立近代美術館 総務部 係員（事業担当）

土山 里子

京都国立近代美術館 総務課 特定研究員

津田 朋彦

京都国立近代美術館 学芸課 情報研究補佐員

秋田 美緒*2

国立西洋美術館 学芸課 任期付研究員

飯田 有季

国立西洋美術館 学芸課 研究補佐員

藤吉 祐子

国立国際美術館 学芸課 教育普及室長

鬼本 佳代子*2・3

国立国際美術館 学芸課 任期付研究員

吉澤 菜摘

国立新美術館 学芸課 教育普及室長

宮下 咲*2

国立新美術館 学芸課 特定研究員

令和 7 年度

美術館を活用した鑑賞教育の充実のための
指導者研修 報告書

編集・デザイン

Neki inc.

撮影

成田 舞

Neki inc.

川口 芽依

Neki inc.

編集・執筆

一條 彰子

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ リーダー

濱野 絵美

国立アートリサーチセンター ラーニンググループ 研究補佐員

ヘメンディングー綾

発行日

2025年10月24日

発行

独立行政法人国立美術館

独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター

〒102-0073 東京都千代田区九段北 1-13-12 北の丸スクエア 2 階
Tel 03-6910-0637（ラーニンググループ 代表）
mail info.learning@artmuseums.go.jp
web https://ncar.artmuseums.go.jp/

Copyright © 2025 National Center for Art Research, Japan
ISBN 978-4-911341-12-4

